

中 齋

新編法華經

梅玉道善齋



花翁豊國画

松竹各座の 共通観覧切手

今回好劇家各位の御便利を圖り、松竹合名社經營各地劇場共通観覧切手を發賣仕候間續々御用命の程奉希上候

一、観覧切手は

種類	壹圓。	貳圓。	參圓。	五圓。
拾圓。	拾五圓。	貳拾圓。	五拾圓。	

の八種にて切手ミ包裝は優美にして、四季折々の召上り物や運動場各賣店の御買上品及本家茶屋直營案内所等一切の御支拂に通用致候

一、観覧切手は本社經營の各地劇場に通用致候

一、観覧切手の様式は、例へば拾圓切手なれば壹圓券拾枚、壹圓切手なれば貳拾錢五枚を添付しあれば御入用だけ切取りて御支拂になる仕組に御座候

一、観覧切手は左記の發賣所にて發賣仕候、電話にて御注文被下候は、何程にても迅速御届可申上候

發賣所

大坂市南區久左衛門町八番地	松竹合名社
京都市河原町蛸薬師上ル	松竹合名社
大坂市河原町道頓堀	角座
大坂市東區高麗橋通心齋橋筋南入	ブレイガイド

松竹合名社經營の各地劇場に於て共通いたします

梅玉追善興行に際して

(梅玉の印象)

白井松次郎

梅玉の印象―それを私に語るしめらば言下に故人は「情」の人であつたミ答へやう、ほんたうにその「情」の人ミいふ一語に云ひつくされるのである。

その一好例としてこんなことをフト思ひ出した。今から思へば丁度二昔明治四十年の十月は道頓堀角座に故人が福助から梅玉を、今の福助が政治郎から福助をそれ〴〵襲名したのである、出し物は「矢口の渡し」で梅玉の頓兵衛、福助のお舟、それに鷹治郎が大藏でつき合つてゐる。「口上」は當時の關西劇壇の大立者が全部顔を揃えてこのめぐまれた親子のために綺羅星の如くに居並んだ。その幕が開いたゞけても、見物は初日から熱狂した。そして初日の「口上」の舞臺でいよ〴〵梅玉が「隅から隅まで……ずい」ミの口上を述べなければならぬ正念場ミなつた。

高砂家の統領の口からそんな香ばしい口上が洩れるかミ、見物席はその時水でも打つた様なしつけさに返つた。が梅玉はたゞ正面兩横に、いミ叮嚀な辭禮を送つてゐるのみで何の一言も發しなかつた。そののみか梅玉の頬を傳つてボロボロミ涙がこぼれて、新しい袴を濡らした。やつミ物が云へた様だがその聲は涙にうるんで一言云つては涙み、二言目には涙をふるつて喜悅ミ感謝に満ちた面を伏せたのであつた。そして幕になつたが、樂屋に私が訪れるミ「うれしくてミう〴〵舞臺で泣きました」ミ微笑んでゐた。それから私は梅玉ミいふ人は「情」の人だミ思つてゐる。

その梅玉逝いて七年、こゝに中座十月の舞臺にその追善劇を演じるが、私は今度の追善の「口上」であの涙にむせんだ梅玉の姿を今の福助に再び見る事であらうミ期してゐる。そして最後に私が残念に思ふこミは先年迄譯者でゐられた梅玉未〴〵人きみ女がこの追善に會はずして逝かれた事である。



中 究 研 伎 舞 歌

目 次

大正十五年十月一日發行

口 籠
寫 眞

◇在りし日の故中村梅玉老の面影◇故梅玉の當り狂言「富録先代秋」の乳人淺岡◇中村鷹治郎の片倉小十郎◇故梅玉出世狂言「日蓮記」の蓮上人◇故梅玉の「鏡山」のお初一熊谷陣屋一の彌陀六「双蝶々曲輪日記」の長五郎◇梅玉當り狂言見立番即◇梅玉改名披露狂言「神靈矢口渡」梅玉の嬪兵衛と福助のお舟◇三名優の「河庄」の舞臺面影

梅玉追善興行に際して……………白井松次郎

御挨拶に代へて……………中村福助

梅玉の情味……………高安月郊

故善梅玉詠草……………食滿南北

追善詠草……………矢澤孝子

情古掬すべし味……………成瀬無極

蒼古掬すべし味……………林久男

福徳圓滿梅玉居士……………木谷蓬吟

梅下一品の梅玉考……………山本修水

天下一品の梅玉考……………山本修水

梅玉追善遺聚……………諸名家五十餘氏

中村梅玉の想出……………石割松太郎 二五

梅玉の幻影より……………高原慶三 二七

福助の現實へ……………富田泰彦 三〇



梅玉追善號 **座**

名脇師梅玉
 梅玉即如梅玉
 懐かし味と温か味
 梅玉さん最後の憶ひ出
 故梅玉をしのぶ
 己鱧之助
 田中芳哉園
 八木柳緑
 三三
 三四
 三八
 三九
 四一

思ひ出すまゝに
 喫梅玉の印象
 故梅玉について
 大川澱江
 高橋蓼雨
 並山拜石
 正岡蓉
 四四
 四六
 四七
 四八

◆寫實的時代物
 としての**實録先代萩**……夢明生
 四九

◆**貞任宗任**……朝生順三
 五一

◆**吉野山** (上演臺本)……五八

◆**たをやめのみなと**……島江鐵也
 六五

◆**室津の歌** (十月興行
 上演脚本)……大森痴雪
 六九

□中座十月興行役割一覽
 □中座申暮狂言投票券表
 □編輯室

□表紙「先代萩」政岡
 扉、カツト

豊國肇
 大塚克三

松

竹

座

南
自
至
六
六
二
二
七
七
四
一
專
實
切
符
用
三
一
二
七

浪

花

座

南
二
一
一
五
二
一
四
七
七
八
〇
五
三
九
九
專
實
切
符
用
六
三
六
一

中

座

南
一
一
一
一
一
五
一
四
二
一
一
六
九
專
實
切
符
用
一
二
七
九

角

座

南
一
一
一
一
一
五
一
三
一
三
〇
七
專
實
切
符
用
六
九
五
六

辨

天

座

南
二
二
八
四
七
八
專
實
切
符
用
六
九
七
八

朝

日

座

南
三
一
七

文

樂

座

本
局
七
九
八
專
實
切
符
用
八
九
七

樂

天

地

戒
三
五
三
三



老玉梅村中の日しり在



雀扇村中の時幼は松代千左『岡浅人乳』の萩代先録實の番八十五玉梅



— 役名の附紙折 —

郎十小倉片の萩代先録實

— 郎治鴈村中 —



言狂世出の玉梅村中故
人上蓮日の『記蓮日』



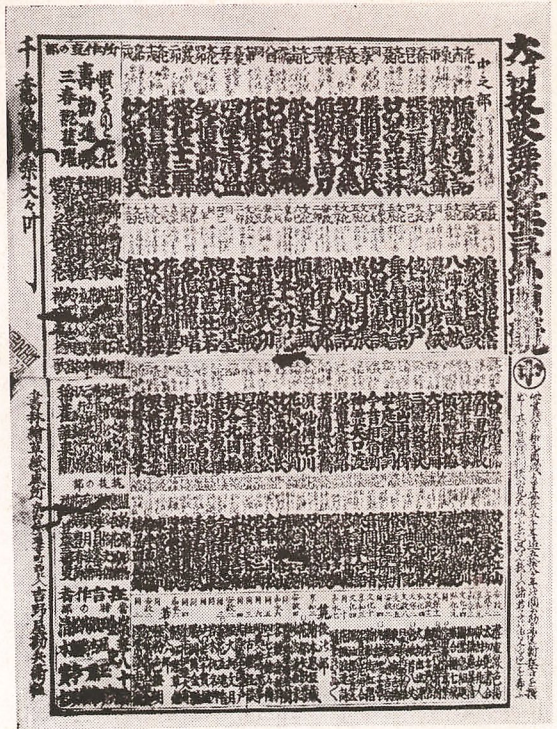
梅玉の珍しい面影です
日本烈女傳中に名高い
『鏡山』のお初です



梅玉の『熊谷陣屋』の彌陀六
の面影です
お初と彌陀六……………
名優の至藝が泌々こ
偲べれます……………



— 梅玉の當り藝 —
濡髪長五郎



梅玉當り狂言見立番附

— 中の部 —

(大川瀬江氏所藏)



明治四十年十月道頓堀角座に於て
梅玉改名披露狂言

『神靈矢口渡』

と衛兵頼の玉梅
舟お娘の助福



すで異窓の枚一たつたで界劇はれこ

すで而臺舞の『庄河』の優名三

門衛右孫の玉梅 (左) 衛兵治の郎治鷹 (中) 春小の門衛右歌 (右)

中 菫

梅 玉 追 善 號
歌 舞 伎 研 究



梅玉最後の「河庄」の孫右衛門



御挨拶に代へて

(亡父の舞臺生活)

中村福助

父(故梅玉)を失なつた悲しみ寂しさの中に、早や七回忌を迎へるこゝになりました。追憶の秋に慕はしい父の在りし日の面影は今も新しい涙を誘ひます。

この度の追善興行を皆さまの御盡力によつて、なされるこゝを聞いたら、泉下の父の靈ほ悦び感さめられるこゝ、存じます。

その追善の狂言として、父の當り狂言「寶鏡先代萩」が擧げられるこゝになりました。生前は父と長らく一座して居られた中村鴈治郎さんの片倉小十郎にて、私の淺岡、政治郎の松前錦之助にて不肖未熟ながら相勤めるこゝになりました。何卒よろしく御教導の程を偏に希上します。

父の實家と申しますのは京都の五條坂で、鍛冶屋徳兵衛といふ可成りの鋳の製造元で生まれました。慥か天保十二年十二月二十五日生だご聞いてゐます。何んでもその以前には丸太と云つて相當の呉服屋だつたさうですが、その商賣の

失敗から紙の製造元を始めたいふことす。

父が俳優になつた動機云ひますと、父には一人の伯母が御座まして、その伯母といふ人は大變な粹人で踊もやり亦三味線も弾けたさうです。その結果、自然に嚴格な親戚交際の折合も甘く行かなかつたものに見えまして、嘉永元年、父が八歳の折に連れて大阪へやつて來たさうです。そして父を俳優にせうと本人も亦好きてなりたたいふので、その頃有名な女形の藤岡仙菊(本名大吉)の門に弟子入りして藤岡菊太郎云ふ名を貰ひました。

その頃、京都あたりではひびくこの役者なるものを卑みまして、父はその當時に實家の出入が叶はなかつたさうです。初舞臺はやはりその年で、道頓堀の竹田の芝居(今の辨天座)で「渡海屋」の安徳天皇を勤めましたのが、俳優としての第一歩でございませう。その時の顔觸れは中村兒玉の忠信、仙菊の靜だつたさうです。

當時の大阪南區には四ツ橋、饅谷、三池橋ミ劇場が三つ四つ並んで居まして、皆子供の稽古芝居だつたさうでございませう。父も先代の左團次さんなご一緒に其處へ出勤して、間には道頓堀の大歌舞伎に子役として出てゐたやうです。そして十歳の時にその頃の人氣俳優だつた初代中村玉七の門人になつて中村玉藏と改名いたしました。萬延元年二月十五日に師匠が歿して、その追善興行を道頓堀の角座で演つたさうです。その狂言中の一場は子供役者が受持つことになつて「扇屋熊谷」に橋之助の熊谷直實に、父は若年ながら扇屋下總を勤めたさうで御座ます。

樹他人が亡くなられましたので、父がその門人になることになりました。京都南座で瑞寛・多見藏、大五郎ミ一座して「伊賀越」ミ「赤土泥藏」の狂言で大五郎の赤土泥藏に、父は鳥屋のお駒ミ奴の蘭平を相勤め師匠の氣に入つて三代目の三樹他人を襲名致しました。そしてその年の盆替りに大阪の角座で披露して狂言も同「伊賀越」で大五郎が丹右衛門父は序幕の丹右衛門を勤めたさうでございませう。

父が廿四歳の時に東京から二代目中村福助といふ人が來られました。此の人ミ一座することになつて御靈の芝居で「平假名盛衰記」ミ「朝顔日記」で蓋を明けました。二代目福助の梶原源太ミ秋月娘深雪で父は若代瀧太を勤めてゐたさうですが、その興行中に福助が病氣になり舞臺へ出られませんでしたので、父が福助の役である源太を代つて演じました。

その縁故から二代目福助病歿後はその兄高砂屋吾市に引立てられ、仕打の三榮といふ人から三代目福助を襲いで呉れ
 勸められて、大五郎の方からは大分苦情もあつたやうですが、遂に三代目福助を襲名し、家號を高砂家とするこ
 になつたので御座ます。今私が福助について四代目になる譯でございます。

その翌年の春に道頓堀の筑後の芝居(今の浪花座)で「緋本太功記」が上場されました。一座は維助の光秀柴藏の春永、
 先代延若の重次郎に孫一、故鴛雀の眞柴、父は關丸を勤めたさうですが、三日目から延若さんが病氣になられて鴛雀の
 孫一、父は重次郎の代役をして、父が役者として役が附き出した始めに云つてもいゝのでございませう。

その芝居はその儘で京都
 の南座へ引越しになつて、
 延若さんの引立てから、襲
 名披露をいたしました。先
 の代役重次郎が好評なこ
 ろから父の持役となり孫一
 三「古手屋八郎兵衛」の助三
 郎を勤めていたさうです。

二代目福助の七回忌の父
 が三十歳の折に戎座(今の
 浪花座)で書出し役者さま
 のやうに夏に迎へられまして、お世辭も退けず四年はご行きました。五度目の時は戦争で行かれませんでした
 後、私の八歳の時に一緒に行ったことが御座ます。狂言は毎日替りて、お芝居は夕方に終り、それから稽古にかゝるの
 で御座ます。今から思へば大層なことで、それが五十日も續いたことを憶へて居ります。

明治十七年に始めて東京から先の芝居が來られまして、中の芝居で狂言は一番目菅原の雁堤から寺子屋まで、中
 幕に「双蝶曲輪日記」、切に芝居のお目見得として「七変化」が出されました。一座の役割は芝居の松王三長五郎、璃寛の
 櫻丸三千代三長吉、嘉七の時平三白太夫、飛鶴の宿彌太郎三妙林、璃笑の相亟、筆之助の瀧田で、父は梅王三源藏、そ



滑稽の「六歌仙」で昇進披露の演
 物として一人踊り抜いたさ
 うでございませう。
 明治五年頃、熊本藩の人で
 田尻萬兵衛といふお人があり
 ました。大變に芝居のお好き
 な人で、父は御縁に預つて
 居りました。その人から毎年

それから中幕のおせきを勤めてみました。

この大芝居は私に三つて思ひ出深いもので私の初舞臺でございます。その時私は小太郎を勤めました。

その時、東京から一緒に來て居られた故人、花柳壽輔さんから是非一緒に上京といふ話が出ましたがそのまゝになつて居りましたが、その翌年の明治十九年六月、東京の中村座の桶井落興行に慇々木といふ仕打に迎へられました。愈よ大阪から荒五郎、先代声鴈の父の三人で上京することにになりました。

その時の上場狂言は一番目「駒池義戀」中「姉小松子日遊」二番目「縮屋新助」て一座は九藏(團藏)荒五郎、声鴈、仲藏、田之助、勘五郎、新藏、彦十郎、鶴藏等て父は一番目で永井源三郎、孝作、中幕のお安二番目で荷持の作助を勤めて好評を博しましたこの時、中村仲藏七十八歳にて一世二代の舞納めを致しました。



その頃、東京に虎列拉が「日蓮記」の功德でも云ふのでせうか足掛け五年といふものは故團十郎さん等と一緒に新富町や二長町に出勤して居りました。



内 惠 智 の「畑 菊」

東京といふ所は「今は何うですか知りませんが」、兎角始めさへ評判がよければ後はつゞき人氣の立つ所てして、父と一緒に新富町や二長町に出勤して居りました。

明治二十三年、京都に祇園館といふのが新築になりました。團十郎さんや鴈治郎さんと共に乗込みました。狂言は「一の谷」「高時」「吃又」「六歌仙」父の出し物「鳥目上使」で能谷高時、又兵衛、文屋が團十郎さんで鴈治郎さんの敦盛、父は義經とおしく喜撰を勤めてみました。その時の人氣は大變なもので、今でも京都では一つ話に残つてゐるに申して居ります。

その二の替りの一番目は「忠臣蔵」中「紅葉狩」切「鈴ヶ森」で團十郎さんは由良の助鬼女長兵衛で、鷹治郎さんの若狭之助、勘平三郎八、父は判官三平右衛門を致して居りました。

その興行後は團十郎さんご別れて、久々振りに大晦に歸つて来たので御座ます。直ぐ角の芝居で先代右團次(齋入)先代我童、鷹治郎さん等ご二興行打ち、「日蓮記」冠の亂の書卸しに大好評を博しました。その年の四月に鷹治郎さんご同道で東京の歌舞伎座へ乗込みまして、一番目「實録忠臣蔵」中「太功記」切「京人形」を出して團十郎の光秀、權十郎の久吉、鷹治郎の重次郎で父は操を勤めそれから中村座で「日出國五字旗風」み出し亦仙臺の仙臺座の柿茸落へも鷹治郎さん二人で行つて居りました。

その年、丁度、わか國に憲法發布があつて俳優にも規則改正云つたお達しがありまして、新富町の學校のやうな所へ仕打の勤傭を代目菊五郎さんの方からも阪東三津五郎を襲名して呉れ云つて來られましたとつて御座ます。父も菊五郎さんごは深く交際してゐましたので、何方にも義理があるので何うするごも出来ませしてした。

その頃、私のごに就ても兩家から是非預つて勉強させたいご懇望されたごを子供心に覺てゐますが、前のやうに兩方の義理立てに父は斷つて失つたやうでした。或は私も四代目福助でなく、成田屋か音羽屋を名乗つてゐた運命があつたかも知れませんか。或は四代目福助であるべくあつた私が幸福だつたごも言はれます。その翌二十四年の一月に歸阪致しますと直ぐ、瑞寛、先代我童、鷹治郎さん等ご共に「菅原」三「園待」三「六歌仙」を一興行打ちました。



葛葉の「葉」

「葉」の節、福助が二人あるのは不都合であつて何方か、改名ごいふごになつたので御座ます。追の勘彌さんも之には餘程困つたご云ふごでした。

一策あつて、父に市川男女藏を襲名してくれないかの話が出たさうです。その時に亦五

父が三度目の上京は明治三十六年四月で、父に私も引連れられまして、四代目延三郎さん等と一緒に市村座に乗込みました。狂言は「日蓮記」「二十四孝」「双蝶々山輪日記」で私は八重垣を勤めました。そこで三興行ばかり打ちまして、同年の秋に芝居、家極、今の羽左衛門、松助さん等一同道で歸郷しまして角の芝居で「中將姫」三切られ與三郎で蓋を開けました。

それから後はずつと道頓堀へ居坐りて稀に旅興行して京都か名古屋邊で別に話云つてないやうに思ひます。父が梅玉に改名致しましたのは明治四十年十月に角座で「神靈失口波」を出して改名披露を致しました。皆様の御記憶に新しいこと、存じます。父の頼兵衛に私のお舟で、鷹治郎さんが六藏でおつき合ひ下さいました。その節に私が四代目福助を襲ぐことになつたので御座ます。今思ひ出して涙でございます。その時の襲名詠句は

身にあまる薫を受けて梅の花

俳名は鶯聲と稱して居りました。

この梅玉といふ名は三代目歌右衛門の俳名で、歌右衛門が弟子の芝翫に四代目を襲名させて、自分は玉助と名乗つて居ましたが、後に梅玉と云つて居りました。父はつまり二代目になるのでございます。

私から云ふもおこがましいやうですが、父は一生を舞臺で活き、舞臺に死んで行つた人でありました。それだけに舞臺を大切に人御座ます。夏のお芝居の時などは観客の團扇の動き方によつて自分の藝の拙劣を知つた事申して居りました。趣味としては手廻り火鉢と敷物によく凝つたものだ。母から聞かれて居りました。外にはあまり道樂もなかつたやうに聞いてゐます。

私は自然に演じたいといふ心持から、時代物に於てはよく父から歩き方まで叱言を喰つたことが御座ます。ある時などは一晩も眠らず歩かされたことがありました。時代物と世話物、間をよく教えられるところがありました。

温厚篤實な人々から云れます父も若い時分は随分と狎癖持て、手の早い人でした。私などはよく頭を叩かれたものです。稽古も「さわり」になる場は一向に教えてくれませんでした。そこで私はよく他所さんへ教へを乞ひに行きました。紋十郎さんの家によく行かされました。たゞ氣附いた點だけを教えてくれました。

私の出世狂言でも云ふべき「炬燵」のおさんが評判好かつた時、「身體がよく似合てゐるから良く見えるのだ」と注意して、父には氣に入らなかつたやうで御座りました。

お話すれば種々ございしますが、叱られたことも賞められたことも、皆、今はなつかしい思ひ出になりました。たゞ私や政治郎の生長を、もう少し見て頂きたかつたと思ひます。(文責——姥谷生)



梅玉の情味

高安月郊

明治の初期で大阪の芝居の當出しに据えられたのは先代右團治（これは坐頭の勢力を持つてゐたが、苦かつた爲めか、坐頭所には子役の名を小さく入れて）それから中村翫雀、次で嵐橋三郎、中村福助であつた。福助は橘三郎の年亂に於て、技藝に於て、役所に於て相匹敵して、坐頭、宗十郎、延若の好い相手であつた。されば初期の梅玉は橘三郎と比較するのが至當である。

先づ二人共通してゐたのは、大阪の人を表現して、篤實で分別に富み、野暮な程重厚、粘り氣は橘三郎の方が多かつた。福助は時に軽快な所があり、それ丈哀れは橘の方に深く、從つて陰氣で、濕つた所があつた。福助はやゝ陽氣で、体も充

實してゐた。艶は二人共乏しかつたが、福助の方がやゝ、体から出た。幅は福助の方が廣く、新作にまで融通が利いた。明治六年「君臣船浪宇和島」九年「護國婦女太平記」十二年「鳥追お松海上話」十四年「日蓮眞實傳」十五年「金華山陸奥名所」なごに出た。橘三郎も十一年「西南夢物語」に岸野利秋「櫻田雪紀聞」に蓮田市五郎なご勤めたが、其演出方は舊式の儘であつた。福助も同様であつたが、鳥追お松、南京お辰なごミテの毒婦になつたのは、それ程毒も無い柄に不思議である。日蓮は特に得意であつたが、得意から彼の眞面目を現はしてゐず、唯堅忍の儘であつた。されば共演は延若、宗十郎の相手になり、宗の由良之助、岩藤に平右衛門、お初、

延の茂兵衛にお玉なきて、ミテを引立て、自分も展びたのである。

明治十九年、東京へ行つたのは一進境に入つたので、先づ「高坐開後鑿美談」にミテの永井源三郎を勤めた「諸事大手」にこなされ申分無く腕前のある人ミは確に認められたり」と評された。其前後に出京して大阪役者は兎角形式癖が多過ぎ、今より江戸分子の多かつた東では歡迎されなかつたのに

「何でもさら／＼とするが東京風心えたる仕振萬々利口に演じた」のは利巧でもあり、また時前が他の大阪役者より比較的厭味に乏しかつたのである。されば「長く此方に置きたい」の「申評に引止められて、續いて日蓮、九藏の梅由に小梅、長吉「西海祝」の乳人篠原、近堂、菊五郎の相手になつて、其因幡小僧に伯樂初右衛門は「思ひがけめ役ににて大當り」菊の金井お衆に其父傳之助を勤めたのは珍らしい同時の事實で、お衆が箱廻しを殺して來るのを驚いて顔ひあがる、足の立てぬ娘を扶けて自首に行く所なご當の本人はあれ程恐れなかつたに云つたさいふが、まだ新派も無い頃としては自然に近い演出であつた。菊の相殿、菘王に萬壽、源藏、團十郎の熊谷、菊の彌陀六に相摸を勤めたのは一生の晴の舞臺、二人の間に挟まつて恥づかしくなかつたのは、十分東京の水に洗鍊されたのである。

それから團十郎の頼家阿闍梨に竹川正忠、菊の實盛に九郎

助、團の文覺に衣川、小栗判官、浪七、團の光秀に操、淺岡團が京都へ行つた時は其又平におこく、由良の助に判官、平右衛門、紅葉狩に緋義、菊が大阪へ行つた時はその組辰五郎に焚出し喜三郎、辨天小僧に力丸を勤めた。此間は其成熟期時の名優に接して十分鍊磨され、地方的臭氣を脱して技味を濃くし、然もミテにしてより多くワキこして、あつた。

二十三年、歸阪して、日蓮を始めにしたが延宗は早無くなり、右團治はまた元の意氣も稍稀薄、瑠寬、雀右衛門は老い我童が東で修業した腕を展ばさうこして、挫折し、我童も鷹治郎が正に人氣の中心になりつゝ、あつた。坐頭役者が欠けて福助は春日局、由良の助も勤めた事もあるが、矢張柄相當の役に圓熟して行つた。老優が追々凋落して、橘三郎も末略振はなかつたに對し、長く衰へなかつたのは其體力も陽氣な爲でもあらう、段々多く鷹治郎一塵したのは、其柄も、其藝風も相調和した所が多かつたのであらう。鷹の紙治に孫右衛門、伊左衛門に喜左衛門、盛綱に微妙なさは、他に追隨が出来ぬ味があつた。殊に孫右衛門は柄からして、其人其儘、町人て侍に化けても、ごこまても町人、弟はご粹で無く、眞面目な情を解し、篤實で頼もしけな所、いかにも町内での口き、一族での柱、殊に治兵衛をつれて歸らうこして花道へかゝり、今晚は泊めて貰はう、女房子を相手に一杯やらうかさいふあたりの情味は大阪の人の特性を現はして、到底余

人の及ぶ所て無かつた。女房の文を見てから小春への同情も好人物を現はした。されば此人第一の當りで、私が今も一番思出すのは此役である。

私が直接に逢つたのは神戸で私の「關ヶ原」を出した時、其ミテ石田三成を今の福助が勤めるについて、丈は其大詰の筋ミ役割を聞き、それでは自分が圓鑑國師に出よう云つたそれは幕切に一寸出て唯三言いふ役、しかもそれで全部に活を入れるので、書下しに幸四郎が勤めて、こんな奇妙な役は無いと云つたものだが、丈は悴の爲に出たのである。私は同時に東京でも「醜圃の春」を出したので、開演後見に行つて始めて逢つたがもう餘程老衰してゐた。「あれでよろしうご



梅玉さんの追善安居が出来る。私は梅玉さんが何年に生れ

故梅玉老

食 滿 南 北

ざりますかいい」なご甚だ謙遜、私は前以てあの臺詞の意味を説明しなかつたが、何ごなく含蓄のある様に聞こえて、貫目の重さはあの最後を重くした。二三話の中に悴の事を云つてよろしく頼むといふのは普進の挨拶と思つて立つて將に部屋を出ようとするに、呼び止める様子、また「ごうぞ悴をよろしう………」

私はふごそれがなごりの様な気がした。其次の日奈良へ行つて、歸りに大阪へ寄り、姉を訪ふに「梅玉は死にましたなあ」私は顔の色を變へた、其驚き方に姉も驚いた。眞に此世のなごりになつたのである。恐らく丈も通り一偏の挨拶では無かつたかも知れぬ。

て、菊太郎ごいつたのか三樹ミ他人になつたさか、什うした

さか、さうした傳記を描く事によつて梅玉さんの面影を傳へるのは好ましくない。

私は殆ど晩年の梅玉さんより識らない、尠なくとも福助の名乗つてから何十年かたつた故人より見た事が無い。

私は今梅玉さんのお話をするのは親しく私が識つてゐる本當の梅玉さんを描かうとしてゐる。

『マア芝居の爲なら』

梅玉さんはいつの時でも、かういふ親切な言葉によつてすべての無理を聞入れてくれた人である。梅玉さんはかういふ風に

『營業本位』

であつた。自分の爲めだとか、俸の爲めだとか、そんなイゴイストではなかつた。

梅玉さんの一番豪いところは其處であつた。

梅玉さんは五代目菊五郎や、九代目團十郎に永くついてゐた。爲めに梅玉さんは人のいきをのみ込むいふ事が旨かつた。それが爲め晩年は多く

『ワキ役者』

になつてゐるが、又其ワキの旨かつた事はちよつと外に見當らない位である。

梅玉さんは、頗る、

『念入りの』

であつた。新作なんかを受取つたら、

『ナア師匠ちよつと此處へ來こくなはれ』

私をひきつけてはコクメイに其役の性格や、扮装や、臺詞の個處々々や、それはく、頗るコクメイに訊いたものである。本當いふと尠し面倒くさくなる事があつた位である。

それがちやんこ舞臺へあらはれるのだから豪いものであつた。

梅玉さんは尠しても腑に落ちぬ事があつたならソレハく、くりかへしく訊く。決していゝ加減な事ではつて置くやうな、そんな水臭い人ではなかつた。

今の福助さんの役なんか、一々作者から聞いて、自分の役のやうに研究する、さうして初めて其役を受取る、梅玉さんは決して道樂な風俗をした事が無い。よしそれが酷暑の時であつても……………

梅玉さんは一見大家の旦那様のやうであつた。品宿の上に於ても……………

ツルリツミきれいに禿けた頭、薄鼠の紋服でキチンと稽古場に坐つてゐる時は、誰でも自然にあたまの下がつたものである。

梅玉さんは一度私に無理をいふた。

『この役三幕目へ出んかてかまへんやろ』

『イエそれはさうしても出ていたゝかなければ、場が縮り

ません』

『そんな事だけならやめてえな』

『イエそれは困ります』

『なんて困りなはるのや成駒家が是非出て言ふたんか』

『イ、エさうぢやないのですけれど』

『そんならゑ、じやないか？』

『イエ芝居の爲めです』

『さうか出ます』

梅玉さんは『芝居のため』といふ言葉でこのむつかしい懸

合はすぐに氷解してしまつた。

梅玉さんは芝居のためを思ふ人だけに舞臺のダレる事が非

常に嫌ひであつた。

『長せりふ』

『二人の對談』

『むつかしい臺詞』

『素』

等は梅玉さんの一番嫌ひであつた事である。

私が久しぶりで大阪へ歸つた時は榎本君の

『經の島』

こいふ狂言であつた。

段四郎のしてゐた法橋が梅玉さん。八百藏(今の中車)の

してゐた清盛が齋入さん。歌右衛門さんの小枝が雀右衛門さ

んこいつた風に大分に時代にあつてゐた。

本當のミころ私は心配した、榎本君の原作は芝居らしく描

いてあるが、それでも何處か、史劇調であつた。

梅玉さんや齋入さんか、それをやるのはちよつと無謀だこ

思つた。

稽古は歌舞伎座の時のを識つてゐるこいふので全部私が立

會ふ事になつた。

スラ〜ミ稽古が運ぶ。

可なり長い臺詞を齋入さんも梅玉さんもスラ〜覺えてし

まふ。

私はちよつと案外だつた。

いよく舞臺にかけた。榎本君が初日に見て

『清盛も法橋も私が思うてゐたのさは大さな違ひです、寧

ろ東京の時より私の描いた役に近く演じてくれた事を心から

感謝する』

こいふので、私と二人で齋入さんと梅玉さんの部屋へ贅詞

を呈しに行つた事があります。

大詰なんかは實際梅玉さんはよくしてゐられました。

孫右衛門の旨かつた事は今更いふだけがくだけせう。花路

へ来て

『エ三人で歸らな、おまへや勘太郎を並べて一パイのもの』

こいふあたり、實際治兵衛の兄こいふ見えなかつた。

もうあんな旨い孫右衛門は私一代には見られないだらうと思つてゐる。

梅玉さんの舞臺は

「情の人」

であつた。其角でも、淺岡でも、六郎太夫でも、高市武右衛門でも、彌助でも、梅玉さんは

「情」

の上で成功してゐた。

あんな丸味をもつた、涙をふくんだ、さうして親切らしい舞臺はなかつた。

「芝居のため」

「こいふ事が舞臺までちやんこあらはれてくる人であつた梅玉さんは時に怒らぬ事はない。しかしそれはやはり

「芝居のためを思はぬ人」

に對して怒つたのである。

下廻はりでも、頭取でも、走りでも、乃至立者でも、芝居のためを思はぬ人に對しては、いつも梅玉さんは

「駄目」

を出してゐた。

梅玉さんは晩年それでも色氣があつた。

若い妓ごの可なり浮名もつたはれてゐた。

恐らく梅玉さんはこの年に似合はぬ情事さへ、

「芝居のため」

であつたかもしれない。

梅玉さんはそれでも若い役がすきであつた、左團治が二度目に來た時には櫻丸ごいふ役をつめた、それはく可愛らしかつた。

覺壽から見に來るこいふ妓に對して、特に時間を延ばして櫻丸が出る頃をいふてやつたなごは、よく故人の面影を傳へてゐる。

梅玉さんはかういふ事を話してゐた。

五代目さんは（五代目菊五郎）親切に、もう一寸前へ出る方がよいごか、あそここのごは下手で思入をしてくれぬごいかんごか、それはくコクメイに教えてくれた、しかし九代目さんは（九代目露十郎）あれでよろしう御座いますかご訊くご、エ、結構です、もう少し臺詞を早く云ひませうか、イヤ結構です、何んでも一切駄目を出しやはらなんだ、しかし私は五代目さんが結局つきやい安いごいふてゐた。晩年のワキ役の旨かつたのもかうした修業が大いに助けてゐるご思ふ。

九代目も亦かういふてゐた。

「福助さんは誠にワキごして行義のよい舞臺である、上方の人に似合はない」

ご評してゐた事があつた。

摺筆の便宜を得る爲め、ちよつと滑稽な話をひまつ傳へる東京にゐた頃、梅玉さんは梅王をつつこめた事があつた。

『上方役者の梅王は珍らしい、一へ見に行かふ』

こいふので九代目も五代目も先代左團次も見物するこいふ事になつた。

梅玉さんは（其頃の福助）びつくりして急に傳五郎や勘五郎に訊いてスツカリ江戸型の梅王をつつこめた。

見に来た九代目も五代目も左團次も

『何んだこれなら見に来るのではなかつた』

こいつた話がある。

これもよく梅玉さんの面影を傳へてゐると思ふ。

私はもつこれ以上梅玉さんを識らない。

私は神戸のあの興行の時に行つてゐなかつた。

太左衛門橋の話を、朝早くうしろから福六さんが追つて来

て

『親方が死にやりました』

と聞いた時、實際私は淋みしくなつたやうな気がした。

早速其事を事務所へしらしたが誰もが。

『本當』

にしてくれなかつた。

私も實際は本當だこは思へなかつた。

『梅玉追善興行』

私はこんな名の興行をかう早く道頓堀で出やうこは思ひもかけぬ事であつた。

今も机をひかへて大きな眼鏡ごしにコツ／＼と臺詞書へ朱を入れてゐる故人の顔があり／＼と見えてくるやうである。

今の福助さんと政次郎さんの爲めに、イヤ芝居の爲めに故人はもつ／＼生かして置きたかつた。

追善詠草

矢澤孝子

老ゆらくの身さへひるます終りまてますらをぶりを見せし君はや

うつそ身の命終らむきはまても梨の園生の猛者なりしかな

さゝれ波よる皺に浮くおしろいを夕かけに見つこもしかりけり

さす竹の君がまな兒もその孫もしめ結ふみちを携ます行かむ

浪華津や中座には歴い行くこも見らえぬ人ぞかなしき



情味

成瀬無極

役者の持味にも色々あるが「情味」こいふものも單なる技巧で出せるものではない。その優に備はつたものだ。中年から關西へ來て、大阪俳優に馴染の薄い私には故榎玉丈を評する資格は無いが「氣品」も「情味」も兼ね備へてゐた役者だつたことだけは斷言し得ると思ふ。

よく世間は故人の藝風を「ふつくり、こした持味が出てゐる」といふやうに評したが、このふつくり、こいふ形容はよく當つてゐたやうだ。一つはその風貌からも來てゐるのだからが、逆にその眞性が自からあゝいふ風貌を形づくつたことも云へよう。

藝道の心髓に徹した事と高齡に達してまで永く舞臺に活動

してゐた點ミから、東の松助と並び稱せられてゐたが、その藝風は恰も正反對だつた云へよう。少しの隙も無く、極り極りを確實に擲んで、まびきび運んでゆく松助の藝ミ、應揚にゆつたり、丁度實質の熟するやうに、何時ミはなしに看客の心を温かく包んでしまふやうな極玉の藝ミは好い對照をなしてゐた。

蝙蝠安、家主長兵衛なミを一方に置き、孫右衛門、喜左衛門なミを他方に置いてみればそれが明白になるであらう。殊に「廓文章」で「紙衣障りが荒い」ミ吉田屋の入口に立ち煩らつてゐる鴈治郎の伊左衛門に縮緬に紅絹裏の小袖を打ちかけ、載いて着るその寂しい様子をつくづく眺めて「ええ浮世じゃなあ」云ふ一言に無限の情味が籠つてゐたこと想ひ出す。器用な、達者な役者はこれからも比較的澤山出るであらうが、氣品と情味を備へた優は漸々乏しくなるやうに思はれる。

それは、この二つの性質が益々生で立ち悪いやうな世の中になつて行くからである。



蒼古

掬すべし

林久男

梅玉には、ずっと晩年まで、悪い意味の所謂「マンネリズム」こいふものは見られなかつた。

所謂「マンネリズム」こいふものも、その性質により、程度により、時には藝の特徴をよく現はすのに役立つこともあるが、多くは過度の技巧が眼についたり鼻についたりして、快感や美感を損ずるものであることは云ふまでもない。

歌六や齋入などには、晩年に至るまで、動もすればさういふものがあつた。

さういふ點では、梅玉の藝は、おつこりした、嫌味のない云は、藝そのものから味の湧いて来るやうな、品のいゝものであつた。

又、役者によつては、立派な藝の素質をもつ乍ら、やゝもすれば、その霸氣や、理屈癖の爲に、折角の藝が意外の損をしてゐる場合も少なくない。團藏とか、關三などは、こちら

か云へば、その方であつた。(現在の俳優に就いてさういふ例を擧げることは茲には差し控へる。)

ずつと若い時分のことは知らないが、少なくとも後年の中村梅玉の藝には、さういふ度に過ぎた霸氣や理屈癖の悪影響は全く見られなかつた。

恰も魚が水に住み泳ぐやうに、藝そのものの中に呼吸し、有るがまゝに活き、如何にも自然に動いてゐる、それが梅玉の藝であつた。

彼れの舞臺に居る間の心持には、何等のぎこちなさが無かつた。何等目にあまるやうな術氣が無かつた。そこにあつたは彼は全く藝の世界に浸りきるこゝが出来た。これが彼れの藝を、いよく福よかに、おんもりも、上品に仕上げるのに大なる力をもつてゐたのである。

藝術家が老いて来るに、ひたすら、その若さや生彩を失つて、徒らに老顔のみが目にあまるこいふやうなタイプのものがある。又、老いたるに随つて、いよく其の藝が生硬を脱して圓熟に入り、若き力の底光りを失はねばかりか、所謂「蒼古掬すべし」こいふやうな、何にも云ひ難いさびがその藝に出て来るタイプのものもある。

わが中村梅玉は、云ふまでもなく後者のタイプであつた。藝の圓熟さか、底光りある藝のさびさか、いかいふやうなものは、

後年の彼れい藝 最もよくあらはしてゐた。

而もそのさびは、遠い過去わかくの若々しきやつやを偲しのばせる底そこのものであつた。

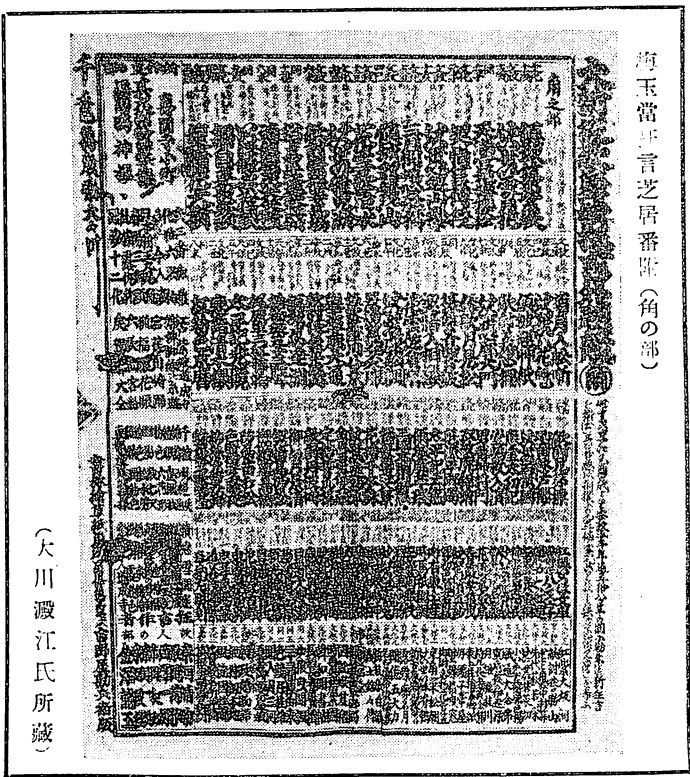
あ、いふ藝げいに於てこそ本當ほんたうに老け役まじりやくの圓熟さやさびの味あじを知ることことが出来できるやうな氣きがある。

梅玉うめぎよくに對してはよく多見藏たみぞうが引き合あひに出されるが、自分じぶんはこの兩者りやうの間に可かなり大なる對照たいざう的特長とくちやうを認まめて居ゐる。

今、梅玉うめぎよくに於て嘗かつて觀みた色々な役やく々を想おもひかへして見みるこ

これこそ本當ほんたうに大阪おさかの梨園りえんが生なんだ典型的ていけんてきな俳優はいゆうであつた。いふこがしみくみ感じかんじられる。

梅玉當世言芝居番附(角の部)



(大川 澗 江 氏 所 藏)

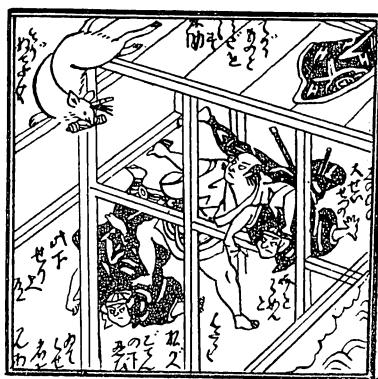
さるを得ない。

◇

あれこそ本當ほんたうに、所謂所謂新しんいがる、こいふこををしなかつた最後さいごの大なる俳優はいゆうであらう。

その匠氣やうきと街氣げんきもよより洗あはれた圓熟まんじやくせる豊ほう滿まんなる藝風げいふうを想おもふこ、

もうあ、いふたちの役者やくしやは永久えいきうに我が歌舞伎かぶき界かいには生なれて來こないののてはあるまいかこいふやうな氣きがして、何なんもなく深い寂さびしみを感かんぜ



福徳圓満梅玉居士

木 谷 蓬 吟

禍福はあざなへる繩の如しと云ふ諺がある。我等は不幸にして年中禍の黒繩で縮め付けられてゐるに反して、我が故長老梅玉居士は、死線を超越して幸福の金色繩であざなはれてゐたやうである。即ち、生きては鷹一座の後見役として、隠然大御所の權勢を握つて居たし、死しては今度の華々しい追善興行、銅像建立といふ劇界稀有の企さへ行はれる。

いて我々も、現世未來の榮光の爲め、この幸福の繩を頭に戴き、居士の幸運録を三誦すること願ひ!

一、同じく鍛冶職の子と生れながら、淨曲界の偉材大隅太夫は貧乏に逐はれ臺灣へ落ち、悲惨な客死を遂げたに比べて、梅玉居士は富裕圓満の長い舞臺を勤めて、晏然と

して肉親々明の手に抱かれて目を睡つたこと。

一、近くは榮三郎宗之助など、前途の春を空うして不幸な天死をしたに反して、居士は四季不斷の春風境に、くわくしいやくこして八十歳の長壽を持ち續けた元氣精氣のエラかつたこと。

一、多見藏延君(故人)は措くにしても、古今の名優宗十郎でさへ、また、明治劇壇の殊勲者である齋入でさへ、その恩典に浴し得なかつた記念銅像の表彰が、獨り梅玉居士によつて創められる。東都九代目團十郎のそれと對立して、關西劇壇唯一の表彰銅像といふことになる。

一、死しての後に、財あり遺子あり所謂遺孫あり、家の相

緒藝道の繼承、萬事圓滿萬事福德、笠本家の家運發運發久しかるべきこと。

一、居士ミ別れて後の鷹の藝格に、サツカリンミ炭酸瓦斯



□梅玉餘響

近世の俗に優に誦はれた二代目梅玉、逝いてより早くも五年の星霜を経てゐる、今度中座に於て梅玉追善興行があり、本誌又追善號を出さうといふ、故人を偲ぶ舞臺印象や逸話などは他の適切な方々に譲り、茲に追善本こいふに因みて、初代梅玉（三代目歌右衛門）の爲めに歿後出版された『梅玉餘響』の事を記し、内容を一寸紹介して見るも敢て徒爾ではなから

梅玉考

南 木 萍 水

が減量され、底の味が浮き出して来たことも、春秋の觀法によるミ、これ亦故人の餘澤にして感謝せねばならぬ一つであらう。

うご思ふ。

『梅玉餘響』は天作十己亥歳の孟春に猿笠翁なる人により編輯されたもので、半紙版三冊、上中下に分れてゐる。装幀、内容とも頗る凝つたもので、巻頭に重春先づ梅玉の肖像を畫いて、その面影を瑤翁せしめ、遺愛の藏印や舞臺着の羽織や定紋料紋のさまゝが繪に現はれて、故人を偲ぶよすがとなつてゐる。中巻には梅玉の餘技として自作の小唄が數十章、何れも輕妙にものされて調子附けまで出來てゐるのが滿載さ

れてゐる、下の巻には巻頭に梅玉の自筆で辭世句が掲げてある。

南無さらば妙法蓮花經かぎり

以下梅玉の自書ミ自作の句集が數多く載せられてゐるが、句は中々うまいもので、九變化の所作事をせしききの句ミ題し、歎入のやの字むすびや男帯、こいつた風な味なものである、上欄を横カットにしてそれに自書を巧に配色してゐる、尙卷末には眞眞連や、通人や伊優よりの追悼句を澤山に纏めて掲載されてゐる、要するに好箇の紀念出版で舞臺以外の梅玉の風格が一面窺はれて奥床しい感じがする、尙上卷に梅玉身の上はなしの手簡さいふものが載せられてゐる、その一章を抄録するに、『私實父、初代歌右衛門は元ミ加洲の産にて十七歳のとき、役者に相なり江戸へいて申、歌右衛門にあらため京都へ出勤いたし、それより三都にて人も知る役者に相成、後年水木東藏ミ申す中ウ芝居の役者へ名前を譲り、かゝや歌七にあらため勤居られし内、東藏少々心に叶はぬ儀有之名前を取上げ苗字だけ付けせ中村東藏ミ申候、是則ミ二代目歌右衛門にて、これにて私實子ながらも三代目にあたり申候云々あり、因に記す初代梅玉の歿年は天保九年七月廿五日六十一歳で終つた。

□二代目梅玉の経歴と系譜

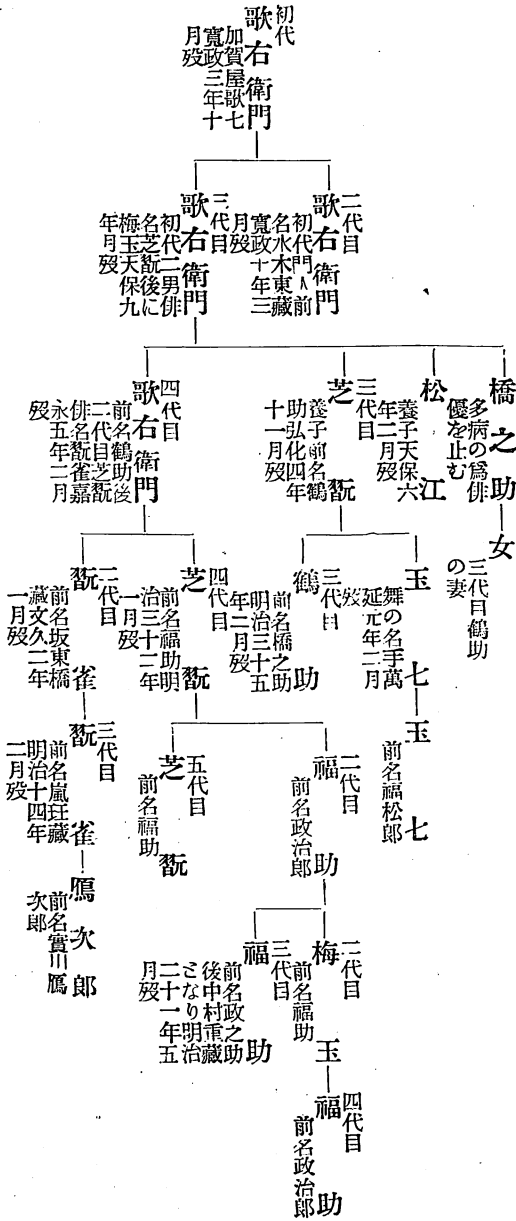
生れは京都、本名を笹木徳數といふ、八十歳の高齡で終るまで七十年間の俳優生活には幾多の變遷ミ改名を経てゐる、以下簡單に年表を記して見やう。

八歳の時藤岡仙菊ミいつた舞の師匠の門に入り、藤岡菊太郎ミ名乗り竹田の芝居（今の辨天座）で渡海屋の『安徳天皇』の役を勤めたのが初舞臺である、十歳の時、初代中村玉七の門に入り中村玉藏ミ改めてゐる。それから二十三歳の時に五代目三樹大五郎の門人となり、三樹他藏ミ改め、其年の盆替りに又三代目三樹他人ミ改めてゐる。虚がその翌年の二十四歳の時に四代目芝翫の元の名福助を芝翫の弟の政治郎が繼ぎ二代目中村福助ミ名乗り、筑後の芝居（浪花座）にて『平假名盛衰記』ミ『朝顔日記』で福助は梶原源太ミ秋月娘深雪の二役を勤めてゐたこの時の三樹他人即ち梅玉の役所は岩代瀧太であつたが、中日頃から福助は不圖病氣に罹り急に代役の必要から、推薦されて梶原源太の主役をさせられた。これが頗る評判であつて一面出世藝であつたが爲めに、一方不幸な福助はこの舞臺を最後にして空しく黄泉の客こなつたが爲めに、その當時福助の兄に當る高砂屋吾市なる人に見込まれ

て、茲に三代目中村福助を襲名する段取りなり、屋號を高砂屋と稱する事になつた、その翌年の春筑後の芝居で花々しく改名披露をした、而して明治四十年十月角座に於て福助を伴政治郎に譲り、二代目梅玉と改称するに至つたのである。

この梅玉の初代は前述の有名なる三代目歌右衛門にして俳名を芝翫後に梅玉と稱した。當時の評判記位附にも大上吉吉

▲中村家の系譜



を冠した名俳優であつた。

そこで歌右衛門——芝翫——福助——梅玉といふ風に交錯して來るが、現在の東西中村福助が何れの系統に屬するや一寸や、こしいのである、よつて最後に中村系譜を掲げて讀者の御參考に供したいと思ふ。

天下一品の

梅玉

山本修二

幼時の事は暫く措き、私が芝居らしい芝居を見初めたのは中學三年の顔見世興行の頃であつた。私がかちやうと大向うに座席を占めると同時に、畫興行の打出しの「蘭平物狂」の幕が閉まつた。ホンの一瞬間ではあつたが、その時舞臺の中央に、紅色鮮かに彩つた梅玉の蘭平の面影が、今でも時々思ひ出される。私はあれほど立派な梅玉をそのちも見たことがない。もう少し極端に言へば、私はあの一瞬はご歌舞伎らしい氣分に浸りこんだことがない。

一体梅玉の役所は、どういふところにあつたのだらう。私の母なごに聞くミ、若い頃の梅玉は「忠義な侍」を得意にしたさうだ。なるほご晩年の彼を考へても、敵役なごは無論柄になかつたし、町人よりは武家の方がふさはしかつた。が梅玉が天下一品であり、後世に残るやうな傑作は何かこいふ問題になると、誰しも即答は出来ないのである。

「紙治」の孫右衛門なごは生前動きのつかない役所であつたが、近世であの人ほごの散り役はなかつた、こはいへるにしても、あれが唯一絶對のものだつたことは、何だかいへない氣がするではないか。無論歸り際の花道の治兵衛に對する情味なごは、誠に天下一品の稱を得たが、あれが孫右衛門といふ性格の最上の解釋は思へない。

これを逆からいへば、たごへば「土屋主税」の其角なごは餘り感心したものでなく、往々にして劇評家の酷評を招いたが、あの真中の返しで、大高源吾を見送つて、

——彼にこの句はごの、よい思案がありましたらナア。ミいつて、例の首を振るころなごは、他の役者に求められな
い思議な妙味があつたのである。

言換へれば梅玉は、淺間になつても操になつても大黒屋惣六になつても、また石堂右馬之丞になつても、何だか同じことをやつてゐるやうで、變り榮えのしない役者であつた。平右衛門の臺詞ではないが「いつても梅玉はヤツパリ梅玉であつた」が、その「梅玉」の持味といふものが、役柄の角々に不思議な魅力を興へてゐた。

約言すれば梅玉には天下一品の役所がなかつた。みんな役所をやつても、それが皆只一つの「梅玉」になつてしまつたが、その一つの「梅玉」だけは確かに天下一品であつた。

梅玉追善

山上貞一

〔神戸中央劇場の多見藏襲名披露興行も、明日は樂だこいふ日の朝、相生町の旅館加藤から車に乗つて、楠町一丁目竹の湯に入浴した老人が、その湯滑て南無妙法蓮華經のお題目を口吟みつゝ、死んで逝つた。その老人が中村梅玉だ

ミ解つた時の騒ぎ様、この事は名優としての彼の最後を如何にも物語的に後世に傳はる相應しい何物か、窺はれる。

〔また、その當時梅玉は八十一歳だミ傳はり、息の福助は八十歳だこいふ。八十一歳だいや八十歳だ。これも明治以後には恐らく聞かない名優らしい小さい挿話だ。

〔初舞臺は嘉永元年に今の辨天座で渡海屋の安徳帝を勤めたこいへば、正に七十四年の舞臺生活だ。それが先代多見藏以來の高齡で、言はゞ舞臺で倒れたのだから、その雄は多せずばなるまい。

〔あの豐饒な頬、輪廓の正しい顔、つぶらな眼、秀てた眉、それに頭の格好がいゝ。眼をつぶつても浮んで來る俳優ら

しい總稱をした顔の持ち主の梅玉は、私達青年の劇愛好者が最後に有つ、大阪歌舞伎役者の錦繪かも知れない。

〔故人さいつても中村宗十郎の昔は生れ合さなない。まつ團藏璃寛、橋三郎、齋入ミ幼い記憶に残つてゐる人達の裡では梅玉こそ最も恵まれた人であらう。その藝は一代の師表ミ仰がれ、天壽を全うして、内には巨萬の富を積み、福助ミいふいゝ、後繼者を有ち、更に實子に政治郎を獲たなんか實に運のいゝ人である。

〔近世の名優としての梅玉には多く典型ミすべき持ち物も多いが、就中最も偉大なる彼の藝術は『心中天網島』に於ける鷹治郎の紙治に配する孫右衛門であらう。彼の死後既に七年の追善興行をなす程時は經つてゐるが、まだ適當な孫右衛門役者の後任を見ない。此の様子は恐らく鷹治郎が紙治を演じてゐる限りそれは求め得られないこと、思ふ。

〔梅玉逝去の當時鷹治郎は人に語つて「梅壽(梅玉)の後やさかい注射(中車)が好からう」ミいつた駄洒落を言つてゐるのを記憶してゐるが、大阪では老女役には姪女を老立役には印三郎を、それでもいかぬ孫右衛門の如き場合は東

より中車、段四郎を求めたが、既に段四郎の死後中車を俟つのみになつた。處てその中車は決して上乘な探右衛門役者ではない。中車は武士が町人に變装してゐるさしか見ゆぬ難があり、あの町人が「歌舞伎役者の眞似をして」武士を装ふ、ふつくらさした物腰、それに兄者としての貫目と情誼は、梅玉の死後絶えて見るここの出来ないのは鴈治郎の爲にも、大阪歌舞伎の爲にも遺憾である。此一役こそ中村梅玉の名優たるを語つてゐる。

○思へば今日では大阪に歌舞伎役者としてのクラシカルな藝味を有してゐる人は皆無たと言つてゐる。多見藏、雀右衛門病深く見るに忍びない。鉦繪を見るやうな歌舞伎味は、今は唯淡い記憶のみになつて失つた。

○梅玉の演じたもので私達青年の記憶にあるのは、決して艶麗な女ではない。その代りに老熟敬すべきものが多い。『吉田屋』の喜左衛門、『近江源氏』の母微妙、『土屋主税』の其角、『合邦』の合邦、『吃又』の將監、『青柳硯』の乳母法輪尼、『伊勢物語』の母小よしなど、記憶のみが残る。

○而して梅玉は鴈治郎の脇役に終始してゐる。年長の彼が、門閥の彼が、或は鴈以上の力量の持ち主であると言はれた

梅玉が、世人は此間の疑問を息福助の前途を慮つて鴈に忍んだこゝろたがつてゐるが將して如何。

○今日追善興行に當つて、松竹は息福助、政治郎に演出し得る故人に因める狂言を求めてゐるに聞く。思ふに福助、政治郎共に梅玉の柄でない。然しそれは梅玉の老年しか知らないもの、言であるかも知れない。

○仙臺秋の床下でも出して福助の政岡に政治郎の男之助、鴈治郎をこ望みたい處を長三郎にでも仁木をつき合つての追善は、決して不可能でもないと思はれる。

○私はいま『大安寺堤』の高市武右衛門に扮した梅玉が、あの上品な顔を黒紋付羽織袴に浮かせて、提灯を持つ多くの奴を隨へ花道を歩いて行くさまを思ひ浮べつ、筆をおく。

梅玉の遺筆

中村梅玉

中村梅玉の想出

石割 松太郎

梅玉が、神戸の銭湯で急死してから、もう七年になる、今年がその七回忌に相當するので、中座で、福助政治郎中心の追善興行が行はれるといふ。早いものだ、ありし面影がまだまだまざりて記憶に新たであるが、七年の月日が流れたのである。私が舞臺以外に梅玉老に逢つたのは一回か二回かきりてあると記憶する。その初對面が二度目であつたか、忘れたが中座の樂屋に梅玉を訪ねる。「わしかいな、あつちやよいかしらん」と男衆との問答が衝立の彼方に聞える。それで逢ふと、「悴ぢや御座いませんか、私はもう年を老つてをりますで」と福徳圓満な老人ぶり、私の用事は演藝壽報から頼まれた「梅玉傳」を書くために、本人に質したい事項があつたからであつたが、用件がすむと、「さうぞ私は、とにかく悴をよろしく御頼み申します」と繰返してゐた好々爺ぶりが、今に眼に残つてゐる。

この間の浪花座に催された若手連中の技藝座の辨慶を見た時に、私はすぐ思つた事であるが、この舞臺を梅玉老に見せてやりたい。恐らく眼に涙をためて喜んだであらうと思はれる、その政治郎の藝風のまごかき、梅玉の面影がある、争はれぬ血のつながりである、あのふつくらとした、上品な、あせらない、がつ／＼しない藝風は、一寸今の上方の舞臺の誰れにも缺けてゐる

梅玉追善遺聚

(順序不同)

- 一、大阪近世名優の一人故中村梅玉に對する印象と御感想を
- 二、嘗て梅玉が演じた狂言中で何が一番お好きでしたか

加藤 秀 雄

鴈治郎と梅玉は大阪の生んだ近世の名優であり、鴈梅一座は長く梨園の一大勢力であつた。その梅玉が死んで早七年になる。鴈治郎のワキ役者として彼ほど呼吸の合つた俳優は今後ともに無いだらう。「土屋主税」の其角、「河庄」の孫右衛門などは何ほど鴈治郎の藝を光らせてゐた事か！

これらの狂言を見る度に私は頗の豊かな生前の梅玉の姿を思ひ出さずには居られない。

梅玉の演じた狂言の中で私の最も好きなのは「河庄」の孫右衛門である。あれほど好い孫右衛門は彼の歿後は誰にも見出す事が出来ない

畑 耕 一

二重になつていちじるしくつき出た臉と、大きなつづらな眼。慈悲圓満な光が、いつもうら／＼かにみぎつてゐた。

こころである。

もう梅玉のやうな立派なワキ師は生れない試みに此人の當り藝としてこの舞臺を想出してみるに「植木屋」の李右衛門。「河庄」の孫右衛門、「先陣館」の微妙、「伊勢物語」の小よしなど、もうあれだけの藝はあるまいと思はれる。就中小よしは天下一品の至藝、今日「伊勢物語」の出ないのは小よしがないからだ。小よしといふ俳優の物は東西に求めてない、もう決してない。鷹治郎の紀有常は、或は又生れないとも限らぬが、小よしは——あれだけの小よしは、もう或は絶後だらうと思ふ。私は梅玉の第一の傑作を小よしとして推すにはばからない。李右衛門もさうである、微妙もさうである、孫右衛門もさうであるが、梅玉の當り役は温情玉のやうな情合のある、涙の滲み出るやうな役柄がこの人の身上であつた。

私はいつも思ふことであるが、俳優が個人としての性格が、その舞臺の上に強い影響をもちながら合ひを持つてゐる。俳優の人格が後の性根に影響して舞臺の性根と性格が交叉する一點に眞實の藝もあれば、美もある。按ずるに藝の極致に、廣い意味の倫理的が一致せねばならぬ。然らば悪人に能く扮する俳優は皆悪人かといふ、そんな狭い意味でない事は勿論である。が、俳優の「柄」はその人の性格の一つの反映であることも勿論であるといひたい。樂屋にあつても、家庭にあつても福徳圓滿な梅玉は、舞臺の人としても福徳圓滿な藝の持主であつた。

この梅玉の若かつた時に、人氣を争つた俳優は、嵐橋三郎であつたが、橋三郎は淋しい藝の人、梅玉は愛嬌のある舞臺であつた。いろ／＼な點で相似の位

二、

小さな時分は大坂にあつたので、ずいぶんこの優の芝居を見たが、一度藝者で飯をたく狂言を見た(なんの外題か忘れたが)がそれが眼にのこつてゐる。後に見たのでは粉屋孫右衛門

灰野庄平

中村梅玉には東京系統の俳優、上方俳優でも若い人とはきつかり區別するこの出来る重要な藝風がありました。それは観客の方からするに、心を空にして彼の人形となつて、動いたり語つたりして居たこと云ふ印象です。東京系の俳優は心から體から、その役で一ぱいにつめられて居ります。拙いものになると棒をのんだ様に心理的な重さに壓迫されて居ます神質な人になるに、個人の心理が役の表情にしみ出て來ます。梅玉にはさう云ふところが少しもありませんでした。老優だつた爲か、一時代前の時代的特色があつたか。

二、

一番好きな彼は、天網島の粉屋孫右衛門、好きてはなかつたが、梅玉獨特の妙技として目に残つて居るのは、土屋主税の其角。

置におかれた橘三郎梅玉であるが、その舞臺の柄は全く反對の藝風であつた。そして梅玉は遂にその晩年をワキ師としてよく自分の天分を知つて、その埒を越えようとしなかつた。

いつか梅玉が、その日常生活のうちで何が一等楽しいかき問はれた時に、芝居をすまして家庭に歸つて、一風呂あびた後、さて椽先に出て、打水の庭、燈籠に灯を入れて、一服の茶に一日の舞臺を忘れた時ほご楽しいものはないさいふ意味の事を答へてゐた事を想出すと、優の舞臺がまご／＼と眼に浮んで來るのを感じる。

流石は「血」のつながりだ。福助にこの味はないが、政治郎にそんな面影がどこかあるやうに思ひなされるのも、心なしばかりではないかも知れぬ。

私が見たいもの、一つである「伊勢物語」の完璧はもう期する事が出來ない。

——と思ふに一人に忍ばるゝのが梅玉の舞臺である。

梅玉餘香

高原慶三

われ、芝居らしき大芝居を見はじめしは四五才の時なりき。

その昔、文樂が松島に櫓を構へしなんぞ、當今の人には嘘のやうな話なれど、その文樂が御靈境内に移りてより、その後身が八千代座となり、その後幾年か未芝居に甘んぜしが明治卅三年頃、松島八千代座の大改築なり、三層樓の日本

上西半三郎

一、梅玉君には近世模倣の光淋模様のやうな印象
一弦琴を冬の夜に聞くやうな印象があります

二、何も好きなものなし、こんな悪口がお嫌なら
没にされたし

赤松辰次郎

一、老後の政岡

伊藤悌二

一、某藩の奥女中であつた私の母は團十郎や先代菊五郎及左團次の藝に親んでゐたのでクラスカルのものを好みました大阪に來てから梅玉の出る芝居には必ず見物しました、そして母は故名優等の藝と比較して梅玉は圓味と滋味と滋味のある人だと申しました、私も母と同感であります。大阪には二度とあゝした優を見る事が出來ますまい。

二、「盛綱」の微妙と「逆櫓」の權四郎等であります
殊に後者は私の生涯忘るゝ事の出來ぬ至藝であるご存じます

建築、屋上高く二つの鳳凰閣相並び、その間、橋梁をもつて架せるなき、たしかに當時、大阪劇壇の偉觀にて前年焼失せし梅田歌舞伎座の洋風建築なきも輪奐の美、遙かに及ばず、況や道頓堀の戎(浪花座)角、辨天、中、角の五つの櫓なんご足許へも近よれぬ立派なるものなりき。

その八千代座の柿茸落にて、われ生れてはじめて鴈治郎を見、福助(梅玉の前名)を見、霧仙(先代)を見、玉七を見、巖笑を見、多見之助(多見藏の前名)を見、璃笑を見、正朝(先代)を見、政治郎(福助の前名)を見、箱登羅を見たるなりき。

物心つきそめて初めて見し大芝居なる所以か、その當時の記憶はまぎまぎとあり、狂言役割、役者の臺詞、容貌なき、卅年近き昔ながら昨日のこころ程、鮮かなるも、いご不思議なり。狂言の一番目は「蝶千鳥壽會我」の通しに、吉例の對面が挿まり、「阿古屋」の琴責に「吃又」を加へて、大喜利は「大津繪」の景事なりし、「會我」にては鴈治郎の十郎、福助の五郎、巖笑の工藤、璃笑の虎、正朝の少將、近江八幡は玉七、多見之助、霞仙の鬼王團三郎、玉七の五郎丸、箱登羅の大藤内なりき「阿古屋」にては重忠は霞仙、阿古屋は政治郎、岩永は福助、榛澤は鴈治郎、「吃又」にては鴈治郎の又平、玉七のおさく、政治郎の修理之助、將監はしかまおほへざるも或は福助ならざりしか「大津繪」にては鴈治郎が藤娘になりて、土間へい菱の縮緬手拭を投げたるをおほへたり。鷹匠が政治郎、瓢箪瓢が玉七、辨慶が霞仙、鬼念佛が璃笑、けほう(福祿壽)がこれ記憶甚だ曖昧なるも、福助なるやうおほへたり、この時長い頭に梯子かけて、さかやきしたる面白さ未だに忘れず。

落合浪雄

一、 好いお爺さんといふ感じ、それはその舞臺に於ける藝術にもよく現はれて居る傳統的大阪役者の典型とてもいはうか。

二、 日蓮記の日蓮上人は東京の人も老人はこの人のを上手かつたといふ、それは見ないが、紙治の孫右衛門などは此人の氣持が彼にびつたりして至藝と思はれる。

河合武雄

一、 私がまた役者にならぬ以前鳥越の中村座で拜見しました「五十三次」の古寺の場へ出て來る「五百原」さか云ふ武者修業の役が梅玉さんの名を見るたびに必ず古い昔を思ひ起します。

二、 不幸にしてあまり数を拜見しませんでしたが見せて頂いたなかでは「紙治」の孫右衛門が一番好きで御座いました。

久能龍太郎

一、 上方の役者は傳統的に線のみの表現に豊てしたが、故人中村梅玉は豊醇な線に一種のストレンジがあつたと思ひます。それだけに故人を畏敬します。

二、 記憶にさぐりませんが、いつたいに陰翳のたつたよふ舞臺は故人の藝風に獨歩の境地を與へ

思ふに、故梅玉、その當時の福助は、その頃よりして既に坐頭長老の觀ありながら「會我」にて鴈治郎の十郎と一緒に五郎をつこめし外、「阿古屋」にては伴政治郎の阿古屋と霧仙の重忠に花をもたせて、岩永つこめしのみにて己れの持狂言一幕も出さざりしは、以て謙讓なる梨園寛厚の長者なりしを偲ぶべし。ワキ役者として一生光芒をおさめ、故團藏の鋭さ、故齋入の華さを求めざるに拘はらず、去る者日々に忘らるゝ今の世に尙梅玉の名の生けるが如く、われらに親みある所以のもの蓋しこゝに胚胎せるにあらざるか、甚だ臆けなる追憶にて鴈仁前則時代の老優中に介在して梅玉の藝の地位を品騰せんか。まづ故人團藏は團菊左に並び稱さるゝ名優ながらその皮肉鋭さ、ニヒリストたる點ごうやら歌舞伎の正系派といふよりも、むしろ傍流たるの觀あり。晩年不遇に終りしもかつてこの點にあらざりしか、故齋入は無論座頭役者たりし華さを一身に荷ひたりし雖も、舞臺の機械的工夫に新を逐ふに急にして、藝に實意なし、見ていつまでも頭に烙印せる程の至藝に接せず齋入の名の忘れられたる所以こゝにあらるか。故橋三郎はワキ役者として稍々梅玉と同じ畑に生ひ育ちし人ながら、その藝にふくらみや艶や愛嬌がなく、又外貌の上にも魅力なし、一生不人氣に終りしも詮方なし、故人歌六はその舞臺ぶり著しく梅玉を髣髴させるものながら愛嬌と小手先の藝ばかりで、賣出せしたため團十郎のお眼鏡に叶はず、その生前大舞臺を踏むこと能はざらしむ。

現存せる名人松助は或はその至藝、到底梅玉の及ばざる處ならんも、惜しいかなこの人梅玉は多量かな肉と、高則たる氣品なし、按ずるに梅玉は團藏は多量遍狭ならざりし故梨園の大有徳者たりしなり、齋入は多量浮氣ならざりし故、今日

たご思ひます。

小寺融吉

一、藝に正直な忠實な、愚劣な見せたがりをしていない、感じの好い役者、昔の役者らしい役者、現代の大坂役者の悪い所はあまり持つてなく好い所をたくさん持つてゐた人と思ひます。

二、

鴈治郎のワキ役としての數々も好きでしたが七段目の平右衛門が、無論老年でいたゞしい位だが、最近見た吉右衛門よりつこ、ふしぎに今に印象に残つてゐます。尙この人の矢口渡の頓丘衛を見なかつたのが心残りです

瀬戸英一

一、

好々爺爺のみ、其晩年のみよりを知らざれば

二、

狂言とは演じた役のこゝろ、存候。果して然れば河庄の孫右衛門、太十の操、殊に操の古典的演出の味、未だに忘れ兼ね候。

川村花菱

一、

私はうまい人たご思ひましたが、名人たご考へませんでした。やつぱり生れながらの人でなく達した人です。

二、やつぱり孫右衛門でした。

もその名を唱はるゝなり。橘三郎には太刀打出來ぬ魅力あればこそ八十まで、その人氣を持續けしなり、歌六はさ小手先利かざりし故一介の三桧他人いふ貧しい家柄にて門閥の背景もなきに拘はらず一生大舞臺の役者たりしなり。松助よりは遙かに氣品備はりし故、上手ばかりでは出來ぬ「伊勢物語」の小よし「道明寺」の覺壽の如き至難の役に於て好評を博せしなり。而して一生ワキ役者たるの本領を忘れず、而も梨園第一の大分限者として、後繼に福助の如き確實兼備の名優あり。政治郎の如き梅棹双葉より香ばしきを思はせる有爲の青年ありて嘆すべしといふべきなり。

梅玉の幻影より福助の現實へ

——梨園漫話——

富田泰彦

——此頃の歌舞伎芝居の、せましくなつたとよ、何んぞ乾きまつた舞臺だらう——コンナ事が、苛々しく考えられて來る時、いつも梅玉の在世時代の潤ほひのあつた舞臺が偲ばれて來る。全く別な世界の夢のやうな儂なさを持つて……

——豊國の芝居繪を見るやうな、和やかな彼の感覺、理屈を云つて下さるな歌舞伎芝居を各自が勝手な論理に箝め込んで見ようとする近代人じやらには、

濱村米藏

一、若い時は無論のこと、晩年の舞臺もさう多く見てゐませんので、はつきりお答が出來ませぬ。

二、私が見たうちでは、「河庄」の孫右衛門です。

西村義則

一、見物に後ろを見せて立ち無言で居ても芝居をして居た名優の面影大金持の御隠居様のような氣が今でもしてゐます。

二、粉屋の兄いさん。

鳥居清谷

一、東の段四郎小團治なぞと共に所謂「役者氣」な仁と存候。

二、初めて東上せられし時「姫小松」のお安又改名後は「河庄の孫右衛門」なぞ其他多々有れど略す。

河竹繁俊

一、手堅い、つましやかな藝風であつたといふ印象を受けてゐます。——もつとも、小生は極く晩年しか知りませんが。

二、「河庄」の孫右衛門が目の前に浮びます。

福田忠夫

先づ引下つて貰ふ。而して私一人が、凝り梅玉の福助時代からの夢に浸つて見よう、でも不可ない爺むさく、絶えず水ツ凍を垂らして、泣紙と鼻紙をちやんぼんに使つてゐた彼の晩年の舞臺、それで穴のあかなかつた、けでも、梅玉の眞の歌舞伎役者としての偉さがある。その長閑さを今の誰から求め得よう？

——厭に、思案に餘つたやうな今の歌舞伎芝居のリアリズム、役者も観客もさうした安價な寫眞主義にかぶれて終つてゐるのだ。彼の滋味豊かな藝風、愛嬌に富んだ舞臺は、もう梅玉没後永久に還つて來はしまい。尠くとも歌舞伎芝居は享樂的のもので、時代意識だとか、現代生活に觸れる觸れない云ふ問題ぢやない。歌舞伎は「昨日の芝居」である點に生命があり、「昨日の役者」である處に貫きがある譯だ。梅玉は今日では「昨日の役者」の最後の一人だつたかも知れない。

——もう一つ梅玉の偉かつた處は、彼自身を知つてゐた云ふとだ。「自分を知る」云ふとは、容易なやうでも、ちよつと難かしい。誰でも身眞實云ふ自惚れが付き纏ふ、飽迄自我を立て通したくなる。然るに彼は一度鴈治郎云ふ大立者を見出して以來、固く提携して、自らそのワキ役に甘んじてゐた。しかもその脇役が鴈治郎の絢爛たる技藝と相映發して、彼一代の舞臺生活に光彩を添へる結果となつた。

——若し彼が鴈治郎を敵に廻して、その人氣を競ふたませんか、その結果は逆睹すべくもない。鴈治郎、梅玉と對比した場合、總ての條件に於て慥に一籌を輻せねばならないからだ。その容姿に於て、その役處に於て、その人氣に於て、充分觀客を呼ぶの看板にはなり得ない筈だつた。如何に技藝は卓絶してゐ

一、
今から數年前、鴈梅の大坂歌舞伎が丁度松竹劇場にかつてゐたとき、思ひがけなくその朝梅玉老が突然亡くなつたこの知らせに私達は昨夜まで元氣のよかつた老の舞臺姿を憶ひ浮べ乍ら艷業柄色々關係方面をかけた廻つたことです。そのとき始めてこの名優に關する色々逸話や芝居道の話聞いたのが今では大變い、參考となりひさ知れず感謝してゐます。

二、
晩年の故梅玉を知つて居る人はだれでもよくまあ、あの年で老の舞臺に感心したが、こり分け私の好きだつたのは月並かも知れませんが河庄の孫右衛門です。年巧きは云ひ乍らいかにも老の兄者らしい親身さ人間味のたつぷりしたあの姿が今でも時々河庄を窺つたに思ひ出さなりました。

本山荻舟

一、
大店の御隠居さといふ印象が一等ハッキリと残つてゐます。亡くなつた時誰やらの追憶談に顔を洗ふ時決して手拭でこすらず、顔の方を洗面器へ突込んで、シャボンを洗ひ落したさあつたのを、役者の心得として最も面白いと思つてゐます。

二、何といつても「河庄」の孫右衛門

ても、座頭(梅王は番附面では座頭の地位に置かれてゐたが)たり得ない役者がある。

——此點は、今の福助などは、その素材として既に座頭、大看板となり得る恵まれたる天稟のものがある。殊に此優の近來の進境著しい上に、何處か梅玉の舞臺上の遺鉢を傳へた技藝の潤ひの、いよく滲み出て來たとは見道がせない。

——私は梅玉の失へる幻影を追ふよりも、寧ろ此の福助の求むる現實を掘えて、その近き將來を嚆目しつゝ、ある者である。

名脇師梅玉

中山生

梅玉について當時の印象と感想及び研究の一端などを記せこの問題を、雑誌『中座』の爲に松竹合名社から自らに呈出された次第である。

その回答の新聞が五六日あつたので、何うにかなるだらうと思つて多忙に追はれるうち、いつか期限の九月十八日は來た、さあ遅れるはぎ呈出すべき答案の纏まつた何物をも持たない。

梅玉の芝居は福助時代から二十何年と見たに違ひない、しかし印象と感想とさかいつた影は極めて薄いでも梅玉は無くてはならぬ人だつたと思ふ、河庄の孫右衛門の如きは當時優の右に出づる者はあるまい事は知つてゐる。鷹江郎

仲木貞一

ふつくりした圓熟した藝の持主だと思つてみた。然し可なりの老齡でこうせまが締らず、足附きの重いのが心配になつた。然しそのさびた音聲に云ふに云へぬ味のあつた事を思ひ出す。

數多く見ぬ故、どれが一番いゝか知りませんが何でも私の見た時には、型物をやつたやうに覺えてゐますが、それがよかつた事を覺えてゐます。

喜多村綠郎

何をされても、必ず相手の邪魔にならないやうにやつて居て歿しられまであの年でもいふにいへない艶をもつて居たところがあつた。直接つき合つて舞臺に立つたことがありませんから、客觀的ですが見てゐると、相手になつた人は吃度やりよかつたこと、思ひます。昔東京へいつた時に故五代目の相手に出てその人に用ゐられたといふのも相手の氣を吞込むのがうまかつた爲と思ひます。

二、いろ／＼好きなものも數の多い中ですすからありますが「河庄」の孫右衛門などは最も好きのう

の治兵衛が優の特に引立つたのは承知してゐるが、單に漫作にしてそれだけの事である。

優は丸々ミ太つた圓満な相貌を有してゐた。そして何處か莞爾やかて軟らか味があつた。けに、峻烈ミか勇勵ミかいつた刺戟性に富む或る鋭いものがなかつた。

謂はゞ春風駘蕩ミしてなごやかなむつくりミした感じは興へたけれど、三伏の夏の身を焦す暑さもなければ、又其冬の朝の骨を砒す寒さもなかつた。平穩無事之が自分の優の舞臺に對する所感であつた。

要するに優は何處までも脇師であつた。修養を積んだ絶好の脇師であつたのだ。脇師は仕手役を妨げずに其の天分を守りつゝ、仕手役を引立てねばならぬ重大の責務があるのだ。思つて茲に到れば恐らく優は脇師に忠實な人は又ミ得られないと思ふのである。

優の印象の薄かつたのはそれだけ仕手役を引立て、邪魔をしなかつた爲ではなかつたらうか。

今日の多くの優人は縦し端役にもせよ自分を見せつけやうミしてその立場を忘れるのである。さうした中にあつて優の如きは近代の名脇師といつても過譽であるまい。

之を能樂について見るミ最も解り易い、脇柱の横に板付ミなつて殆ミ存在を認められぬまでに動作のない脇師の如何によつて、仕手方が光りもすれば亦傷けられもするのだ、梅玉はこの呼吸を知つてゐた名脇師でなければならぬと思ふ。

ちでした。やゝ伯父さんになつり、お茶屋たの二階を知らない人のやうにみねない所もあつた。さしても、當代この人の外に孫右衛門をあれだけに出来て相手を演活すものは絶無であります。私はこれを擧げます。

一 足立 欽 一

一、私は上方の俳優が餘り好きでないのてさりさめた印象もあります。たゞ顔の大きな舞臺の大まかな、大阪の俳優のこせくがなくなるところがあつた様です。

二、合邦の辻でした、その他はほさんミ印象にありません。

阪本 清雄

一、ポツポツミ云ふ巡航船に乗つて道頓堀へ行つて、エビス座といふ浪花座で見る芝居、其頃は小學生だつた小生ですが、梅玉マダ福助であつた様です。氏はもうお爺さん、そして老け役遂に何年たつても變らずに老け役。「い、俳優だナア」さいふ風な批評を超越して了つて、其藝に魅せられて了つてゐました。「芝居を投げた」ここのない人、小生の見たところは齋入、それから鶴治郎等ミ共にワキ役で

梅玉即如玉

田中芳哉園

片鱗を見て金龍を知る。古人は謂つて居ます。極めて僅かなその行動やら言辭によりまして、其人物の如何を多くの場合直覺が出来るものです。尤もそれを以て断定して仕舞つては大變な間違ひが起りますが茲に申上げやうと思ひまする故人梅玉翁の場合の如きは断定しても差支へがなかつた事ほゞ左様に翁は温厚玉の如き優人であつたのであります。

わたくしは遺憾にもあまり心易くして居ましたがために、翁に就て翁の總ての過去を聞いて置く事を致しませんでした。それはいつても聞ける事だ。等閑にして居たからであります。だが最初に逢つた時、それは舞臺以外の膝つき合せの座談を淡く交はした時、懐かしい人だと思つた直覺が最後まで間違ひませんでした。

其爲、わたくしは翁のための後援會、寧ろ高砂家一門のための蠱眞連たるあの福贊會、その組織に就きまして及ばずながら挺身努力を提供したのであります。

福贊會は福助を賛するもの。文字の上からは見られますが、此撰名は實はわたくしで、撰名の意見としては無論福助を中心としたのであります。が親の梅玉として後嗣の政治郎。此三者を一丸として福は葉木家の吉祥文字でありますから福三、即ち福贊に附會した次第であります。

シテ役を引立て、ばかり居た人。神戸でころつと死なれたのを聞いた時、「アツ」をそれこそ淋しい氣がしたものでした。

二度も見たせいか、河庄の孫右衛門としたね。それから鷹治郎の梶原の「石切梶原」の六郎大夫「切り手も切り手」刀も刀の件りが、今も目をつぶる。ゴイリユジョンになつて——梅玉逝つて、あの至藝なしの感が迫ります。

水木京太

私のやうな若僧は、彼のごく晩しかりません。明治初年に團泰二等のざんぎり物に手をつけた氣鋭の時代を知りませんので、近年鷹治郎のワキ役者としての彼に四五度接したのみです。従つてすべてが「篤實な舞臺」の一言で評し盡されます。

さう云ふ意味で、その藝風にびたりこ合つた役柄、鷹治郎の治兵衛に對する彼の孫右衛門役などをいゝと思ひました。尤も紙治の「河庄」全體が少々退屈はさせましたが。

豊田佐一郎

梅玉と云ふ人は可成癖のあつた人です、それであつて印象の濁らない處は矢張腹の据つた名

それは借置きましてわたくしが、故梅玉翁は斯うした間柄であつたに拘らずいつも必ずその劇談や経歴談を聴く事を致しませんでした。唯一度東清水町の自宅の奥二階で約二時間ほゞ種々な話を聞いた事があります。

ですが、それは決して秩序立つたもので無く断片的なものばかりで取こめてお話も出来ませぬが曩にも申した如く玉の如き麗はしい人格の光りはふつくりこわたくしを包んで仕舞つて居ました。その間は、そしてわたくしは極めて長閑やかな春風に吹かれて居るやうな心地にならずには居られませんでした。

「成駒家はんはゑらいお方でやす。あんな人は最うたんこ出まへんやろ、なんほ芝居を改良するなんて謂ひましても、上手な役者が無けりや出来やしまへんあのお方や皆まあ芝居道の國寶てやすな」

ほんたうに感に堪へたこ謂ふやうな口吻でした、併しそれは決して口でそやして心でけなすこ謂つたやうなのでは無く、眞實成駒家を尊重して居られたのであつたやうです。

「わたくしはいつの舞臺でもあの人に花を持たせる事を考へて居ます。わたくし等の仲間のあるものは成駒家は勝手な男ぢや自分ばかり當場ミらうこしてはたの役者が何こか彼こか謂はれて聲が掛るこいやがる、こ謂ふ人がありますがそれはゑらい間違ひてやすな、あの人にお客の聲が掛るこきは取も直さずわたくし等に聲が掛つて來たのです。なんほ成駒家がゑらがつて、一人ては芝居うてるもんやおまへん、一人てうてるもんやおまへんけぎ、其所を一人てうたすやうにするのがわたくし等の役てやす、一座の大將がゑらかつたら自然に皆がゑろなるぢやおまへんか、わたくしはさう思ひます」

優だつたからせう。

二、
何こ云つても孫右衛門てせう。殊に鷹治郎の治兵衛に對立した孫右衛門、かう云ふ結合は今後恐らくは絶無てせう。

藤田草之助

一、
孫右衛門其他二三の役を見たやうに思ひますが、別段これぞこいふ印象も感想もございせん。

二、
したがつて、何が好きだつたこいふやうな事もありません。

武田正憲

一、
不幸にして吾等若輩には、晩年の同優しか知ることが出来ませんでした。ピリツとした味や大上段から斬下す藝風はなかつたと思ひますが、フンワリしたそして枯れた、またそして花やかな舞臺は忘れられません。

二、孫右衛門。

中村 雀右衛門

一、
私が七八歳頃の事でした。京都北の芝居で石

殆んぎ人に對して理屈らしい事や抱負めいた事を謂つた事が無い翁も、此解説だけには可なり力を入れて居たやうです。

わたくしは此時、それで無くても高い人格者だと思つて居ましたが、更に一層それを裏書されて仕舞ひました。

ほんたうにさうです、大なる藝術難から見ますれば個人々々の目に立つた現はれは不一致であります、各優の秀技の綜合によりて始めて完全な良劇となるを謂ふ點から申しますれば、代表的な一人に大賞讃大喝采の下る事は一座の成功を謂はねばならぬのであります。

徹底し洗練し爛熟して而もその總てに超へて居た翁にして始めて此聲を聞く事を得るのであります、一般優人として苟くも一座を組織して其團員となつて居る以上の人達は誰もが此考へを持つて居らねばならぬのであります。斯う謂へばそれでは終生見出される時が無いでは無いかと咎める人もあるでせうが見出されやうとして見出された箔は剥けます、斯うして居て見出されたのは永久的であります。

梅玉翁の如きは實にそれでありました。梅玉翁の盛名は無論その卓拔な技倆からであつたに相違ありませぬが、一面の根強き骨を固めて仕舞つたのは此人格的光輝からであらねばならぬのであります。

「そやさかいわたくしはいつも心得て居ます。成駒家はんが斯う見得を切つたりキマつたり仕向はる時にはわたくしは滅多に正面向て演ませぬ。それは最うキマリの事でやささい木の音でわたくしも共に斯うキマリますが成駒家はんが正面を切る、わたくしはうしろ向になつて切る、是てバラ／＼成駒家アミ

山軍記巖森の狂言に故梅玉さんが鈴木孫市で繁若をつとめた時、梅玉氏に木馬を買つてもらつたのが嬉しくて晩になつてからも乳母に引かせて祇園町をあるきましたので晝間舞臺でぬねむりをして梅玉氏のお弟子の福藏さんに氷ささうを口へ入れてもらひました。見るからにあたゝかい感じがする様に慈愛ふかい人て父が死去いたしました時にも一座して居た同氏になぐさめられ力づけられた事は今も感謝して居ます。私の髪名の際にも成駒家さんと共に口上を述べていたゞきました久しく一座して居ましたので御逝去なさいました時には肉身の人に離れた様なさびしさを感ぜました。

二、「關平物狂」の關平

丸山 耕

一、梅玉の晩年それも東京へ來演の時だけしか見ないので今以て忘るゝ事の出來ぬ偉大さゝ滋味さを覺へて居ます。殊に河庄の孫右衛門の如き情味溢れてあれては如何な遊蕩兒も感奮して改心をしたに違ひないと思得させられました。正に眞の名人と思ひます。

二、「河庄」の孫右衛門、「引窓」の濡髪。

澤村宗十郎

來るのでやす。わたくしも一緒に顔を並べるやうにしてカッターをやつて御覽
わたくしは眞實にして下さるお客様は知らず高砂家アミほめて下さりませう、
それが不一致ぢやと思ふのであります」云。

何云謂ふ神々しい事でせう、成駒家をして名をなさしめむがために取て進ん
で犠牲たるに甘んじて居るやうな仕料、わたくしは心から推服の敬意を拂つた
のであります。

わたくしは斷言致したいと存じます。成駒家の今日ある、素より成駒家を得
意ならざる名優であり巨頭なるの蓋審あるが故に然りであるに相違ないので
ありますが梅玉翁がそれを補けた事がさればご多かつたでせうか、是は管に成
駒家のみではありませぬ。日本の梨園のために、オール劇界のためにわたくし
は故梅玉翁に對して萬腔の感謝を捧げねばならぬのであります。

全くです、少なくも翁は日本劇界のために、文質彬々たる明治大正かけて
の斯道のために、茲にグレート成駒家を産出せしめた産婆的功績ある人だらう
と思ひます。

以上、極めて詰らない話であります、その頭を浮んたまゝ、を書つけて見
ました、そしてわたくしは翁の逸事や逸話を最も能く知つても居られ見聞もし
て居られたであらうと思ふ南地法善寺境内の料亭みぎりの主人福井徳太郎氏に
就てまだ世に知られてゐないものを聞かせて貰ふと思ひながら遂に其意を果さ
ずこんな貧弱な記事を綴つた事を最も恥かしいと書添へて置きます。

嗚呼、梅玉郎如玉、梅のやうにゆかしいかほりも、玉のやうに美くしい光り
とはいつまでも劇界の話題としては咲き、龜鑑としては後人を琢磨する事であ
りませう。

故梅玉丈は舞臺の上にては三四回より御付
合致しませんので深い印象は少ないのですが
あのポツテリとしたやさしい形や顔の造りも
何うか私の父先代高助の様な感想がして居ま
すので何となく今になつかしく思つて居りま
す。

私青年時代で大阪に修業中同優が初めて角座
で福地さんの春日の局を勤められた時、堅實
な役者目つ面白い狂言であつた、今に忘れま
せん。

若月保

残念ながらずつと昔一度見たことがあるやう
に思ふ丈けて何も甲上ゆかねます。

津村京村

おつとりにした、如何にも大歌舞伎の主腦役
者たさいふ感じの優だつたと思ひます。こま
かい科をせずとも唯舞臺に現はれた事に依つ
て、既に一名優としての存在意識を感じせしめ
るまでも言ひ得る優だつたでせう。

鈴木春浦

爺いさんも婆あさんも若衆も娘形もごりごり
に好く科したもので穩健な着實な慕しい藝風

懐かし味と温か味

八 木 柳 緑

故人中村梅玉に就ては、殊更取止めた感想も持合せませんが、近世稀に見る名優であつた事はいふまでもありません。

梅玉さういへば真に「河庄」の孫右衛門が聯想されます。鷹治郎の治兵衛が天下一品であれば梅玉のソレも確かに天下一品でした。演出さか、其枯淡味さかに共鳴するのでなく、放蕩な弟患ひの兄の思情が最も色濃く印象されたやうに思ひます。

誓紙の受け渡しを済んで治兵衛と孫右衛門は「河庄」の掛け行燈を後にして花道に掛りました。女に裏切られた口惜しさで切なさで腹立たしさに懐手をしながら黙々として歩んでゐる治兵衛、弟の不機嫌を取らずして取直してやらう——懸命に努力する孫右衛門、侍に化けてゐる間こそ入用だつた大小に頭巾それを一纏めにして小脇にカイ込んだ孫右衛門は靜かに治兵衛の肩を叩きました。

「なア治兵衛これからうちへいんで久し振りで、おさんの酌で一杯呼ばれよか遅なつたらお前ミで泊て貰ふさかい、お前も一緒に附合ふてや——」

こいふやうな臺詞があります。何等工まざる技巧、平素樂屋で見る梅玉老其儘の親し味と温かさで其思情の湧然なるものがありました。梅玉の孫右衛門を

であつた。

二、

日蓮上人には福助の古い時代から重ねて演出されたもので、あの肥つた格幅が上人の像に髣髴さして好ましかつたし「河庄」に於ける天下一品さいはれる鷹治郎の紙治は梅玉の孫右衛門あつて引立ちもしたものであつた。

平 山 蘆 江

一、

何さなく頼もしくて、芝居の相談相手に逢つてゐるやうな氣がしました。つくり飾りのない藝風がさういふ氣を起させたのでせう。

二、

何と云つても河庄の孫右衛門が好きです。

小 林 愛 雄

一、

文字通りの「圓熟」の二字が彼の凡てを語るものであつた。自然で、丸味があつて底力がある彼の藝風は、凡手の到底及び難いものを持つてゐた。

二、

幸兵衛、それに次では孫右衛門。

邦 枝 完 二

一、

まじめな、しかもイキな大店の御隠居、さ云つたやうな印象が残つてゐます。大阪役者に

観るたんびにいつも目の裏の熱くなる思ひを續けたのであります。孫右衛門のみに限らず、先陣館の微妙、石切梶原の六郎太夫、道明寺の覺壽、土屋主税の其角等々。――

鴈治郎のワキ役として刺身のツマのやうな役振てはありましたが、ゆくりなき懐かし味――温か味に於て他の追従を許さざるものがあり梅玉の歿後、さうした狂言が出るたんびに故人を追慕するもの、今におき切なるものがあります。

梅玉さん最後の憶ひ出

鮭 之 助

絹糸のやうな小雨がしごくし降りつゞく六月の上旬のこころでした。――近世の名優中村梅玉老が卒去したのは。道頓堀の五座の櫓のボンテンには霽れ間霽れ間に赫々こ五彩の虹が照り映わつてゐた初夏の朝でした。

梅玉老は其時丁度大歌舞伎を代表する鴈、梅大一座を組織して神戸中央劇場（今の松竹劇場）に出演してゐました。一座の顔振れは鴈治郎を書出しに福助、魁車の各々々中軸には多見藏が坐り、市藏が控へに梅玉老が留まなつてゐました。別に右團治が花形として庵看板に這入つてゐたこころも書き落させぬ程賑や

は珍らしく「見せやう」にするイヤミのなかつたのが何よりでした。

二、彌陀六。

桂 田 曉 香

別に之を云ふ何ものも持ちませんが今度の追善興行がうまくいつて、忘れられ勝ちな名優の面影を人々の頭に蘇生させて呉れるなれば幸ひだと思ひます。

二、「先代秋」などよくはなかつたてせうか。

森 雨 郊

晩年には流石に精彩のうすらいた事を痛切に感じましたが「寺子屋」の千代の如きは今も猶明瞭に胸裡に印せられてゐます、感想としては梅玉の後に梅玉なしとまで思ひませぬけれども、併し當分彼れのやうな滋味と柔か味のゆたかな世話本位の名優が關西では得られないと思ひます。

二、「近江源氏先陣館」に於ける母微妙。

藤 本 京 一

「磯丸をうしなつた關西劇壇唯一の「フケ役」梅玉をなくした事は誠に痛嘆に堪へませんよし卯三郎がなくても、舞臺の貫目が足りないあ

なか大歌舞伎でありました。狂言は一番目が關ヶ原の三幕物、中幕が寺子屋で三府の外では見られない笹り役揃でありました。二番目は鴈治郎の治兵衛に福助の小春、梅玉老の孫右衛門で河庄が出てゐました。これが梅玉老最後の舞臺でした。

それが不思議といへば不思議で梅玉老の當り藝の中でも第一のもので古今を通じての孫右衛門役者が最も得意の孫右衛門を名残りの舞臺に梨園を去つて逝つたのですから——。その時飄逸な某丈が「梅は飛び多見藏倒れる世の中に何きて鴈のつれなかららん」に駄句つたのを覚えてゐますが、今から憶つて見ますと名優をおくる名歌だつたことも思はれます。

雨の道頓堀を水色と白の麻袴の行列がもの愁しく練つて行かれたのは間もなくの後でありました。

梅玉さんの道頓堀での最後は大正十年五月興行でありました。財界好況の餘波がまだ立つてゐる時でしたから鴈梅大一座の人氣は今から思へば大したものでした。その時には二番目として「お夏清十郎」が選ばれてゐました、勿論鴈の清十郎、福助のお夏でありました。

今日の梅玉老七回忌追善興行にお夏清十郎の「室津の歌」が新作されたといふことは「御殿」以上に故人を偲ぶ憶ひ出さなります。梅玉さんの性格を表はすのは六ヶ敷い字句や變つた詞華もいりません、全く孫右衛門其人であつたせう。高邁な人格と質實なその至藝を貽して逝かれた梅玉老の追善興行に方つて淡い秋の夜の憶ひ出から。……………

の人の芝居を見てゐるこ、故菊地芳文翁の畫を見る感してす。

二、紙治の孫右衛門。

嵐 吉三郎

一、エライ役者の事を立者と云ふた。——故梅玉老を立者中の立者と云ふ。果して立者であつた。他の階級に立者と言ふ名稱は有るか知りませんが私はまだ知らないです。——實際立者であつた此れが私の印象と感想である。

二、「五大力の三五兵衛。昔の狂言であるだけ敵役の様な中に、ユーモアな處が他の人に見る様な不自然でなく極めて眞面目で眼に残つてゐる。其他春日局、實録の淺岡、近八の微妙等々々。

中村 魁 車

一、温厚なお人でした。

二、

日蓮記 佐渡の日蓮聖人「てれめんの手代彦七

實川 延 若

歌舞伎俳優の多くが習慣上さうしても間延びの臺詞を云ふに反して、梅玉老はその晩年に於ても既にあの年齢でありながら新作物に對する早間の臺詞でも、自由に言ふことの出來

故梅玉をしのぶ

己 之 助

現世の符牒の笹木徳數云つた中村梅玉は大正十年六月八日八十才を名残りとして黄泉路へ旅立つてしまつた。

その梅玉は世の所謂福徳圓滿なる顔をしてゐる翁であつた。

見るから福々しい、見るからに長者らしい。此福徳圓滿なる相をしてゐた梅玉は東西を通じての長老であつた。

この老翁が判官をつとめ、「又五郎狐」の正行になり、菊畑の智恵内を樂に勤めたといふのだから實に明治大正聖代の瑞相でも謂はなければなるまい。

一體素人でもかうした高齢な老人ミなるミヨボノミした處があつて、餘り見づもよくないものである。況んや役者である。大概のものでは老ほれが目についてならぬ譯である。處が梅玉にはほんき老ほれた處がなかつたといつても差支がなかつた。藝風のせいばかりでなしに梅玉には顔にも柄にもふつくりミした、若々しい處があつた。

此の福徳圓滿なる相をしてゐた梅玉は熱心なる法華信者であつた。法華信者だから祖師日蓮に隨喜渴仰するのは當然のこゝろだが、佐渡の日蓮だこゝろ、動作住家の日蓮だこゝろ——種々な日蓮を得意藝として居た。そして巡業に行けば必ず

るやうに工風してゐたこゝろを敬服してゐる。
二、心中天網島、粉屋孫右衛門。

村島 歸 之

アンビシヤスな名優の中にあつて、梅玉は、黙々として素直に自分の道を歩いてゐたやうに思ひます。従つて、我々が某々名優に對して持つ反感が梅玉の場合には善感に代つてゐるのを發見します。要するに善いオツサンでしたね。

二、孫右衛門(見聞狭き小生としては)

山 崎 紫 紅

一、圓滿の福相で、いかにも君子らしい人でした。

二、日蓮上人(これは古風の脚本の扱ひ方に於て)粉屋孫右衛門(ワキ役ですが、あの位によい)を見たこゝろがない)

中村成太郎

一、私がまだ十六七歳の時、腰元に出て居りました(狂言はたしか盛綱だと思つて居ります)其時に故人から毎日の様に衣裳の付け方や其外の事を御注意下さいました(故人は微妙を勤めて居られました)其時に本當に御親切な方が思つたのが未だに深く印象にのこつて居ります。

二、晩年より存じませんが、何役にても敬服しない物は一つとしてありませんでした。

の蓮日何れかを土産狂言にして出すことが定例になつて居つた。

けれども此の翁の信心に就いて何う此う謂ふのではなしに、梅玉は藝風なり、柄や顔——つまり役者ぶりから見て、梅玉は決して日蓮役者でないに斷言出来る、日蓮は豪邁なる英雄僧である、佐渡に流されても、身延においても、意氣軒昂たるところが、態度に颯爽たるところがなければならぬ、折伏も、勇猛心は日蓮の生命である——。

梅玉の日蓮は餘りに圓滿無事に過ぎ、餘りに温厚平凡に過ぎて、日蓮といふより法然に近い人になつて了ふ。それは梅玉が年を老つて意氣が衰へたからといふのではない。高福といつた福助時代から圓満な人にして、舞臺ぶりのおだやかな役者として人氣をこり、地位を進めて來た人であつたからである。

梅玉は有徳な役者であつた。君子人といふ謂はれぬまでも君子らしい美徳のあつた人であつた。

かつて團十郎と一座して、自分の儲かる仕ごころを抜いて團十郎の引き立つ様にしたといふ話がある。團十郎ばかりでなしに、梅玉は誰れに向つてもさういふ親切と謙讓があつた。

其の心持ちなり心がけが舞臺ぶりに現はれてゐる。例へば「紙治」の粉屋孫右衛門になつたとする其の好い悪いよりは、まず律義で親切で弟思ひの行き届いた兄さんぶりに感服させられて了ふ。此の兄ならば、——治兵衛役者が誰れてあつてもスツカリ寄りかゝつて思ふまゝに藝が出来やうといふものである。梅玉は自分で芝居するこゝも巧い人には違ひないが、他に芝居をさせるこゝも上手

井手蕉雨

一、新しいゴム鞆を買つた少女が、その鞆を自分の頬へ押あて、斯う目を瞑つて其嬉しさをシミシミと自ら味はふやうな感じを以て時に樂屋で故人に會つた記憶があります。ふつくりこやわらかみのある誠に、人でした。私を芝居好きにしてくれたのも梅玉丈でした。さういふのは、もう今から四十年も前の事です。鳥越の中村座へ丈が來た時、私は亡父につられて觀に行きました。私は幼い時から能樂が大好きでした。芝居は「こわい」ものにして好きませんでした。が、其時丈のお弓(お鶴は今福助丈でしたらうか? ハツキリも記憶しません)でドンドロを見ました。子供心にもシミト、芝居のおもしろさを知りました。其時です。父が歸宅して母に呶くには「坊主も芝居を見て泣くやうに成つたよ」と。

二、粉屋孫右衛門。

白岡道太郎

一、いかにも俳優らしい、そしてどこかに長者らしい趣きの舞臺のあつた人。

二、その時分、また芝居を充分に鑑賞する能力がなかつたものが、土屋主税の「其角」が眼に残つてゐます。

永田龍雄

一、梅玉とはよく體を現はしてゐた梅ぼしの核のやうに、枯れたすいもあまいもこぼりこした味をもつたい、お爺ちゃん。

であつた。さういへば東京の松助なごにもさういふところがあるが、これは謙讓
ごいふのでもなければ親切ごいふのでもないやうだ。謂つて見れば、自分の役
目の冴へた腕で對手を引立てるご云つた方らしい、梅玉ごなるご役目ごいふ意味
でなしに、自分の常場まで捨て、對手に花をもたせる、此の餘裕のあるごころ
ご親切なごころが梅玉の舞臺ぶりの際立つた特色ご謂はなければなるまい。

それから梅玉には惡の分子がみじんもない。其の人柄が藝に出るご云ふのが、
奸の分子も佞の分子も邪の分子もない。春藤文蕃のやうな上つらだけの惡人になつても、顔が赤いごいふだけで、臺詞もこなしも、根つから氣の好いおぢさんになつて了ふ。梅玉にはごんな種類の惡人ご謂はず、惡人はてんで柄にはまらない。

梅玉は何處までも舞臺ぶりの穩當な人である、苦味も辛味も強味もないかはりに、癖も嫌味もない、そして手ぬるいご思はれるやうなごころもあるだけに、ふつくらごしたうちに、軽いが何んごも云はれぬやはらかなうまみを持つてゐる役者であつた。此のうまみはいくら見ても飽きが來ない、刺戟性で無いからであらう。

その質を云へば大きな役者ごか、傑れた役者ごかごいふのではない。若い頃から常識的に圓満が發達して來て、それが老熟して一味掬すべき古雅なる味を粹つた役者である。藝ご云へば平淡な人である、役者ぶりを云へば穩當な人である人を云へば有徳な人である。福助の昔名にふさはしい福徳圓満なる老翁であつた。

二、「さういふわん」がすきてした。

竹内勝太郎

立派な立役者でありながら又得難い脇師であつたご思ひます。例へば紙治の孫右衛門、熊谷陣屋の彌陀六などはそれで、今では鳥渡後を継ぐものがありますまい。

澤山見てもありませんが、先年京都兩座で幸四郎の松王に、千代でつき合つた時、老女房だごの許もありましたが、持ち前の柔みと我子に對する情愛の濃やかさに、忘れられぬ味がありました。

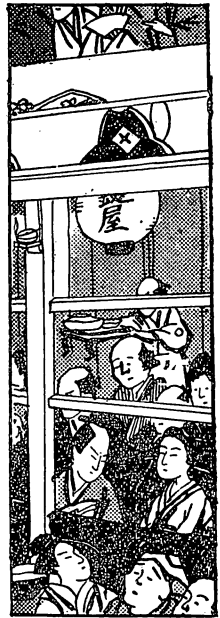
湊放浪

中村梅玉が脇師ごしての名優である事は否みませんが大衆藝術の上から云へばドウでも善い人です。シテ方を喰はんごする意氣なく自分の分を知つた完全人格者です。

鷹治郎さんに云はずれば芝居の演り善い立派な人ですが、民衆の方から云へば好きな處も嫌ひな處も目立たぬ人ですよ。道頓堀の米の飯で無いご不自由でつて別段珍重される人ぢやありませんよ。

御多忙中にも係らず故梅玉に關する印象や感想などをお書き下さいまして餘白ながら厚くお禮を申上げて居きます

編輯部



思ひ出すまゝに

大川 澱 江

そのころ、明治十五年の十一月頃のこと、角の芝居の座附役者であつた市川右團治（故齋入）が東上して以來東京より來りし中村時藏（故歌六）が座頭格で殆んど二年越し中の芝居の宗十郎璃寛や、戎座（今の浪花座）の延若橋三郎一座といふ大敵に對抗して、時藏は孤軍奮闘をつづけてゐましたが、いよくその十一月興行に中村福助（故梅玉）を、角の芝居の仕打和田清七（大清）よりの交渉して澤野新七（尾張屋）の手よりの借りることを申込んだ、此時この梅玉が一座するに否かは、芝居の消長に大變な關係があるので、その返事如何は

一座の制するくらゐのものだつた、ところが幸にも同情心に富んだ梅玉は快よくこれを承諾して角の芝居を應援することになつたのである。梅玉の附人としては中村梅太郎（故富十郎）中村芝鶴（故傳九郎）故政之助以下の門葉をつれて中村時藏、中村駒之助、市川鮫太郎（先代鮫十郎）市川正朝、阪東しうか、實川百々之助（故稻丸）といふ可なりや派な大一座が成立した、無論人氣もよく梅玉の角の芝居へ出勤は珍らしく双方の大敵に當ることが出来て、時藏も非常に喜んだ。萬事がかう好都合に進めば何事も云ふことがない筈であるが、そこが昔の芝居道の複雑なところいよく稽古にかゝり初日の蓋を開けやうといふ間際になつて、双方の役が納らない、梅玉の人氣ばかりがあまりに高すぎたので、時藏が憐んだのか、その他にまた何かの事情があつたのか、その邊は悉しく知らないが、兎に角前狂言が『十二時會稽會我』これはその頃、團十郎と宗十郎で問題になつて居つた、兄は水見舞、弟は火事見舞と云ふた會我、中狂言が『極彩色娘扇』寺子や兵助内より増井まで、切狂言が『鼠小紋東君新形』で前は、福助の十郎、時藏の五郎で出合ひ、中は時藏の寺子屋兵助と喧嘩屋五郎兵衛二役で此の人の出し物、切狂言は、福助の稻葉幸藏、易者梅山實は鼠小僧次郎吉、さかういふ風に大体がついたところ、中幕へ福助が朝比奈藤兵衛を附き合

から、切狂言へ時藏を、若徒會平次で附きめはさうこ仕打が交渉しました、(覬賣の三吉)いふ子役を今の福助丈だつた(思ふ)所が意外にも時藏は絶對にこれを謝絶した。従つてさういふ事なら福助も朝比奈藤兵衛を斷つた。

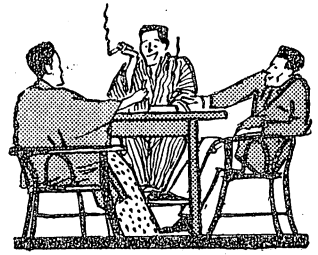
折角喜んだ甲斐もなく、仕打は實につまらぬ目を見たまいふこころになるので、而かもこれをさうするわけにも行かなかつたのです。て止むを得ず、會我兄弟の顔合はせただけで蓋を開けたが、何しろ團宗其儘の水見舞火事見舞の癖へいふ會我兄弟が大坂にも出来た上久々の福助の角の芝居へ出勤し嵐小僧が評判能く人氣に叶つて二十五日間の大入をつけたのであります。

さうしてその翌十六年の一月は例年になつて居た神戸の大黒座へ出勤する事になつて、三月の芝居で又々合同劇を思ひ立つた仕打側は、今度は狂言の事から役揉めなきがあつては面倒ミ用意周到、通し狂言として『北雪美談時代鑑』即ち鏡山を男で書いた狂言、福助が、岩藤の亡靈ミ初浦屋上の助、時藏は藤治由縁之亟で、ウンミ兩腰に顔合せの芝居をさせる算段になつて居た、處が今度は常人より鬮倉連中(福助側)が承知しない、ミいふのは以前の行が、り上、時藏の由縁之亟に、福助の尾上之助が、草履で打たれるのは快うよくないミいふのです。今から考へれば殆んど見戯に類したこころやうですが、其當時は實に躍起だつたのです、そんな事で役を

岩藤の亡靈ミ多賀大領といふ二夕役に替へたのですが、今度は本人が役不足で納まらず、遂に仕打が狙つた金儲けの算段は滅茶々々、談判は破綻してしまつた。

福助は荒五郎(先代)駒之助、鮫太郎、梅太郎、正朝、芝鶴等の一座にて京都北側の芝居へ行くなり、つて止むを得ず、岩藤を實川八百藏、尾上之助を實川百々之助に代らせて平凡な芝居のま、蓋を開けるこころになつたのです。

こころが、此芝居の初日のこころ二幕目夢の場て中縁之亟が岩藤の亡靈に會つて消へ込む所で時藏が花火の爲に右手に大火傷を負ひました、樂屋内は大騒ぎを起したすぐ手當を加へて部家内に寝かしてあります、此急を聞いた福助は笠屋町三つ幸筋の自宅より醫師を連れて親しく時藏の樂屋の病床を見舞はれました、芝居上では殆んど敵味方の如き觀を爲してある兩優が私情に於ては斯程の親しさで、また一面福助の非常に深切な人であつたこころを物語るのです、私しは何んミなしに當時の子供心に『ア、高砂屋の親方は深切なもんだ』ミなうしたこころが忘れられず、時折りに觸れては思ひ出すこころがあります。梅玉翁追善號に聞きましたので、ちよつこ其事を記して見ました。



喫煙室

雨 蓼

善悪ともに大高砂家に招かるゝを無上の榮辱とする勝彦麻呂氏は脂切つた緞頭の二々重腮を歪ましい手で下から上に撫て上げた「けふは親方（中村梅玉）に呼ばれてウンと吐られた」爲る事なしに茫然として居た一同は昨日からの天氣豫報に胸を衝き思はず膝を進めた維時大正六年八月末の午後、道頓堀浪花座作者室の光景。

『彦麻呂さん、一遍天王寺の合邦ヶ辻のお閨廳さんを見て來、何んぼ芝居かてテト大き過ぎやあへんか』

或は額を叩き或は突き袢彦麻呂氏は銀練した假髻で身振り手振り面白可笑しく古人梅玉を其儘演出するのである。

『若旦那は氣兼ね程溫和しいけぞ親方は几帳面てゴテや○真ん中の納簾は工合が悪いな出臍の飾り様かて不可んがな、ひわれに洩るゝ細き聲、此麼入り口で内へ聞ゆるか、彦麻呂はん、おまはん一體年幾歳や○今朝は戸籍調べまておましたぜ○今日の境遇は兎も角も、元は侍、今は道心、洒落の一つさと言ふ修行者合邦の家

の佛壇にしては粗末過ぎはせんかわい舞臺へ出んよつて、彦麻呂はん、おまはん代りに出まき○エライ雷ちや、けぞ乃公知らんがな竹中はんが詠らへて旅へ往た竹中はんの詠らへ通り出來てないよつて其雷が乃公さこへ落ちるん役悪いがな』

彦麻呂氏の舌は益々滑かである、後見は肩合腰で彦麻呂氏の飛沫の散るのを見てゐる、藤岡頭取は初日を氣遣ひ片唾を呑む、政助氏は向ひ側の小高い臺へ腮を預けて一語も洩らさじと聞耳立てる彦麻呂氏は太い眉毛を釣り上げて更に一調子張り上げた。

『そやけぞ親方も無理だつせ、其麼上等の佛壇飾つたら姪女はんのお袋の衣裳さ釣り合ひが取りやへん皆さない思ふ、？』

此刹那東側の便所から手を拭きく老紳士があらはれた、知らず噂の主の中村梅玉である、有繋の彦麻呂さんも度膽を抜かれて絶句、具さに晴天の霹靂である、手拭受取る男衆の眼は異様に輝いてゐたが古人は幸に何事も知らぬらしく眼鏡越しに一同へ一瞥を呉れて悠々さ舞臺から西棧敷の稽古場へ去つた、政助氏は正視に忍びず撃め顔を首垂れて小走りに其跡を追つた。

『萬一開けてたら閉門やせ』藤岡の銅鑼聲は彦麻呂氏の耳へは檢事の論告の如く響いた、さうしてサミ急用を思ひ出した様に蚤に足裏を咬まれた恰好で裏木戸から何處かへ消れた。跡は附き懸なく俊徳丸の癩菌は果して寅の年月揃ひし女の血清療法で治るかぞ、判かつた様な判からぬ様な、芝居さは別交渉の話が出たが是れに耳藉す者は無かつた。

小一時間も経つて鈴の様な眼に變色した彦麻呂氏がニーツと裏木戸から顔を出した、が、それは、機嫌のよい古人梅玉が大勢に送り出されて其俵が東角を北へ曲つた瞬間であつた。

故梅玉の印象

並山拜石

△故梅玉のここに就いて、思ひ出すまゝを、こりこめもなく書き綴つてみます。

△私がいづも思ひ出すのは、彼の福徳圓満な相です。その相から割り出すと、彼の性質も多分、さうしてたらう、その故か、私は彼の敵役云ふものを一向見たことがないやうな気がします。演つたことがなかつたせうか、たしへやつたことがあつたにしても、マズかつたことせう。所謂『悪』などはとても出なかつたせう。私生活はこかく、舞臺上の彼は、福徳圓満そのもの、やうに私の眼に映るのが常でした。

△今日（九月十六日）の、ある新聞の夕刊を見ますと、梅玉追善興行に於ける狂言の投票のうちで有望なのが、「板額」「乳母争ひ」「合邦」「先代裁」「矢口」等だに書いてありました。私には、それらのうちの彼の役は、一向心に印象されてをりません。尤も、これらは梅玉の印象を蘇らさうとした

のではなく、寧ろ福助、政次郎を生かさうとしたからせう。梅玉一役にして、私の印象に残つてゐるのは、伊賀越の幸兵衛、河庄の塲の孫右衛門、それから近江源氏の微妙です。これらの役々ば彼の得意のものであつたかごうか私は知りませんし、その出来榮えに就いても當時随分批難したやうにも覺えてゐますが、妙に今だに意識に残つてゐます。

△大正十年、彼が神戸で出演中客死してからは、鷹治郎の相手としては中車や市藏が擗ばれるやうになつたやうですが彼の役々比較してごうせう、彼の生前、彼の隠退を徳意した人々が随分ありましたけれども。

△私は大正十一年五月中座で、鷹治郎中車一座で「伊賀越」を演じた時、ある雑誌にこんなことを書いたことがあります——「……山田幸兵衛は中車の役。先年道頓堀で、『伊賀越』上演の折は鷹次郎の孫右衛門に對して故人の梅玉がこの幸兵

衛を勤めた。如何にも好々爺で、私達は、政右衛門が雪の鏡
覺て捕手を相手に自慢の腕を振つてゐる時、それを見物する
のに籠甲縁の眼鏡を悠々懷中から取り出して掛ける仕種をし
たが、當時はそれが馬鹿々々しく批難の評をある雑誌に書い
たところがあつたが今にして思ふに——これを中車の分別くさ
いのに比較するに、枯淡で飄輕で、神影流の達人でゐながら
今の境遇に安んじてゐる人物がよくあらはれてゐた。中車の
幸兵衛は政右衛門と志津馬とを會はしておいて、あつて笑ふ
やうなトリツクを行ふ人柄には見えなかつた……」

△彼は一本立ちの出来ない役者とした。座頭にも、ミテにも
なれない人とした。ワキに廻つて、相手を補助する人とした。
それほど鷹治郎にはありがたい人とした。なくてはならない
相手とした。今の鷹治郎には、親としては梅玉を得、子とし
ては補助を得てゐるわけです。鷹治郎の成果には梅玉親子の
補助が、與つて力あることは具眼者の認めるところだと思ひ
ます。

△それにしては梅玉には霸氣がありませんでした。失禮なが
ら福助氏はさうでせう、父の足跡を踏んで行くつもりでせう
か？。

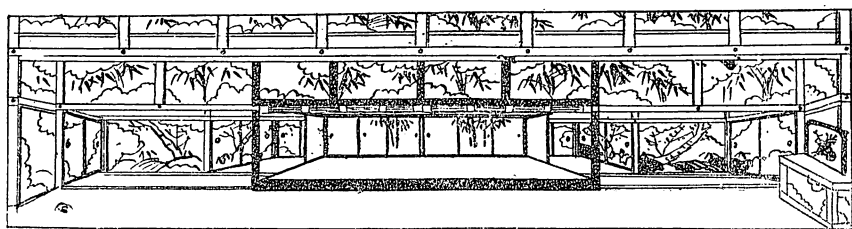
それについて

正岡 蓉

畏敬する三つ扇の大師匠が「累ヶ淵」の一條なら、三世圓
馬を親父分とする正岡蓉氏にも多少は異例なエッセイもかけ
やうだが、松竹たるもの、なんてそのとき、予に一筆を與へ
てくれざりしや？ 梅玉のことはむりです。

最近、鷹治郎を識つた程度のぼくが、さうして梅玉をしつて
あやうか！ですたゞ、三光堂のピーコックつて明緑に金で孔
雀をかいたマークのレコードに、片面は福助の元寇の亂、片
面はこの梅玉の日蓮記が入つてゐたのをもつてゐました。そ
れによつて、ふつくらと溢れて太い聲の梅玉を僅に識つてゐ
ます。

「立正安國論、かたぐ、おき、めされい……あれは何の役だ
か、さういふご俄に哀しく、びいやら、ごろりご笛が鳴りた
しました。そしてこの哀笛の鳴咽にまじつて、梅玉の聲は、
ら響しくも何時がそこかつゞきます……さ、いふ以上の他
に故人につき何の記憶もあらう譯はありません。



寫實的時代物としての

『實錄先代萩』

夢 明 生

『實錄先代萩』は明治九年六月初めて東都新富座に於て『早苗旨用達聞書』六幕十五場として上演された、これが『實錄先代萩』である。

仙臺伊達家には奸臣がはびこり、原田甲斐多田刑部等は幼君龜千代君を無きものにしてお家横領の陰謀を企てる。その一味である荒木和助は原田甲斐より頼まれて御殿へ忍び入り、龜千代君を刺さんとしたが果さず、遂に捕はれ、田村邸の假牢に呻吟する。同じ一味である神並三左衛門が原田の差入物だ云つて原田から贈られた酒を荒木に飲ませる、荒木は忽ち毒に當つて悶死してしまふ。始めてそれが毒酒と知つた三左衛門は此處に原田の無情を怒つて一味に裏切し、臨終に荒木から受取つた連判狀を以つて水戸街

道の穴戸宿で水戸黃門に直訴する。

奸臣の目の光る其中に幼君龜千代は乳人淺岡が身を賭して守護してゐる。やがて淺岡は忠臣片倉小十郎から、奸臣等の連判狀も手には入つたからその滅亡も近いうちと聞いて安堵の胸を撫て下ろしてゐるが、まだ男勝りの鐵石心は張りつめてゐる。淺岡が殿の不興を蒙つた良人白川主殿との仲に産れた一子千代松が片倉の情で御殿へ連れて來られたが、淺岡は忠義の心が鈍るこて血を吐く思ひで無理に親子の名乗りをせぬ。遂に伊達安藝、片倉小十郎、松前鐵之助等の忠義で、一味の悪事現はれ、板倉内禪正、酒井雅樂頭の吟味で裁斷が下る、原田は此世の恨みに安藝を目がけて刃傷に及ぶ。安藝はお家の

安泰を聞いて笑つて睨目する。

以上は實録先代萩の劇全体を通しての筋であり、又誰しも知り過ぎる程判り切つたものであるが、これは講釈『伊達騒動』を故河竹黙阿彌が脚色して劇にしたものである。従來の『伽羅先代萩』の域を脱して役名なきも實て行つたが、明治の新機運に合致して好評を得、殊に今度上演される御殿の場なきも従來と同じ舞臺面てしかも飯焚の件なきを見せぬ寫實的な舞臺が當りをこり、そして中幕物として素晴らしい好評を招いて今日に至つたのである。

ロマンチズムからナチュラリズムへ三近世の文藝思潮は明治の我劇界にもその傾向を著しく表現してゐる、世話物に自然主義を高唱し始めたのはすでに五代目幸四郎に遡り近くは小團次、五代目菊五郎に於てその爛熟の頂點に達したそれが時代物、自然主義の表現が著しくなつたのは極く近世の事であつて、九代目團十郎一派の所謂『活歴』と稱する寫實的時代物はこの傾向を一層濃厚に現はしたものである。『實録先代萩』然り、『實録忠臣藏』『實録天神記』なき明治になつて著しく現出した。これ等の芝居は明らかに自然主義の見地に立つたものであらう。

今度、この『實録先代萩』の御殿の場を榎玉追善興行に投資によつて選定されることになつたのである。當狂言は榎玉の當狂言中の随一のものにて、役劇は故榎玉の遺子である福助の乳人淺岡、政治郎の松前鐵之助で福助の親譲りの至藝を見せることになつてゐる。故榎玉の面影そのまゝ、だこ云はれる政治郎はあの立派な體格と聲色を以て演る鐵之助は若いながらに貫目のある舞臺振りを見せることであらう。

鴈治郎の片倉小十郎は既に定評のあるもの、局には雀右衛門の澤田、吉三郎の吳竹、薙女の松島、霞仙の錦木で、召使花野は扇雀が勤める。子役としては吉瀧壽の龜十代君、正太郎の千代松も決定されてゐる。



助之の男の「下床」



芝居みたまゝ

岡本綺堂氏作

貞任宗任【三幕】

朝生順三

序幕 奥州外ヶ濱の場

下手一面に荒海を隔て、遠く蝦夷を見遙かす、奥州外ヶ濱の景。
上手寄りに常足の二重、屋根は板葺荒風に堪ふるやう、石などを乗せてあり、正面は籠を垂れて出入口左右は古びた板羽目、爐の側に粗菜籠土瓶など、壁には笈笠などかけてある。漁師十藏住家の體にて幕明く。荒ぶ浪の音の中へ濱の娘三人、康平頃の髪かたち、藁草履にて、浪打際にくるく、雁風呂焚くさて、流れ木を拾ひ集めてある家のうちより十藏の娘小磯十七八の年頃皆

と同じやうな容姿にて出づ、

小磯「お、皆さん能う御精が出るごことござんすの、杵も櫻も一時に咲く奥州の果ては、此頃やうく春めいたれど遠い都ては、花も散り、雁も大方は歸り盡したてごさいせう。」
ご娘同志の振たをやかに、ごもく、流れ木を、拾つてある所へ、外ヶ濱の十藏、厚司に竹笠、網と掬を持つて歸つて來るに小磯はいそぐ、出むかへて

小磯「お、父さん今戻れたか」
十藏「げふは朝から沖へ出たが何をいふ

にも此暴れて、雷魚一匹網に入らぬ、所詮駄目だご見切りをつけて、コレ此の通り空網で歸つて來た」

ご十藏は笠をさり、くつろぐうち、小磯は甲斐々々しう片付けつ、も娘達ご共々に小磯「昨日今日は天氣もよし、陸にはソヨこの風も無いのに、どうして沖が此様に荒れるのでござんせうな」
ご不審がれば

十藏「お、年の行かぬお前等は知るまいが、これが昔から云ふ津輕の丹後波であらうよ。」

小磯「丹後波ごは何ういふ事でござんすの。」

昔語りの物珍らしさに娘達、竹縁に腰かけた十藏を取巻いて聞入る。

十藏「この津輕の守り神は岩木山神社、あの御社には何人が祭つてあると思ふな。」

小磯「そりや知れた事對王丸ご安壽姫様であらうが。」

十藏「サアその對王ご安壽様は、遠い都路にさまよつて、丹後の國の三庄太夫ごいふ、悪人の手にかかり、可哀やお二人ごも、果敢ない御最後を遂げられた、其怨みが今に残つて、此津輕の土地へ丹後の人が、一人でも入つて來るご、忽ち神の怒りに觸れて、海は俄に暴れるのだ。」

さういふ祟りがあるに依つてこの外ヶ濱で時ならぬ時があるご、村役人が嚴しく詮議して、丹後の旅人を見付け

たが最後、直に繩付にして、國境まで送り出すのが善ひ」

「理由を開いて娘達ホツと顔見合せて人の恨みの怖しさに、おの、きながら高まざる海鳴の音を聞く。

時しも向ふより貞任の家來岩手五郎髪を垂れ、胡服、大小、覆はき姿、これも丹後波さ感じつ、

五郎「京奥州の戦ひは、九年以來結んで解けず、或は京方の間者が入込みしにあらざるが。

今日は殿を始め御一同が善知烏神社に御參詣故怪しの者あらば油断なく注進せよ。」

と云ひ捨て、去る。
十藏は奥へ、小磯等は流れ木を束ねてある所へ、金賣小次郎、實は丹後小次郎時兼、裁付草鞋の旅姿して出て

小次郎「チト物を問ひますが、善知烏のお社はは何う參つたら好うござんしやうな。」

「さ聞ふ物じしなら、言葉なら土地の者でも無い様子に娘達は

「こちらの人はなま、うなお前は何處から來なされた」

小次郎「詞は國の手形さやたら隠しても隠されぬもの、推量通り我は都に生れて旅から旅へ金賣商人」

「さ聞く娘等は清育ちの荒くれさ何處やら違ふ男振りにも、疑ひ心も何處へやら幸ひの雁風呂に入れやうと招じる。
小次郎「供養の爲の雁風呂なら、一風呂呂

浴びたいなれど、我等は少しく行手を急げは……」

小磯「ハテ忙しない、郷に入つては郷に従へ、此濱へ来て、雁風呂が斷るさいふ者があるものか、些この間ぢや、マア、に待つてゐなさんせ。」

「さ無理に腰を下させ、逃げてはならぬ、雁が祟るぞやと、そはく、支度に立去るを、小次郎幸ひにして草鞋の紐を結び直す處へ先刻の岩手五郎此家を通り過ぎんとして小次郎を見付け

五郎「コリヤ其方は何者で、何處へまゐるぞ。」

小次郎「コリヤ其方は何者で、何處へまゐるぞ。」

小次郎「私は旅の商人これから善知烏の社へ參詣に行きます。」

五郎「兎も角も證議の筋がある、それがしと一緒にあれ。」

「さいふに小次郎困り果て言ひわけするほど怪しまる、處へ貞任の妹松山侍女召連れお社參詣の途中此様をながめて割つて入り

松山「證議なしに手籠の證議は疎忽、これ、その者、云ひさく術もあるならは早う身の明白を立てたがよい」

小次郎「舟に懷中より赤き割符をさり出し

小次郎「一の門を越ゆるさきいよく疑ひなきものご種つた時、これさへあれは外ヶ濱まで、通行善支へ無いこの事ばこの割符を貰ひ」
と敵方でない證據を見ては五郎も證議に及

はずさ放ちやる。
松山は小次郎を心ある目で眺めてゐたが

松山「もうお別れ甲します。さうぞその割符を返しなされて下さりませ。」

「さ聞いて思ひ入れあり
松山無言のま、頭を振る。
小次郎「コレおなぶり下されますな」

「さ袂をさるに
松山「何故其やうな事をする。都は知らず陸奥では男が女子の袂を引くは戀を叶へよさといふ謎ぢやぞ。」

「引かれた袂を拂はぬは女子の方でも嬉しい返事……」

「文玉葦で戀をする、優しい都の上臈さ陸奥の果の女子さ心も違へは戀も違ふ、袖を引いたがそなたの不肖、袂の糸は結びても、縁の糸は繋がつた」

「さ聞くに小次郎も憎からず
小次郎「すりや眞實にわたくしを……」

松山「偽りならぬ證據には、今宵の戌の刻を合圖に常光寺の門前まで忍んで來やれ」

「さは云へ人目を突する小次郎を、壓するやうに松山は腰より葦の葉の笛をさり出し、これを吹けば妨げなしと思へいふに

小次郎「デラ其笛の音を相圖に」
松山「必ず約束忘れまいぞよ」

「以前の侍女出來りお社方でも用意整ひた見かへりて彼地へ行くさ目でしらし小次郎よろしく下手へ這入る。
家のうしろより小磯をはじめ娘三人

小磯「この世には珍らしい都人、無理にも引止めやうと思つてゐたに……お姫様が……腹の立つ事」

「折角沸した湯を水にして娘共々忌々しけに皆別れゆく。」

向ふより阿部貞任、髪を垂れ頬より顔へかけて長き髻、胡服太刀、履ばきにて岩手五郎、南部太郎、津輕六郎を従へて、十藏内の縁先へ腰うさかける

十藏、小磯恐懼して挨拶するうち沖の波に眼をつけ

貞任「浪は遠く蝦夷地より、南に向つておそひ来る海の力は凄まじひもの、それに引かへ我々は北へ……追ひつめられ此處は日本の外ヶ濱これより北へは逃るゝ路もない喩」

「無量のおもひ、十藏は慰め顔、

十藏「憚りながら海に向ふには蝦夷さいふ大きな島もあり、イザさ云へばあれへお立退きなされませ、都の鬼も流石に、追ひかけては参りませまい」

貞任「けにも憎いは都の鬼ちや、彼等は

我を夷さ呼べど、彼等こそ夷に劣りし

臣ぞ、頂く冠は榮華を誇る飾、はける

脊は弱きを蹂躪る無慈悲の印ぞ」

「悲憤を洩らすに、五郎も太郎も言葉を極めて都方を罵りまするに

貞任「さればこそ我も前後九年都の鬼を

仇として、飽くまでも戦ひしが、彼の

八幡太郎さか云ふ奴、軍の駆引上手にて

八幡太郎に討ち締められ滅亡の時節

近づきぬ、最後の際には世を驚かすほ

どの、働きして彼等の肝を冷やして吳

やうぞ」

「大勢漸く不利な事を感じてゐる、十藏は

ツト進み出て

十藏「それにつきまして合點のゆかぬ此の丹後波若しや敵の間者なきが入り込んだかかも知れませぬ」

「さいふに五郎は先程の若者割符を持つ爲に兎に角放した事が心にかかり今一應の詮議に引捕へやうとて往きかゝるに、小磯は思ひ入れあり

小磯「ア、モシお待ちなされませぬ途もなしに追はふよりあの旅人は今夜戌の刻に、常光寺の門前へ忍んで來る筈」

「お姫様さ何やら内しよて約束して、ご娘心の只一團に妬ましう

さの音を合圖に……」

と聞きも果てず貞任氣色ほみ

貞任「何、妹が其奴さ忍び逢ふ……して

其相手は、何者……」

小磯は訝もなうべら／＼と話し込むに貞任

怒りに怒り

貞任「其奴必ず赦すまいぞ、有無を言はず引捕へよ」

五郎「ハッ」と答ふる折しも上手の方さしが

しく前の娘三人慌しく走出て

「アレ／＼御神馬が乗れてくる」

「蹄にかけられては大變ぢや」

「早う逃げやうぞ」

「皆々逃込む處へ貞任の弟宗任同じく髪を垂れ胡服にて足早に出來り折から狂ひ來る善知鳥の神馬の前に立乗りて口を取り鐘む

るうちに、宮人追ひ來り一體して引立て、行く宗任は家來共を見返り

宗任「宗任參る迄もなく何故止めぬ、人に過失あらは何ぞするぞ」

「さ云はれ五郎等皆顔を見合せ恐れ入りつ、尙伺さなく神馬に關して不吉不安を感じて黙然とす。」

處へ濱の若者四人倭武多の張を持出し來るに十藏咄めて

十藏「花の咲く頃に倭武多でもあるまいませ」

「貞任の前をおもんはかるに貞任屹さなり貞任「知らぬか汝れ等、昔阪上の田村麿東國の夷を征伐せし時夷は山林に隠れて姿を見せず依つて俄に謀計をめぐらして夜に入つて倭武多祭を行ふ、夷はこれを見んぞ出て來る處を四方より圍んで襲殺しにす其夷が亡ぶるさいふは不吉ぞ、先年より此祭を差止めたるに今再びこれを催すは我に面當か但しは貞任に亡びよさいふ祈りか、憎い奴等め」

「太刀抜いて倭武多を斬るに若者等は怖れて逃げ込むを宗任思ひ入れあり

宗任「兄上、この倭武多を河さ御覽せらる、な」

貞任「何ぞ見るさは……」

宗任「眞心を現はして我々の運も最早末となり、其れに引かへ敵勢いよ／＼加るより

「今の中に篤々御思案あれ」

「さ云へぞ貞任黙然とて答へず五郎、太郎六郎いづれも血氣にまかせて一泡吹かせん

るうちに、宮人追ひ來り一體して引立て、行く宗任は家來共を見返り

宗任「宗任參る迄もなく何故止めぬ、人に過失あらは何ぞするぞ」

「さ云はれ五郎等皆顔を見合せ恐れ入りつ、尙伺さなく神馬に關して不吉不安を感じて黙然とす。」

處へ濱の若者四人倭武多の張を持出し來るに十藏咄めて

十藏「花の咲く頃に倭武多でもあるまいませ」

「貞任の前をおもんはかるに貞任屹さなり貞任「知らぬか汝れ等、昔阪上の田村麿東國の夷を征伐せし時夷は山林に隠れて姿を見せず依つて俄に謀計をめぐらして夜に入つて倭武多祭を行ふ、夷はこれを見んぞ出て來る處を四方より圍んで襲殺しにす其夷が亡ぶるさいふは不吉ぞ、先年より此祭を差止めたるに今再びこれを催すは我に面當か但しは貞任に亡びよさいふ祈りか、憎い奴等め」

「太刀抜いて倭武多を斬るに若者等は怖れて逃げ込むを宗任思ひ入れあり

宗任「兄上、この倭武多を河さ御覽せらる、な」

いふに

宗任「人の力には限りがある心は矢竹に
はやつても自然の勢には勝たれぬもの
ぢや」

に貞任屹となり

貞任「おそろへたりと雖此ま、おめ／＼
仆れまい何時なりとも、かゝつて來よ
都の鬼は先づ此の通り」

と俊武多を踏み破るに皆々立寄つて共に引
裂くを宗任ながめて嘆息する浪の音はひし
きうち――(毒)

此處は常光寺の境内、本無臺一面の平舞
臺、上手に高き鐘撞堂寺内は杉樫の大樹に
交つて、櫻美しく咲いてゐる。娘、女房、
子供等、笛太鼓の音を聞きつゝ、俊武多の群
の來るのを待ち居る體にて暮あく。向ふよ
り濱のもの大勢派手な着物に俊武多(萬燈
の如きもの)がついて笛太鼓に合はせ狂ひ
來る。

唄「俊武多流れろ、忠臣は止つばれ哉て

は哉て哉せよヤサ／＼ヤサヨ」

と皆口々に囃しながら踊る

ト手より外ヶ濱の十藏飛び出し

十藏「エ、待て、お咎めを受けぬ中に止
める」

と叱つても聞かず若い者の浪六進み出て

浪六「ア、コレ老爺ごの其様に叱らぬも
のぢや、何年も續く軍騒ぎで、この

浦も大弱り、天下泰平を祈りの爲に久し振
りて催した此の祭りぢややらしてくれ」
祭り衆は今更止められぬ、と突張るに十藏
手にもつ搦を取直し

十藏「無理に通るなら通つて、片つば
しから叩き、こすぞ」
小磯走り出て

小磯「ア、コレ父さん日頃の氣性さ云ひ
なから血氣な若衆達を相手にして怪我
でもしたら何さなる」

十藏は聞かず遂に群集の中へ暴れ込む來合
せた貞任の家來も加勢して斬り込むに若者
達驚き騒ぎ四方へ散るを十藏なほも追つて
ゆく、小磯一人跡に残りてうろ／＼する處
へ松山笛を持つて出小磯に金賣小次郎を見
かけぬか尋ねる

小磯「イエ一向に見かけませぬ」

松山「オ、可いよい早う行きやれ」

小磯「ハイ」

心の中に冷笑してよろしく去る、最早戌の
刻にも不拘人の見へぬに心患ひ居るうち貞
任現はれ

貞任「妹は居らぬか、松山、松山」
と呼はれて松山應ふるに

貞任「オ、それに居つたかさ(透して見
て)、何用あつて今頃そこらに佇んで居
るのぢや」

松山「エ、」

貞任「日頃好める笛を吹きに出たか」

松山「エ、」

貞任「笛も可からう、心を澄まして靜か
に吹け、われも聞かうぞ」

松山さては我が秘密を悟られしかきためら
ひあるを

貞任「ハテ何を猶豫、早う吹け」

松山答へず、木の間より月出づ

貞任「オ、月が出た……昔の歌に
(昔笛ふけは雲りもぞする 陸奥の蝦夷
にな見せせ秋の夜の月)

忍ぶ夜に月があつては便りが悪からう
に、心を少し入心をはめて昔笛の秘曲
を吹きすまし、陸奥の月を曇らしては
何うぢやな(冷笑)

「兄がこゝに居ては吹けぬさいふか、
左もあらじ然らば奥へ行かう程に必ず
吹けよ」

松山「エ、」

貞任「吹かずは汝れ赦さぬぞ」
と云ひ捨て、奥に入る松山跡を見送り兄の
口振りを察して思案に暮れる

櫻の花夜氣にちら／＼散りかゝる

松山「笛を吹かずは兄の叱りを受くる許
りか、都人には偽はりものさ恨まる、
鬼にも角吹かねばならぬ笛ならば、忍
ぶにはやみこそよけれ、心をこめたる
昔笛の音に、陸奥の月を曇らして見せ
うぞ」

とやうやく決心し月に向つて笛を吹く、笛
の音にひき出さるゝが如く、丹後の小次郎
木陰より窺ひ出づ

小次郎「姫君ではおわさぬか」

松山「オ、そなたは」

小次郎「忍んで來たは嬉しいが、差當つ
たる一つの難儀……コレ」

と耳にさゝやく兄の事

松山「心が通じてか幸ひに、月も曇つた
早う此場を立退いて……」

小次郎「此の場を早う逃れよこはお情け過ぎて恨めしい」
「今別れては此世で逢へぬやらも知れぬ身の上にいづれも眞實」
松山「陸奥の女子の戀は七生迄もかわるまいぞ」

「兩人手をさりかわすうち、月は隠れて暗らし」

「曲者」
「走りかゝつて捕へんとする聲あり。小次郎突のけ立廻るうち岩手五郎家來に松明持たせて出て遂に小次郎を糾み敷き縛める」

笛さ太鼓の音又もや起り俊武多の一群過ぐるを簑等に身をつむ宗任見おくりて思入れ、虫の聲遠く——(暮)

義家假家形にて常足二重木椽付、軒に籠をのき上り、正面上手は古代風の床、鏡を入れた唐櫃弓矢を入れた胡録などあり、床につゞいて出入りの襖、庭には櫻の立木、すべて夜の陣所の體。
家來「一人烏帽子直垂にて」

「お取次お願ひ申す」
「と呼ぶに奥より鎌倉權五郎景政同じく烏帽子小手、腰當、腹當にて出て」

景政「お取次の次第は……………」
「十郎」敵方より阿部の宗任、大將に見參の上、密々に申入れたき儀ありて、
唯一人罷り越してござりまする」

景政「何、宗任が參つたぞ……………」
合點の行かぬ面持、而かも一人て供もなきに考へてゐるうち奥より八幡太郎義家引立

烏帽子小手腰當、腹當にて出づ、

義家「宗任が參つたぞ申すか、何かは知らぬが對面せう」
「ご坐につけば景政侍らしく言葉を構へて大將に近づく巧みやも知れずご案するに義家は」

義家「たごへ夷さは云へ彼も人に知られしもの、無禮を加ふるな」
「さいましむるうち宗任、直垂にて簑笠を小脇に抱へて來椽の下にひざまづくを」

義家「イヤ、其處では話が出來ぬこれへ」
宗任「此儘御前へ出るは障かりありこれを暫時……………」

「腰の太刀解き家來に渡さんとする」
義家「其氣遣は無用、大將と大將との見參ちや太刀は其まへり」

「雅量を見せ左右を見返へり」
義家「珍らしき客、酒肴の用意いたせ」

「申付け權五郎一人を残し他の家來後く」
義家「さて宗任、ようこそ參られた予は義家ちや」

宗任「ハツ戰場にてはしばし見參すれ某、親しくお目通り仕るは今宵初て、」

義家「それがしは鎌倉權五郎景政お目知り置き下され」
景政「それがしは鎌倉權五郎景政お目知り置き下され」

「皆式の如くに挨拶あり何しに來たかご問はる、儘に、宗任は大勢を知つて和議を乞ふる旨を述ぶる、義家快く盃の滿をひいて戰語などとするうち、フト見真同意がご問はれ宗任心苦し」

宗任「今宵推參せしは宗任の一存、兄の心中はまた確かめては參りませぬが」

義家は萬一兄不同意たりとも宗任異變はないと聞いて一响の間に兄の所存を聞かせよ云ひ

義家「其方も心急ぎであらう、予が馬を貸して遣はす鞭をくれて立歸れコレ誰かある」

「ご乗かへの馬に鞍おかせ」
義家「返容なくは貞任不得心と見て攻めかくるぞ」

「馬の用意整ふ迄モウ一献重ねぬが、今宵は思ひの外に杯を過して、いたく醉を催した宗任ゆるせよ」

「ご曲禮に倚つてウト／＼とする」
宗任「最早これにてお暇申しまする」

「ご云へご義家答なし」
宗任「折角のかり寝を起すも無禮、此まゝすぐに戻らうか」

「ご義家に向つて一禮、庭へ下り、簑を着て二足三足行きかける、風の音、花散るごころに宗任立止り、此機會を逸してはご心亂るゝさま見ゆれぞ、思ひ直して行きかける又立止つて思案の末、思ひ切つて簑をぬぎ椽先迄戻り來て」

宗任「宗任はお暇を申しまするぞ、殿……………」
「八幡さの……………」

「と呼ぶごも答へなしに任いよく決心して袂をくゞり太刀を抜きて忍び寄れごも正體なし、宗任斬かけんごして懸り得ず」

宗任「一旦降伏を誓ひながら刹那の間に敵意を起すは、我ながら淺ましき夷心

「……………殿お詫び申しまする」
刀を納め再び篋を着て足早に入る。
景政出て

景政「仰せに従ひ出陣は暫時……………オ、
寝てござるな……………殿……………殿……………
……………(こ大きく)……………」

義家眼を開きて

義家「オ、左様か、よい……………よい……………
さ又うさ……………さなる景政はあたりをかたづ
けるうちに……………(暮)

善知鳥神社の拜殿、白木の二重屋體に高欄
附、三方に翠簾を下し、真中に階段あり、
平舞臺左右は立木、

庭先には篝火を焚てあり、正面の椽先に貞
任と千代童、いづれも白衣をつけ向ふ向き
になりて神の前に祈り居る下には宮奴二人
篝火をくべ終つて入る、下より岩手五
郎先に立ち家來共小次郎の繩尻取つて引立
てる

五郎「殿の仰せに従ひ曲者を召捕つてム
りませう」
貞任見返り

貞任「曲者いふは其奴か、面見せい」
小次郎は臆したる體もなく頭をあけて貞任
を見る、

貞任「さて、憎い奴、姿はやつせご正
しく敵の間者であらうが」
小次郎心を据えて

小次郎「いかにも我れは源氏の家來、丹
後小次郎時兼、金賣となりて入込みし
は汝の機密を探らう爲ぞ」
貞任「其機密を探らう爲、色に事よせて我

が妹を欺き、今宵常光寺に忍び逢ひし
な」

小次郎「捕はれの身となれば敵の嘲けり
は是非なれども色に事よせ功名の餌
とする卑怯者ご云はれては小次郎の一
分立たぬ、計らずめぐり逢ひお身の妹
ご知つたれど、遂に心奪はれ戀に落ち
た」

貞任「さては汝れ、誠の戀か」
戀なればこそ笛の音による秋の鹿まご
打あくる小次郎を時こそよし神前へ祈願の
誓に捧げんごかたへの立木に縛りつける。

松山「ア、もし罪のもしはこの松山、ご
うでも御仕置さあるならわたしを身代
りに」
と云へど貞任聞き入れず家來共々さへぎる

松山「それが見て居られうか、コリヤも
ういつそ我身が先へ……………」
ご懐劍ぬいて我胸元を突きかゝるを五郎走
りよつて支へる。劍奪はれてよ、ご泣き伏
す松山に眼もくれず

貞任「それ早く柴を持て」
ご呼ぶに一同柴を運んで小次郎の前に積み
重ね火をかくる、此世からの地獄のさまに
松山身も世もあられず

貞任「オ、怖ろしからう、女の涙で此の
火は消せぬぞ」
ご冷笑ふ火は燃移つてゆくに松山いよ
ご狂ひ。遂に失神する

貞任「火の勢がぬるう見ゆる、隙間なく
柴を加へんごする時、宗任ツト入り來り家
來の持つ矛を奪つて燃へ盛る柴をかきちら
し踏み消し

宗任「口頭は都の人を鬼と呼べご生れな
がらに人を焼くは、誠に鬼の所業、兄
上何さした事」
神に捧ぐる誓には鳥あり獸ありご云ひつ、
小次郎の繩を解き放ちやる

貞任「武勇一邊の我れと違つて日頃より
分別者の宗任ご最前よりなすが儘に黙
して居つたが、敵を敵にあらずごして
放ちやる不思議の行ひ仔細を云へ」
宗任「お尋ねなくとも申上げご存じて
居つた、五郎も聞け宗任は思ふむねあ
つて、今宵限り降参ご決心いたしました」

貞任「やあ、降参とは、さては傾く運を
見限つたかムウ……………」
ご五郎を見るうち椽傳ひに母の眞弓貞任妻
山の井出て來り共々不覺者ご歸るも宗任は
家の爲身の爲ご説いて止まぬ、貞任いつか
な聞かず遂に幸の神前に土器三寶取揃へ唐
櫃より一領の鎧を取り出し父ご眺め

貞任「戦ふ者にも條理あり」
宗任「降る者にも理なきにあらず」
互に異なる道をゆきて、兄弟別る、由を告
げて禮拜し

貞任「宗任堅固て暮らせ」
宗任「ハッ」
ご互に杯を交す。

此時より遠よせの聲かすかに響く皆耳を傾
けて屹つごなり

貞任「ム、敵はいよ／＼寄せたるな母上を始め女子ごもは一先づ常光寺に立退かれよ。家來共は直ちに放き矢を射よわれもやがて續かうぞ」

ご下知するに五郎を始め太郎、六郎向ふへ走せ入る。遠寄せの聲

貞任「阿部貞任が最期の物具」

ご鎧を抱へて奥へ入らんごするを、宗任思はず取つきて

宗任「兄上……今一度御分別を……」

貞任「エ、未練ぢや——」

振放して椽俣ひに奥へ走り入る。

宗任嘆息する時松山髪振り亂れて

松山「オ、兄上」

宗任「妹か小次郎は無事に落した安心せ

い」

宗任これより奇手の陣へ行くに伴はんかご

云へさすが女の小次郎にも逢ひ度けれど

も母や姉への養理がすまず黒髪アツツり切

り取り

松山「末の松山浪越して誓ひし事もみん

な仇……（ご涙をぬぐひ）陸奥の女の

戀の形見ぢやご、小次郎ごのにお傳へ

下され」

ご見返りながら母へ赴くに

宗任「兄上を始め一門の人は飽までも一

ツの道をゆく、妹は戀の道、已れは我

が行くべきに行かうぞ」

ご黒髪をふごころにして入る、

戰場の有様濃厚に聞けドンチャンの音愈々

烈しくなる

貞任大童にて鎧に矢を受け片手に千代童を

かへて太刀を抜き持ち

貞任「千代童、傷は浅いぞ千代童……心

をたしかに持て……」

ご呼べご千代童最早正體なし、貞任狂氣の

如く

貞任「恨み重なる都の鬼め、國を奪ひ家

を奪ひ、果ては我が子までも、奪ひし

よ」

と無念の牙をかむ浪の音高く下手より外々

濱十藏走り出て

十藏「お、殿さま……残念な事で御座り

ました」

一旦の勝負は時の運船の用意をして蝦夷へ

渡れと勸むれども

貞任「奥州は祖先墳墓の地、こゝを去つ

て何處へ行かう」

一同に覺悟をさせよご十藏を母や妻の許へ

つかわし一人の自害毎に寺の鐘を撞げよご

命する

十藏去るご共に岩手の五郎手負ながらに殿

を尋ねて出て來り

五郎「恐れながら冥途の御路しるべ……

……」

ご倒れゆくに

貞任「右には家來……左には我子……次

第々に亡びて行くわ、やがては鐘も

聞ゆるであらう」

といふ間もなく第一の鐘に思はず立上り第

二の鐘の音による／＼として椽にドツカリ

無量のおもひにひたる、下手の木陰より丹

後小次郎、烏帽子鎧長持ちて窺ひ出貞任

にビタリごつける。

貞任「ム、汝は小次郎、貞任の首所望ご

あらは取らしもしやうが先づ待て」

小次郎「待てごは車駄……イザ斬るぞ」

貞任「はやまるな小次郎、耳をすまして

今鳴る鐘を聞け、汝の戀人が最後の知

らせぞ」

「戀を打破る無常の鐘、地獄の底から

響いて來やうぞ」

第三の鐘、ひびき來るに小次郎驚き

小次郎「たごひ火水の中なりごも女の命

だけは救ひ出さんごしたるに」

と茫然たる處へ南部太郎、津輕六郎走り出

左右より小次郎に矛をつける

貞任「ヤア待て兩人彼一人討つて何にな

る一門悉く亡び盡して貞任の最後の時

到れり、その矛を以て左右より我を突

け」

ご云へご兩人顔見合せるを貞任強ひて突か

せ

貞任「ヤア小次郎我が首は汝にござらす討

取つて手柄にせい」

小次郎「流石は貞任、世に男ましき最期

ぞ、心靜かに生害あれ」

上手より十藏、小磯出てなげくに

貞任「お、貞任も今死ぬるぞ」

波の音天地もくつる、許り貞任矛を左右に

かき込んで

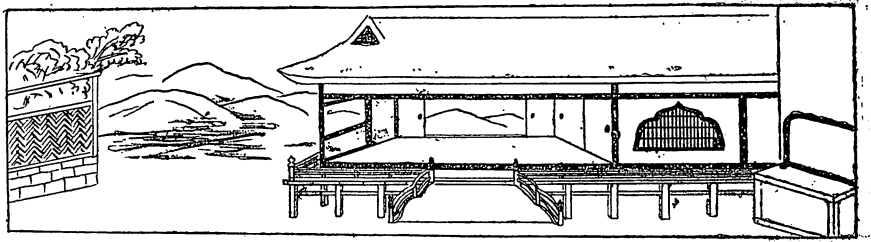
貞任「陸奥の士は都の鬼に奪はる、ごも

海は限りなき力を以て千年の後迄も仇

を呪へ」

ご大いに叫ぶ、小次郎刀をぬき十藏親子は

合掌す。浪の音にて。——（幕）



吉野山

(十月興行上演台本)

楠正行の閑居

登場人物

- | | | | | |
|--------|---------|-------|--------|---------|
| 一、腰元若葉 | 一、辨の内侍 | 一、同徳三 | 一、面賣三作 | 一、橋判官正行 |
| 霞仙 | 魁車 | 政治郎 | 福助 | 鴈治郎 |
| | 一、仕丁又五郎 | 一、同千束 | 一、同龍田 | 一、腰元巻筆 |
| | (實ハ塚本狐) | かなめ | 女長 | 扇 |
| 長三郎 | 長三郎 | | | |

竹本連中
長唄連中

木舞臺正仰高二重見附銀地の唐紙、上手塗骨障子障體、下手落間能き所に櫻の大木有り、同じく釣枝負敷、下手いつもの所に仕掛の枝折門有り、下手は山遠見、花道、下手一面に雪札を敷詰める都て樞正行の閑居の體、上手出語り連中、下手出囃し連中の山臺有り。

唯「行空の雪間に近き金峰山、楠判官正行三世に菊水の

定紋は、實にかんばしく見えにける。

ト是にて腰元四人銘々に雪細工をして居る。

卷筆。ツ、トモウ此の兎こいふものは、餘りに耳が長いので

思ふやうにはならぬはいナ。

千束。長いこいへば若葉殿そなた何ぞ出來たかいナア。

龍田。何が物もいはず一心になつて、定めし美しく細工が

出來たて有うナア。

若葉。オ、出來た所が近年の大出來、マア一寸見やいのふ。

皆々。コリヤ何ちやへ。

若。何んぢやよは、達磨様が座禪を組んで居る所ぢやわい

ナア。

卷。そんなら是が達磨かいナア。

千。私は又鼻の化物がこ思ふたわいナア。

龍。イエ〜鼻なればよけれぢも、さうやら若葉殿の顔に

似た様に思ふわいナア。

皆々。ほんにコリヤ、よい見立てぢやわいナ、ホ、ホ、ホ、。

若。アレ又そのやうな悪口云やるのかア、コレさうぞして

いふた所が、爰は吉野の片山遠りオ、さうぢや、こんな時いつもの面に賣てもおぢやればよいに待身に成るなこは此事、テモ辛氣な人では有るわいナア。

唄「辛氣な事やミ枝折戸に見やる向ふへ面賣が。

唄「面やめん〜輝町中賣りあるく、お多福、すぐ

いち、響若、燕比須に大黒天

ト眼になり向ふより面賣三作詠の面荷を擔いで出て來り。

面賣。此中の御詠へもの定めてお待ち兼ねて有う早うお目に

かけましよう、さうぢや〜。

ト居直り枝折の内へは入る。

お詠への面漸く只今持て参りました。

若。コレ面賣さん、こつちの詠へもの隙取つては待ち遠う

て、もそつこ早うして下され頼んだぞや

成程左様でムりませうシタが何を申すも日短な時分ツ

イ仕事が手間こりまして、よう〜今日持て参りました、お腹立のだんはよろしくお詫びを申します。

ム、さうして詠へものが出來たミ有れば、ちやつこ見

せてたもいのう。

卷。私も早う見たいはいなア、早う早う〜。

若。サア〜只今お目にかけてます、即ち是が酒の科にて

若。怒り上戸、泣上戸、果ては目出度く仲直りの笑ひ上戸
そうして今日は外は持つて居やらぬのか。

面。イヤ大分持つて居りましたが、まだ是れに少々賣り残
り餘の物にはお福の面。

若。オ、羞くあひな。
オット花盗人不用心吉野のお山は天狗の面、色の白い
は善い男。

若。オ、そのよい男がこつちの望コレ三作や。
唄『さうぞその善い男賣つても、その替りソレ常か
らいふて居やる舞の手振り一寸爰て見せても。

卷。それはよい思ひ付き、妾も早ふ見たいはいナア。
是れは又迷惑な、さうぞ御免なされて下さいませ。

龍。辭退しやるが、尙床しい遠慮をせずこ。
皆々。所望じやく。

面。抑も面このらんじやうは
唄『事もおろかや天笠にたいせふせぞんこ名附け申
す尊き佛のおはします、又五城に婦人有り女は
賣女さ唱ふなり佛名めつの時に至て別れを惜み
御手すから、にくしばかりを寫し尊み給ふを始
めにして魔界の妾は犬狗の面。

皆々。ヤア〜見事〜。
サア皆さん、是から此面屋さん殿様の御前へお目見

得をさせてはさうで有らうナア。

皆々。それが、よからうわいなア。

若。サア〜三作私しが手を引いてやりませう。

面。イヤ、それは恐れ入ります、左様ならいつれも様。
皆々。三作かうおじいこのう。

ト唄になり皆々上手へ這入る下社の譚になり。

唄『逢ひ見んこ思ふ心を一筋に踏みもならはぬ杖突
きの野路も山路も白妙に跡ふりか、す初深雪、
憂きをする身の市女笠。

ト辨の内侍出る、
又五郎烏帽子仕丁の捲らへにて出て来り。

竹『はるか下つて白張の白きも雪に埋もれて吹雪を
凌ぐさむしりや。

唄『我も世の妻乞かねて。
竹『アノ山見たい。

唄『此山見たい梢も雪に見えわかて。
竹『思ふ人さし草がくれ。

唄『馴れも諫めつ諫められ。
内侍。ほんに不思議な縁でそなたの世話此様に妾をやつしす
かしたらして御所を出て、道にて思はぬ難儀の折柄、
そなたが來たもつて段々この介抱忝ないぞや。

又。さうおやつしなされても誰が賤ご見ませうぞ、紅

は園生に植ても隠れない、ソレ〜正行様の庵へ早く、お供いたしませう、サアかうお出なされませ。

竹『いそ〜戸畑に立寄て、

ト、本舞臺に來り。

おたのみ申ませう〜、

竹『正行一ト間を立ち給ひ。

正行。誰ぢや〜。此大雪の夜に何處から來たぞ。

又。御所からのお使ひにムります。

又。ナニ、御所よりはは〜。

ト、正行平舞臺へ下り門口へ來て。

そちや誰ぢや、そちや衛士でないか、名は何ミ申す。

又。衛士の又五郎でムります。

又。その衛士が何て來た。

何て來たは、ア、ソレ私は久しく女房に別れまして、それは〜難義致します、爰かし野山を尋ねまして、女房戀しや、ホ、ヤレホ、でムります、女房の

行衛がトント知れませぬ、それでけふは吉野三界をめぐつて、ツイ内侍さまの難義を救ひましたものでム

ります。

何をいふぞ、内侍はどの内侍。

是はシタリその内侍さまがお前を慕つてかけこんでム

ります、古いやつじやが、内裏女郎には新しいまだ手

又。正。

入らずのぶつこりもの、サア〜ちやつこ〜。

竹『突き出されても今更に内侍はごふやら恥しく顔

をそむけて。

内。正行様、御所を忍んで参りました。さうぞ添つて下さ

りませ。

正。合點の行かぬ、その詞、斯く雪中こいひ、誠の辨の内

侍なら、何ぞ慥かな證據があるか。

内。その疑ひは聞へねぎ、自らも身の云ひ譯、慥な證

據はあなたの自筆。送り結びし此知册。

ト短冊を渡す。

正行受取り見て。

内。ドレ。迎も世に永らうべきにあらぬ身の假りの契りを

いかで結ばん。コリヤ、コレ 某が手跡こいひ包みし

されば、楠家に傳はる菊水の紋所。

私しの疑心晴れましてムんすかへ。

内。シテ伴はれし又五郎は御所にて覺への有る舍人か。

正。いつしか見た事なれども、けふの難義を救つてたも

つて此の御所へ。

内。吉野の御所には見なれぬ舍人。

又。エ、私は。オ、ソレ〜彼の花山の院にまします折

から、階下の塵りを清めの役その折拵、女房の行衛が

正。シテ、その女房は。
 又。今に行衛が知れませぬ。
 正。こりや、又五郎、そちや誠の衛士ではあるまいかの
 又。エ、。
 正。サア何ご。
 又。正真正銘紛れなしの衛士にござりまする。
 正。内侍殿には猶以て大内を勤むる故朝儀拜賀の年中行事
 知らぬごいふ事よも有まい、今正行が問かくるが、兩
 人共に答へて見るか。
 内。大内のまつりごこ。
 又。年中の祝ひ事。
 正。存じて居るか。
 又。如何にも存じて居りまする。
 正。然らば問へ。
 内。問はれつして。
 又。節會。
 内。朝儀の。
 正。そのいわれ。
 内。あらまし。
 又。語り。
 内。申すべし。
 唄『かけまくも賢き代々の昔より、王法佛法相應じ

て、年月毎に祝ひ事、朝賀節會の式あり四海を
 納め給ふない。

ト、七草を踏む事あつて。

後キツチヨウ。

正。白馬ミかいて青馬の。

内。節會に遣ふ。

三人。宮御子が。

竹 『けふ初午の印ミして、稻荷まつりのみやけもの。

内。女夫事して貝合はせ。

又。嬉しゆなうて。

二人唄『何んミせう、あれ見やしやんせ 蛤の。千

尋の底に育てきも、外の貝には合はぬミ云う

て、女さはがし殿達も、同じ心ちやあるまい

思ひあまるや。海士がつの髪を、からけの箱

ならで、二心あるかけぞら。

恨みにあもつ振りの袖、櫻ミ散つた紙糞を、

風が取り持つ轉び寝や。

山寺の春の夕暮はなア、ヤアホ、、、、。

泣竹『まわらぬ舌で燭臺を、ホイ水鉢が割れた、此

水鉢が割れたのを、見らにつけても娘が事、

今年や十二で走るが軽う。流行風さへ引きも

正。雪に残りし又五郎が足跡。

ト、キツミなる。

又。エ、。

ト、又五郎思入れ。

内侍恠り。

正行附け廻りになり。

正。

狐狸、犀形五百年を満ちて、人間の姿に變ず、正に汝は去る頂華山の院の古御所にて此正行に變身せし野狐なりと見抜いて置いた。サア何を以て此正行に近寄りしぞ、ありやうに仔細を申せ。

又。

サアそれは。

正。

サア。

又。

サア。

正。

イデ正體を現はしくれん。

『怪しものご立ちか、れば内侍はあはてさ、ゆる

中又五郎はハア〜いづくともなく、正體は消へ

て跡なく見々にけら。

(幕)

中座 梅玉追善興行役割一覽

片倉小十郎、西屋金五郎、桐判官正行(馬治郎)○八幡太郎義家、乳人淺岡、女房お砂、面賣三作(禰助)阿部三郎宗任、白痴の清十郎、辨内侍(魁甲)金賣小治郎實は丹後小次郎時兼、衛士又五郎實は塚本狐(長三郎)、十藏の娘小磯、娘お八重(成太郎)仲居お秋(成笑)遣り手お重(成三郎)義家の臣五郎(高雀)南部太郎(馬藏)仲居お峰(雀男茶文吉、侍女卷筆(扇)娘きよの淺屋の小大夫、侍女龍田(馬之助)侍女夏草、小婢よし(市郎)松前鐵之助、面賣德三(政治郎)貞宗の母真弓、西屋藤左衛門(鰻十郎)鰻千代君(吉満壽)娘おひさ、遊女千壽(音鷹)保科十郎、侍女春野、花屋の明石(福萬壽)宮奴乙手代政藏(市見)津輕六郎、漁師綱六(右左治)宮奴甲、若者松藏(延平)漁師綱三(延郎)料理人平助(齊五郎)島原直馬、漁師梶右衛門(箱登羅)妻山の井局松島、女房お房(延女)外ヶ濱十藏、局吳竹(吉三郎)土佐の漁師茂平(市藏)「當る十月興行」阿部次郎貞任澤田屋久五郎後に西屋久五郎(延若)鎌倉權五郎景政、召使花野、伴藤吉(扇吉)禿梅野(章景)岩手三郎、加瀬田三平(桶三郎)料理人利七、後に煮賣屋利七(卯三郎)一子千代松(正太郎)侍女雪野、澤田屋娘お琴(福太郎)貞任の妹松山、局錦木、遊女市之丞、侍女若葉(霞仙)局澤田、遊女小大夫(雀左衛門)



『たをやめのみなご』

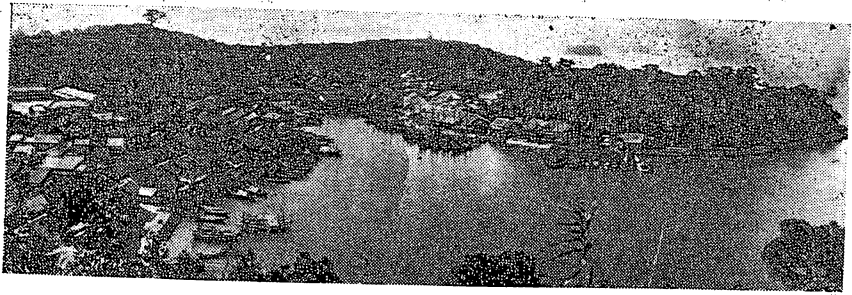
室の津事情

鳥江 鍊 也

なまぬるい潮風の渡るしつかな瀬戸の入江、
 平和に明けて平和に暮れる、むかし乍らの室の
 津には今もなほ「文明」には餘りめぐまれてゐ
 ない古いみなごの町である。そして私共が
 「室の津」と聞くまきに、あの美しい清十郎を
 思ひ、また戀に狂ふたお夏の姿が想はれる。さ
 かのほつて「室の津」は遊女の發祥地であるこ
 いふ奇しくも珍しい傳説が偲ばれるのである。
 海上七里の向ふには小豆島をのぞんだ播州の一
 漁村、昔は五泊の一まで云はれた、出船入船
 のはげしい港だつたが、今は汽車にも電車にも
 見放されて、たゞ節慶からの連絡船と龍野から
 の人力車と網干港からの乗合自動車の便がある
 のみである。播磨風土記には「港は江の内常に
 靜かに風を防ぐこゝにまるで室のやうな所である

こいふので室と名附けられた」といふ様な意味
 が記されてゐる。徳川時代には西國大名の參勤
 交代の往來に必らずこの港に御用船(御社船)を
 つないで、その夜の泊りの大名のお側には室の
 遊女が侍つたといふ事である。明治維新迄は室
 津千軒と稱して可なり繁華だつたが現在は一漁
 村として戸數三百六十戸、漁業の外には古代高
 麗から傳來の皮細工業もある。

「たをやめのみなご」室の津にある加茂大明神
 は鴨別雷大明神を祭つてあるが、その祭禮の時
 は遊女が必らず供奉したものである、これには
 こんな話が傳はつてゐる。神代のむかし、日向
 高千穂の峰に降臨された時、ある神様が遊女を
 つれて來られたこいふ事である。神話的にも亦
 これを歴史的にも考へれば或は粹な神様があつ



てそんな事もあつたらうに首肯し得る傳説である。祭禮に遊女が列した古事は謡曲「室君」にもある通り、仲々立派な風俗をして供をしたさうである。室君（その地の遊女）達は船にのつて離し立て神前に詣つたもので、その時の衣裳は金糸銀糸の櫻や梅のぬいこりをした金襴の振袖に羽二重の袍をはき

素袍姿も美々しく、頭には日月を形取つた瓔珞をかむり金幣を挿けて行列の中はぎにならんだ、そのわらばれた遊女には首笠をかむつた遊女の二三十人やまた袴をはき男まげに結つた藝者が先に離して堂々行列したものである。その加茂大明神御幸の輿は謡曲に「これは室の明神に仕へ申す神職のものなり」とある如く神主が乗るので、正三位の位をもらつてゐたから大した威光だつた、この行列順を調べるに先づ船着役を先頭に臨時用刃、警固侍、町供人、御神寶器、小鳥帽子、大年寄、御供辛櫃、



友君自刻の木像

神子、大鳥帽子、御幣、御禰、祭主（正三位）風流傘、從五位、從五位下、正六位下、氏子中、こいふ風に書いてある。これを見てもいかにこの室の津では古代から遊女が尊はれてゐたか、轆る、然り室の津はたをやめのみなにてある。いく百年の昔、初代室君、花うるしこいふ遊女は晋賢菩薩の化身である。こまで云はれた飛んでもない話がいまも尙残つてゐる。書寫山園教寺の惟空上人がある夜の夢にこの室の津に普賢菩薩が在すに見て、はる／＼逢ひに

て菩薩の姿になり白象に乗つて昇天したといふこれは印度あたりから渡つて來た佛話そのまゝの虚説が、今の室の津の人々の持つ一つの誇りになつてゐる。これはほんのお笑ひ草にしかすぎぬ話。しかし花うるしの傳説もして確かなものにこんなのがあつた。それはこの港に或年碇泊した唐人船に所望されて花うるしがあてやかな

舞の一さしを見せた御神にさいふのて、その船から美事な八疊つりの蚊張を貰つたが、これを禁裏に献上したことで、そのまた褒美に金千兩を下賜され、淨名、正法、正洞、大雲、見性の五聖舎を建立したさいふ奇特家の一面を物語つてゐる

また室君の外に友君さいふ仲に佛教信者の遊女があつて

淨土宗の開祖圓光大師即ち法然上人がこの浦を経て讃岐へ流罪の折、友君は小船を出して迎へ上人に法の道を聞いた、上人は友君の美をたへてその時こんな歌を興へて行つた。

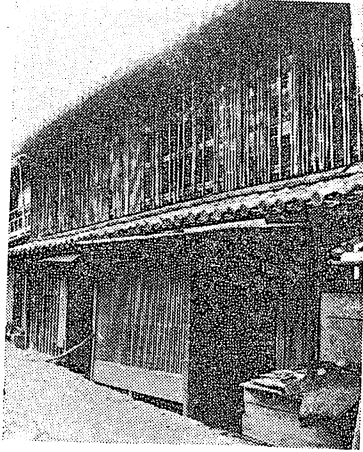
かりそめの色の

ゆかりの戀にだに

逢ふには身をも

惜みやはずる

そして自像をお刻みになつたが時日がなかつたので未完成のまゝ行つてしまつたのを友君がそれを完成させたさうである、そして上人と別れてからはスツバリミ頭を丸めて庵を結び念佛三昧に入つたさいふ。それは建永二年今から丁度七百八十年前頃の話である。もう一人、宮木さいふ遊女は醜聞中



昔の西屋(遊女屋)

納言源顯基に思はれて自由廢業をやり京洛に住んでゐるが、やはり潮風ぬるむ室の津が戀しくなつて舞戻の尼になつて暮した、しかし望郷病はなほつても、今度はおのこ戀しさにな切れず、千行の涙を流して入水したさいふ涙の水(又は涙の壺、涙の磯も云ふさいふ)名所がある。

この様に「たをやめのみなご」の誇りは、いにしへのたをやめたちに虚賀ごり交せた色々々の箔をつけて傳へてゐる。何はごもあれ斯くの如く知名の遊女を持つ室の津の現在の遊女屋はごうかさいふに見るからに肉の香のむせる様な破れ格子の小茶屋三軒をのこしてゐるのみである。徳川時代から明治維新迄は遊女屋も仲々澤山あつて盛んだつた田島屋さいふのがあつたが段々時代と共におころえて行つた。

當時參勤交代の諸大名がこの港を往來した記録が當地の役場に残つてゐる。それを見るに次の様な次第で、かりにも一國一城の主が往來するのにつれていかに賑やかな所だつたか

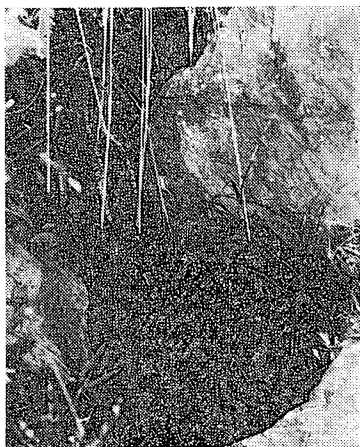
懐かれる。

參勤交代通行の諸侯

松平薩摩守綱貴少將	領地	萬千石
島津式部少輔久壽	薩摩	七・一・九
松平左衛門尉光行侍從	日向	三・〇・七
松平肥前守綱政四品	筑前	五・二・〇
黒田甲斐守長軍	同	不詳
松平安藝守綱長侍從	同	五・〇
淺野式部少輔長照	廣島備後	四・二・六
松平長門守吉就侍從	備後	五・〇
毛利式部元賢	長州	三・六・九
鍋島細伊守直頼	豊後	五・〇・〇
鍋島礒津守直之	肥前	七・二・〇
鍋島備前守直條	同	五・四
松平伊豫守綱政侍從	同	三・〇・〇
池田信濃守政言	備前	三・〇・〇
池田丹波守政倫	同	一・二・五
松平淡路守綱矩侍從	阿波	二・五・七
蜂須賀飛騨守正哉	阿波	二・五・〇
松平隱岐守直定四品	伊豫	一・五・〇
松平駿河守定真	伊豫	一・四・〇
小笠原遠江守忠雄四品	伊前	一・五・〇
加藤石京守泰忠	伊豫	一・〇・〇

今度中座十月に上演される大森痴雪氏の『室津の歌』は西屋こいふ遊女屋の家庭悲劇に時代の確移を見せたものである

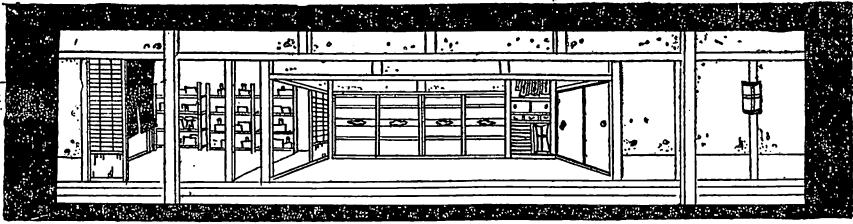
それに最も全盛をきはめてゐるた時分の産物としてお夏清十郎の情話がある、清十郎はこの港の酒商人和泉屋清左衛門の息子で大した色男、室の遊女花鳥、浮舟、小太夫、明石、卯の葉、筑前、小左衛門、千壽、長州、市之頭、小吉、松山、出羽、みよしこいふ大勢の女に惚れられたこいふ事、好色本の主人公になれさうな人物、そしてお夏の實母も室の遊女であつた



涙の壺

話狂言の新機軸を開かんとして鷹治郎が力演する、二番目物の序言としてこの「室の津事情」を書いて見た。忙しい事務の暇に書いたもので調査の粗雑な點御諒求が願ひたい尙この記事の爲めに特に同地に出張してくれた松竹宣傳部黒田卓爾君山崎比佐雄君の勞を感謝する次第である。

こかいふ話。今度の「室津の歌」には關係がない。こ



第一場

室津の歌

二幕三場

十月興行上演脚本

大森痴雪作

序幕ノ一 室津の西屋
同 二 室津の港

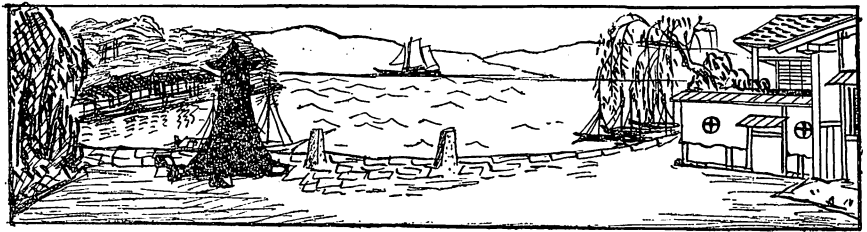
時 嘉永年間

處 播州室の津

登場人物

- 一、西屋金五郎 (遊女屋の息子)
- 一、西屋藤左衛門 (金五郎の父)
- 一、お房 (金五郎の母)
- 一、お妙 (金五郎の妻)
- 一、澤田屋久五郎 (魚問屋の次男)
- 一、茂平 (土佐の漁師)
- 一、小太夫 (西屋の遊女)
- 一、明石 (同)

- 一、千壽 (同)
 - 一、三芳 (同)
 - 一、浮舟 (同)
 - 一、市之巫 (同)
 - 一、お重 (西屋の遣手)
 - 一、お峯 (同仲居)
 - 一、お秋 (同)
 - 一、お岸 (同)
 - 一、お七 (料理人)
 - 一、お梅 (同)
 - 一、小よし (小婢)
 - 一、平助 (料理人)
 - 一、文吉 (西屋の雇人)
 - 一、清十郎 (宿なしの白痴)
- 其他、旅客、武士、遊女、禿、仲居、宿屋の客引、物賣、船頭等、



場二第

第一幕ノ一 室津の西屋

平舞臺、正面上手寄りに凹字形をなした一室。その正面は襖、上手側面は板戸の物入、下手側面は障子(開放ちある)。正面の鴨居には神棚、さまざまのお札などが祀りある。室内のよき所に帳場を設け机、帳簿筒、火鉢その他の調度をあしらふ。室の外は廣い板の間で、下手奥へは廊下が鍵形に及び、爰から座敷の方へ通ずる心、廊下に沿つた下手の側面は臺所に續く道具部屋で、幾段にも吊つた棚の上にさまざまの食器が載せてある。上手の前面は内藏で、頑丈な網の扉を鼠返しなどが見てゐる。

播州室の津の遊女屋西屋の座敷と臺所の中間にある帳場の體。

時は嘉永年間。秋の日の午後。

(女房お妙が帳場に控いてゐる。下手から仲居のお岸が臺の物を持つて出る、遊女二人と新造一人が廊下から出て、上手へ通り過ぎる)

お岸。御寮人さん、お頼み申します。

お妙。凜の間やな。

(臺の物に眼を通し帳合する。下手から仲居のお秋が、同じく臺の物を持つて出る。)

お秋。蔦の間に度ます。

(お妙は同じく帳合する、二人は臺の物を持つて廊下から去る。下手から料理人の平助が出る。)

平助。若旦那さん、お留守でございますか。

お妙。はあ、何や。

平助。酒樽一丁明けさせて貰ひます。

お妙。明けこくれ、さア。

(物置の鍵を渡す)

平助。へいわ大きに、御寮人さん、この頃はよふ

若旦那の代りさせられはりますな。

お妙。はア、何やそはくしてな。

平助。何ぞ出来てはるのミ違ひますか。

お妙。そんなことならわ、のやけれど……。

平助。ふう、面倒なことでもござりますのか。

お妙。いえ、さういふ譯でもないけれど、お座敷へは出される、帳場の代りはせんならんて

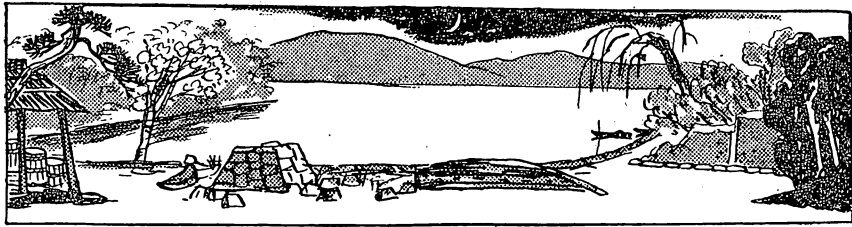
は、私もかなわんがな。

平助。ほんまにさうでござりますな。

(上手から禿の梅野が出て帳場を窺ふ)

梅乃。若旦那さんは。

お妙。今留守や、何ぞ用事か。



場 三 第

梅乃。い、わ、あの、鳥渡。

(上手へ走り去る。)

お妙 伺やいな。

平助。あの容子さうだす、大分ませて來ましたぜ。

お妙。來年あたり髪なほしてやらんなるまい。

平助。さうだすべからぬ。

(廊下から仲居のお峯が空いた臺の物を持つて出る。)

お峯。平助さん、何ぞ肩繕うて三鉢ほご。

平助。よつしや。

お峯。急ぎ前て頼みます。

二人は下手へ去る奥の方で手が鳴る。「はいい」を聲を合はせた返辭が聞ゆる。下手から澤田屋久五郎が出る。

久五郎。今日は。

お妙。お、久さん、さアごつぞ、(座布団を勧め)

久五郎。留守ですか。

お妙。もう歸らばりますやらう、鳥渡の間代りしてくれ云うて出やりましたので。

久五郎。成程……成程さうですか、(何か呑み込んである體、坐につく)

お妙。久さん、あなたは何も彼もよう知つてておますやらうな。

久五郎。知つてゐる、こは何ぞ。

お妙。船が沈んで大勢の漁師が死んだこやら、それがみな家の係り合ひやさうやおまへんか

久五郎。そんなこ、誰から聞きなはつた。

お妙。そら又私にも知らして呉れる者がおます

久五郎。私の口から知れたこ云はれては困るがそれは全くのこごだす。

お妙。まあ、やつぱり。先祖代々のかういふ商賣がありながら、何て家の人はそんな話らん

こごに手を出しやはりますのやらう。

久五郎。そこが金さんの氣質で……けご、こんなこお父さんやお母さんに決して云ひなは

んなや。

お妙。何のあなた、云ふたら騒動だす、そやなうても實の親子でありながら、あの道だすも

ん、なア久さん、あなた兄弟同様にしてはる間柄だすよつて、鹽梅よう家のに意見して上

けておくれやすな。

久五郎。あなたの頼みなら云はんこごもないけれご、云ふた所で金さんの方にも立派な道理

があるのやよつてなア。

お妙。道理ばかりで世の中は渡られしまへんがな。

久五郎。それさうや、そこが一番むつかしい所なのや。

上手から姑のお房が出る。

お房。お、久さん、何所ぞへ行きなはつたのか。

久五郎。朝から龍野まで行つて今歸りだす、相變らず日に一度は愛の家へ来て油賣らんこ氣が濟まんのてなハハ……。

お房。お妙、金五郎はまた出てやつたのか。

妙。いえ、あの今鳥渡……。

お房。久さん友達甲斐にちこ意見してやつておくなはれんか

久五郎。何をだす、(こお妙と顔見合す)

お房。家の商賣いやがつてきもなりまへんね、茶屋に生れた

男の子はいつが日にも客の顔見るやなし、皆あんた、これ

にさせて我か身は樂々遊んで暮して行けるのやおまへん

か。

久五郎。あんまり暇過ぎるのやよつて、何ぞしたふなります

のやわいな。

お房。そや思つて帳場持たすこの通りだつしやろ、これが

て、子供のうちから一つに育つた弟兄妹女夫やよつてね、

やうなもの、一人辛度い思ひして可哀さうにおますわい

な、私の姪やよつて身最貧する譯やないけれぎ。

上手から遊女市之亟が出て前を通り過ぎやうとする。

これ市之亟、まだ身仕舞もせん何してなはんのや。

市之亟。体が悪つて、頭痛かしてきもなりまへんよつて。

お房。また勝手病か、あかんく、三つこ身仕舞してしま

ひなはれ、もう、何時や思つてなはんのや、碌々賣れもせ

ん辭に勝手ばかりしたがつて……。

市之亟。(憤つこした體) ふん、賣れん抱へが自慢やさうな。

上手へ去る。

お房。あれや、きない敷してやつたら。お重く。

お妙。お母さん、もう宜しいかな。

お房。ほつこいたら親方を阿呆にしくさる、お重く。

下手から遣り手のお重が出る。

お重。お家さん、何てござります。

お房。市之亟が、お前もならへんかな。

お重。十臺あの子は根性がひがんでる上に、此の頃病氣のせ

いでさうぞしてますかいな。

お房。病氣か、何やしらんが主人に憎くまれ口叩くいふこ

があるかいな。子供のしつけは遣り手の役や、一緒に來

くなはれ。

お房はお重を連れて上手へ去る。

久五郎。お母さんは相變らず元氣なもんやな。

お妙。いつになつたら氣が折れはりますやらう。

下手からお峯が臺の物を持つて出る。

お峯。御寮人さん、雁の間ておます。

お妙。よろしい。

(帳合する。お峯は廊下から去る。入れ違ひに藤左衛門が廊下から出る。)

藤左衛門。佐土原様のお着きだ。お前早ふ小紋に着替へて御挨拶に行つてくれ。佐土原様はお前が顔出しせんこ、さもならんのやから。

お妙。帳場ごないしまへう、お父さんも御挨拶に行つて下さらう。

藤左。さうや、さうも、悴はごないした。

お妙。今鳥渡出やりましたので。

藤左。困るな、こんな時家明けやがつて、ほんまにしやうの
ない、奴ぢや。

久五郎。もう直きに歸らはりまつしやらう。よろしい、帳合
だけなら暫らくの間、私が引受けますさ。

藤左。久さんにそんなことさせては濟まんがな、利七呼び。
久五郎。よろしい、私は暇てしやうがおまへんのや、利七も
二人てやつこりますよつて、お妙さん、早う支度して行つ
て來なはれ。

藤左。さうやつたら氣の毒やけさ頼まふか、おい利七。

(返事が聞えて下手から料理人の利七が出る。)

利七。御用ですか。

藤左。鳥渡の間、久さんと一緒に帳場見ておくれ。

利七。よろしうおます。

お妙。では濟みまへんけれど。

お妙はせわしさに廊下から去る。

藤左。久さんには悴のこころでいろく頼まんならん事がある
けれど、商賣が肝腎やよつて行つて來ます。

藤左衛門も廊下から去る。

利七。佐土原島津がお大名の中では家の一番のお得意だすよ
つてな。

久五郎。お茶屋に取つては大大名より小大名の方がずつこま
しやな。

利七。全くそうだとす。

お岸が廊下から空いた臺の物を持つて出る。

お岸。利七さん、見纏うて三人前頼みます。

利七。よしや、若旦那鳥渡お頼み申します。

二人は下手へ去る。

他の仲居ご少婢が空いた銚子や食器を持つて廊下から下手へ
通り過ぎる。

久五郎は帳簿の上に乗せた数冊の本を取つて見る。

久五郎。何や、新井白石先生の采覽異字に西洋紀聞、お茶屋
の子がこんな本讀んでるのか。(聞いて拾い讀みする。)

上手から禿の梅乃を先きに小大夫が出る。そつと帳場を覗ひ
久五郎を見て人が違ふさ云ふ心。

や、小太夫さん、何ぞ用か。

金五郎。まだや、それについてむかふから、漁師仲間の親爺も上つて来てゐる。

久五郎。さうか、大時化くうて十何人、二十人近くの命をなふしたのでは、大分の損分であらうな。

金五郎。損は商賣の疾らひに諦めるが、諦めたて濟まぬのは十八人の人の命、久さん、私もこれには胸を痛めてゐる。

久五郎。さうやらうこも、私かて何ぞ役に立つこがあるなら、なんほでも乗るぜ、遠慮なう相談してや。

金五郎。(感謝の眼にチツと見成る)、久さんは魚問屋の次男に生れたお蔭で何せうこ心の儘やが、………私は、しみじみあんだが、……羨ましい。

久五郎。何やいな、今更らしうそんなこ、第一あんだここ、私所こは資金が違ふ、それに私なんぞ冷飯で兎貴の厄介者やないかいな。

金五郎。なんて、こんな家へ生れて来たのか。(室内を見廻し)まるで箱や、この箱の中へチツと坐らせられて、云はれる通りに帳合さへしてゐるこ、酒屋金五郎の命は一日々々こなし崩しに縮んで行くのや。

久五郎。措きなはいく、云ふたらそんなものやけれぎ、家業こなれば何所の家かて同じこつちやがな。

廊下から若衆の文吉が出る。

文吉。茂平さんたら云ふ人が若旦那にお目にかゝりたいさい

ふて来てますが。

金五郎。茂平………さうか、こつちやへ通してくれ。

文吉。へい。

久五郎。茂平で聞かん名やな。

金五郎。土佐から来てゐる親爺や、私の返事待ち兼ねて来たのやらう。

文吉が茂平を案内して廊下から出る。

文吉は直ぐ引返して去る。

さ、茂平さん、こつちへ。

久五郎。御免なはれます。(二人は會釋して坐につく)旦那さん、大神丸が積荷が濟んだで、急に明日の夜明けにうけるここになりました。

金五郎。え、明日の夜明けに。

茂平、あの便船に遅れては私の歸國を待ち焦れてゐる時の者に濟まんが、旦那さん、さうしたものでムりませう。

金五郎。(チツと考へて)、よし、今夜四ツ半九ツまでに屹埒明けやう、私の方から元船まで出向ふによつてもう暫らく待つて呉れ。

かりさせて、ほんまに濟まんア。

茂平。何のく、私の心配より旦那さんの心配が氣の毒な、何にせえ鱧船で十八人も一時に死ぬやうなこは、村始まつて初めてぢや。

久五郎。あんたも定めしもうこりくしなはつたやらうな、船まで仕切つて、鱧節造るこいふやうな危ない商賣は。

金五郎。久さん、あんたにも似合はんこ云ふな、天災にこりて兵士垂れてゐたら人間何一つ出来はせん、私はやる。掛けた資本はなうなつた上に、死んだ漁師の家々へ渡す涙金や弔料にも莫大な金は要るが、なんの、それはそれ、仕事は仕事や。

茂平。旦那さん、その度胸ごお情けを聞いたら、親が死んだ家からは子が出、兄が死んだ家からは弟が出て屹度旦那さんの爲めに働きます。

金五郎。茂平さん、私はお前をいち力に思つてゐる、何も彼もお前任せの仕事や、頼みますぞ。

茂平。旦那さん、茂平も男ぢや、見て下はれ、鱧の餌になるまでやります……………。

廊下からお妙ご仲居のお秋が出る。

お妙。(急がしさう) 小太夫に明石、千壽、浮舟それからお馴染は誰やつたな、さうく三芳、五人を直ぐに本陣へ送つて……………。

お秋。小太夫さん、明石さん、千壽さん……………。

お妙。浮舟に三芳や分つてか、支度の出来てるのから早よ送つて薩州さんは氣が短かいよつて。

お秋。よろしうおます。

上手へ走り出る。

お妙。久さんごうも濟みませなんだ。

久五郎。何の、何にも用おまへなんだぜ。

お妙。旦那さん、今の聞いてましたらう、帳合頼みます。

金五郎。よし(帳合する)

お妙は茂平を尻目に見ながら坐につく。

茂平と金五郎はそつと目で勝負。

茂平。それぢや旦那さん去なして貰ひます。

金五郎。さうか、ではいづれ……………いな。

茂平。わい、よろしういいます。(久五郎に御免なはりませ。

茂平が立上る時、上手から明石、三芳、浮舟、千壽、に數名

の禿お秋がついて出る。皆久五郎に隔てない體で會釋する、

秋。小太夫さんは跡から送つて貰ひます。

妙。薩摩のお侍は氣が荒いよつてみな氣をつけなはいや。

千壽。その代りまた欺しが利いてよろしい、武骨な人は正直

やさかい、ホ、ホ。(茂平を見て笑ふ)

皆さゝめき乍ら廊下から去る。

茂平もその中に卷込まれて去る。

久五郎。お妙さんの前てなら何云つてもだんないやらう、あ

んたは是が非でも今話の仕事をやりにふす積りてゐなさるのか。

金五郎。乗か、つたからには行く處まで行く積りや、私は働きたいのや。

お妙。そやつたら家の商賣はごないになりますの。

金五郎。異國からごししく黒船の來るこの頃の世の中に、女郎屋など安閑と男のしてゐる商賣ぢやない、お前は女で分るまいが、明日が日、世の中がさう引繰返るやら知れん働さ盛の男がこんな箱の中にくすぶつてゐられるものか。

お妙。それではあんた、親へも御先祖へも不孝になるやおまへんか。

金五郎。男が男らしく働くのが何て不孝や。

お妙。さうかて。

金五郎。いや、お前は只、私にさへついて來ればそれでい、のや、滅多に中間で笑はれるやうな事はしやせん。

お妙が尙云はうとするのを久五郎がこめる、上手からお房が出る。

お房。金五郎、お前は今日、角屋へ五百兩の融通頼みに行つたさうなう。

金五郎。え……………。

お房。今、角屋から内に念押しに來たよつて、そんなものいりまへん、貸して下はるなごいふて斷つて歸したお前そんな大金にしなはるのやさ、その譯云ひなはれ。

廊下から藤左衛門が出る、室の入口に立つて只ならぬ様子を
見度る。

お父さん、金五郎が他家へ金借りに行つてますね、しかも五百兩云ふ大金を。

藤左衛門。俺も今ちらご聞いて來た、金五郎お前は結構な稼業がありながら、馴れもせん鯉船なんぞに手を出して、わらい事仕出來し居つたな。

金五郎。お父さん知れたら隠しはしまへん、土佐で鯉節造る仕事を始めました、四方海で圍まれた日本では行くく海
の産物を……………。

藤左衛門。白痴め、そんな事はよその人のするこつちや、貴様がそんなことしたら、この商賣はごないなる、平家この方云はれてゐるこの西屋はごうなるのや。

金五郎。商賣が女郎屋に限つた事はおますまい。

藤左衛門。お前はここの商賣やめる積りか。

金五郎。出來ることなら此んな賤しい商賣なんぞ。

藤左衛門。おのれ。

久五郎。小父さん。

(撫みか、らうとするのを久五郎が遮ぎる。)

腹も立ちませうが、金さんには又、金さんの理屈がおますのて。

藤左衛門。理屈も業もあるものが、先祖代々の稼業をやめるなごご、罰當りめ、己れの様な奴は何處へても勝手に出て

失せさせ、何んのわれの様な奴のんかて、ちつこも困りやせん、茶屋には男の子なんぞ、ごうてもえ、のや。

金五郎。いつそ生れて來なんだ方が。

藤左衛門。何ちやこ。

金五郎。お父さん、昔今世の中が違ひます。

藤左衛門。なんほ違つても此の道ばかりは、神武この方變り

はないのぢや、そこが茶屋商賣の結構な所なのぢや、おの

れは其の結構が頂邊に登つて結構を結構と思ひさらさず、

わ、腹の立つ。

また立上るを久五郎とお久がこめる。

久五郎。小父さん手荒な事をしては不可ません。

お妙。早よお父さんにあやまつておくれやす、お父さん、こ

うぞ氣を鎮めておくれやす。

お房。お父さんをあなに怒らして、お前は濟まんこも不孝

こも思はへんのか。

金五郎。不孝ご孝行ごがお父さんには逆さまに見へてゐるの

だす。

藤左衛門。なに、おのれ。

下手から利七が手を拭きながら出る。

久五郎。小父さんくさう一撒に怒らんこ落つておくれやす、お、利七小父さんを部屋へ連れて行つて上げ、お妙さ

ん、お小母さんも早ふ。

利七。さ、親旦那さん、まあく御勘忍なはつておくれやす

藤左衛門を宥めながら廊下から去る。

お妙もお房も去る。

久五郎。金さん、これでは所詮無事には行かん、あんたごな

いする積りや。

金五郎。あ、久さん、ごうぞほつこいて、私は一人てよう考

へたい。

久五郎。さうか………さうか、ては私はもう歸らう、中に

立つてお妙さんが、いつち可哀さうや、よう考へて見なは

れ、頼みまつせ。

金五郎は無言で背首き机によつて頭を抱へる。久五郎は下手

へ去る。

上手から禿の梅乃が出て帳場を覗き、金五郎一人あるのを見

て上手へ去る。

金五郎は決心の體、廊下からお妙が出る。

金五郎。お妙。

お妙。はい(そつと涙を拭ふ)

金五郎。爰へおいて。

二人差向いに坐る。

お妙、二人一緒にする苦勞なら、お前はごんな辛抱でもし

てくれるやうな。

お妙。そらしますくらい。

金五郎。さうか、お妙。(手を取る)お前は身重になつてゐる

「云ふたな、そんな身で苦勞さすのは不慮やけれも、土佐で死んだ十八人の妻子眷族の身の上を思ひ、男が思立つた仕事を思ふも、思切つてさうするより外に途はない。」

お妙。旦那さん、あんた若しや……。

金五郎。私は私の家を出て行く。

お妙。え、そんなこと、お父さんの出で行け云ははつたのはほんの其の場の行きがかりだけおます、それをそない意地を取つては。

金五郎。いや、お父さんが出で行け云ふたからぢやない、私は私の心から出で行くのぢや。

お妙。二人が出で行つたら家はぎないなります、そんな不孝な事。

金五郎。その不孝がやがて、ほんまの孝行や三分る時が来る。

お妙は泣伏す。

お妙。いやか、不承知か、お前は私の一生連添ふ女房ではな

お妙。後でお二人がぎないに………た、世間並に嫁に來た身てはなし、稚い時から爰で育つた私が、叔母なり姑なりのお母さんに一言も云はずに家出しては、そればかりか私が居なんだら、みすく座敷の廻つて行けんのは分つてゐるのに。

金五郎。さう思ふのは皆愚痴云ふものやお妙思切つてくれ

これ私が頼むのや、私任せに、うんこいふて一緒に爰を退いてくれ、いゝか、いゝか。

お妙。はい………(泣伏す)

金五郎。よし、承知してくれたのやな、屹もやな、心變りはしやへんな。

お妙。はい………。

金五郎。さうか、嬉しい、忝けない、これ。

引よせて呷く。

お妙。え、お父さんの………。

金五郎。これ、鍵だけお前の手でお父さんから、……今夜屹こ暮過ぎまでに。

お妙。そんな急な事でおますのか。(又泣入る)

人の氣配に金五郎は注意する。

上手から小太夫と櫛乃が出る。

小太夫。若旦那。

以前の手紙を懐ろから出しかけお妙が居るのを見て吃驚するお妙も驚いて顔を反向ける。

あの、今夜濱へ………あの本陣へ行くのはほんまておますか。

金五郎。そや、さうや………(うわの空で應へる)

小太夫。わ、ほんま、嬉しい、そやつたら、あの云ひつけ通りにしますよつて。

そつこ手紙を出して見せ服配せするが金五郎には通せぬ體。廊下から文吉が急しさうに出る。

文吉。御寮人さん、本陣から早ふく是非こもこお使が来て
るます。

お妙。左様か、直ぐに行きます、そしたら、も一度顔出して
来ますよつて。

金五郎 よいな、屹違へなや。

お妙。宜しうおます。

立上る。

小太夫は嬉しき體。

お妙は行きかけて小太夫を見返る。

皆はもう疾うに本陣へ行つたのにあんたは何てこない遅れ

たのや、私と一緒に行きなはれ。

小太夫。あの、私……。

お妙。なにぐづぐづしてなはるのや、早よ來なはれ。

小太夫。はいく。

つんとして行きかけ又引返す。

金五郎は帳場を離れてお妙に何事も目語する小太夫は我が事

を都合する。

—(廻る)—

(二) 室津の港

平舞臺、正而は石燈の波止場所々に船繋ぎの杭が立ち、下手に
一基の石燈籠が立つ、波止場の手前から側面へかけて本陣の外堀
と二階の一部が見へ堀には島津の紋打つた幕を張りよき所に切戸

口がある、波止場の向ふは室津の灣に多數の繋船、下手側面
には室明神の山が沖の方へ延び、山下の海岸通りには宿屋や妓樓
が建て連なり華やかな灯籠を水面に投げてゐる、殿賑な港の夜。

解舟が今着いた體で大勢の旅客があゆみ傳ひに上つて來る。

宿屋の客引、遊女、仲居、物賣、その他が口々に呼び立てる

暫くは人ご提灯さが渦を巻く、聽て皆去るこ石燈籠の影から

阿呆の清十郎が動き出す。

清十郎。むかひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよふ似た菅笠

が……。節さも詞さもつかぬうたい方をしては、さも嬉しきう

に笑ひ同じ唄をくり返す)

本陣の二階から賑やかな絃歌が聞へる。

切戸から小太夫が出る。

小太夫。清十郎々々々。

清十郎。お前は誰や、お夏やな、は、は、お夏や。

小太夫。始終お前に物をやる、私を忘れるこ云ふ事があるも

のかいな。

清十郎。うん知つてる、お前西屋の小太夫や、何ぞくれるの

か。

小太夫。お、く上けるこもくそやよつて若旦那の傳言は

つきの云ひなはれ。

清十郎。若旦那誰や。

小太夫。うちの若旦那、晝に手紙をこもつかつて私の所へ届

けてくれてやつたやないか。

清十郎。ふう、誰が、俺知らんぜ。

小太夫。あ、辛氣、なんほ人目を忍ぶためや云うて若旦那も若旦那、何て又こんな氣狂ひの阿呆に……………。

清十郎。俺氣狂ひやないぞ、阿呆やないぞ、清十郎やぞ。

小太夫。勘忍、ほんに清十郎やつたな(懐から文を取出し)お前書にこの文こいつかつて私の所へ届けておくれたがな。

清十郎。さうやつたかな、ア。

小太夫。この文に出逢ひの場所は清十郎に云ふて置く、ようお前に聞けし書いてあ。

清十郎。ふう、さうか。

小太夫。知つてゐるか、知つてゐるなら早ういふて。

切戸から梅乃が出る。

梅乃。太夫さん御寮人さんもお前も外さはつたのでお客さんがそれはくやかましようおます。早う行つてあけておくれやす。

小太夫。何ぢやいな、あだ好かん薩摩櫛、それより今肝腎の所や、鳥渡待つて、これ清十郎〜。

清十郎。むかひ通るは清十郎ぢやないか……………。

石燈籠に腰かけて口々に笑ふ、

小太夫。これ早ふ云うてんかいな。

清十郎。何を。

小太夫。あれ逢ふ所を問うてるのやないかいな。

清十郎。ふう、何所やらう、一度西屋へ行て問うてくるわ。

行きかける時、揚幕から久五郎が出る。

久五郎。清十郎、何處へ行くのや。

清十郎。西屋へ行て問ふて來るのや、この子がな、は……………。

指し笑ふ。

小太夫。これ阿呆、何云ふのや。(睨む)

清十郎。怒つてるわ〜怒りないな、皆が笑ふわ、は……………。

久五郎。小太夫さんお前の搜してる人實は私も搜してるのや

小太夫。わ……………。

久五郎。は……………。

梅乃。太夫さん。(促がす)

小太夫。覺へてなはれや。

つんとして切戸から去る。

清十郎は揚幕から去る。

上手から藤左衛門が提灯をさけて出る。

久五郎。戀の闇路の明目か、は……………。

小父さん、今頃何處へ行つて出す。

藤左衛門。久さんか鳥渡檀那寺まで相談に行くのや。

久五郎。金さんの事だすか、心断だすやらうな。

藤左衛門。久さん察しこくれ、この儘はつこいたら彼奴は家潰す奴ぢや、いつそ女子道楽でもする性の方が夜が寝よい

久五郎。その代り當つたら大きうおますけごな。

藤左衛門。迪もやないが、そんなこ私やもう彼奴なんぞ當

にしてやせん、何所ぞ親類へても預てこましてやらうか知らんと思つてるのや、何んの家はお妙さへ居てくれりや安心なもんや、され違うにならんうちに、行って來ますさ、久さん明日一べん來ておくんはれんか、彼奴の事て、あんたの智恵借らんならんこもあるよつて。

久五郎。よろしい、きつこ行きます。

隣左衛門は下手へ去る。

久五郎は同情の眼で見送る。

上手からお妙が出る。

重けな帛紗包みを袂に下けてゐる體。

人影を見て類反向けて行きすぎやうとする。

お妙さんやないか。

お妙は悸として返事もせず去らうとするのを、久五郎が引止める。

お妙さん何で私まで外さうこしなはる。

お妙。いねあのうつかり考へ事しながら歩いてゐましたので

久五郎。あんた今夜どうぞしてなはるな。

お妙。ね……。

久五郎。晝はあんな始末、日暮から金さんは家に居ず、本陣

へ來てるはずのあんたは此の通り、やがて九つの鐘がなつ

たら、元船から親爺が金を受取りに來る。

お妙。あ、久さん、さうぞ何にも云はず私にも逢はぬ態にし

て置いておくれやす。

下手へ走り去る。

久五郎。ひよつこ家出ても……。

久五郎も悸した體で追うて去る。

本陣の切戸から二人の侍、き仲居のお秋が出る。

秋。今私が直ぐに招んで参りますよつて。

侍一。いかん、お前が所の若女房は怪しからんぞ。鳥渡顔

ばし出したかと思ふ直に姿をくらし居る。

侍二。そけんに亭主が戀しいのか。

侍一。いや、家が大勢よか女子が居るて気が揉むるこごちや

らう、さ、行つて招んで來う。

三人は上手へ去る。

水を越へて來る絃歌の聲。

本陣の後ろの濱傳ひに金五郎が出る

本陣の内を氣にする體、下手から清十郎が出る。

清十郎。西屋の若旦那やな、問うてたぜ。逢ふ所どこやミ。

金五郎。逢ふ所……そりや誰が。

清十郎。若旦那の所の、それくくなア、それ。

金五郎。ふう、そして何方へ行つた。

清十郎。知らん。

金五郎。何を云ふやら、さうや、矢張り(本陣を睨む、

清十郎は下手の波止場に引上げられた傳馬の蔭に蹲る。

下手からお妙が出る

お妙か。

お妙。お……(恐れる様な態度で近づくと)

金五郎。さうやつた、鍵は。

お妙。鍵よりも正金で五百兩持つて来ました。

金五郎。正金でさうか。(物ごなる)これで濱への義理も立つ

あこの資本は手薄でも俺が恨限り働いたら決して案じてく

れんなよ。

お妙。旦那さん私さう思うても不孝の罪が怖ろしうおますよ

つて。

金五郎。罪が怖ろしいよつては。

お妙。すみませんけ、さうぞ私を家に残らしておくれやす

金五郎。家に残る……お妙お前心が變つたな。

お妙。勘忍しておくれやす、みすゝ家の廻つて行けぬのを

知りながら、さうしても……さうしても私には。

金五郎。これ、書のうち何に云ふて私に誓ふた、僅か二時!

三時ごもたぬ其のうちに。

お妙。そない怨まれるのも覺悟してゐます。旦那さんあなた

の代りの孝行を私にさせると思つてさうぞ、勘忍して。

金五郎。これ、孝行の道いふものも時世によつて變るもの

やぞ、あんな稼業させておくのが何が孝行ぢや、その儘つ

ける資産を捨て、出て行く私の心かなぜ分らん。

お妙。それが道理が知らんけれ、老先の短かいお二人を捨て、行くやうなこ私にはさうあつても、なあ旦那さん。

金五郎は嚇まなつて絶るを突飛はして打ちすける、

下手から久五郎が出て止める。

久五郎。金さん、物の道理が一筋なら世の中にいさかいの出

来る筈がないやないか、そこ思つてお妙さんの心も酌んで

上げなはれ。

金五郎。久さん、私は女房は夫につくものと思つてゐた。

久五郎。夫につくよつて夫の親にもつくのやないか、金さん

私は正直に云ふてしまふ、今の先までお妙さんは夫につく

か親につくか迷つてゐなはつたのや、それに覺悟をつけ

させたのは私や、久五郎や。

金五郎。なに、お前が……

久五郎。そのために私や憎まれても、だんない、私はこれが

あなたに盡す何よりの親切やと思込んでゐる、あなたから

見りや酷い仕打ちする奴と思ふやうが、無理に親を捨て

てさせやうとする、あなたの仕打も此方から見りや酷い見

へる所詮さうぢやから云ふても道理は酷いに極つたものや

なあ金さんさうあつても家出を思ひ止まる事が出来んなら

不自由やらうが一人飛出して一時も早う立派に仕上げて戻

つて来ておくれ、及ばずながら留守中は私も氣をつけてお

妙さんやお父さんの相談相手にもなる。決して西屋の不爲

めになるやうな事はしやせんよつて。

金五郎。久さん(手)を取る。お妙は家へ残して行く。

久五郎。さうか、聞分けてくれたんか。

金五郎。あなたの親切を有難う受けて行く(ごつこなつて)

さうや世の中は心々の見やうによる……。お妙、二親はお前に頼んでおくぞ。

お妙。はい、屹(ま)り二人前の孝行しますよつて、さうぞ安心して一日も早(は)戻つて来ておくれやす。(泣く)

本陣の濱に傳馬が着いた體、

茂平が綱を引つばつて出る、

傳馬の舳が上手の波止に見へる。

茂平。お、旦那さん。

金五郎。茂平さんか。

茂平。待つ積りて来たにえらう早(は)戻りましたな。

金五郎。親爺さん、私も一緒に土佐へ行く。

茂平。わ、旦那さんが。

金五郎。私(わたし)はもう室津の男ぢやない、土佐に住んで海の上の男になる覺悟をした。

茂平。うむ、ムらつしやれ、人間の魂(たま)は二つにや割れぬ、

魂(たま)一つに打込(うちこ)まにや、ほんまの仕事は出来(でき)てのう。

金五郎。さあ、今日(こんにち)からはいよく裸体百貫(はだか)の金五郎や。

お妙。あ、裸体(はだか)ミ云(い)や奉公(ほうこう)人の手前(てまへ)着更(きりか)一つ出す事(こと)も出来(でき)ず

ごないしませう。

久五郎。宜(よろ)しい私(わたし)が家(いえ)から取(と)つて来る。

お妙。それでは餘(あま)り。

久五郎。なに、だんない一(ひと)走り(はし)り行(い)つて来(き)まつさ。

久五郎は下手(うしろ)へ去(い)る。

茂平。今(いま)のは肩前(かたまへ)逢(あ)ふた人(ひと)、仲(な)の好(よ)い友達(ともだち)さ見(み)へるな。

金五郎。兄弟(けいだい)同(どう)様(さま)の間柄(まがら)ぢや。

茂平。なあ男(おとこ)づくが一つ頼(たの)もしいや、こりや御寮人(ごせうじん)さん旦那(だんな)は茂平(しげへい)がお預(あづか)りします、決(け)して心配(しんぱい)さつしやりますな

なめに土佐(とさ)さいふても荒波(あらかな)ばかりが寄せ(よ)せはせぬ、薩摩(さつま)風(かぜ)が

そよく吹(ふ)いて唄(うた)の所(ところ)のえ、所(ところ)でムりますよ。

お妙。さうぞくれんくも頼(たの)みます。

茂平。あい、大(だい)丈夫(ぢゆうぶ)引(ひ)受(う)けます、や、引(ひ)汐(しほ)か。

綱(つな)を杭(か)に繋(つな)ぐ。

金五郎。お妙(たみ)さつちやが生(う)まれるか知らんが出来(でき)た子供(こども)は死(し)な

さんやうに大(だい)事(じ)に育(そだ)て、くれよ。

お妙。はい……(啜(すす)り泣(な)く)、さうぞよいにつけ悪(わる)いにつけ便(た)り聞(き)かしておくれやすやうに。

金五郎。いや私(わたし)も男(おとこ)や仕(し)上げる。は使(た)りはしやせん、三年(さんねん)か

かるか五年(ごねん)か、るか。(お妙(たみ)の姿(すがた)を見(み)成(な)して)お前は今(いま)が若(わか)盛(さか)の……氣(き)の毒(どく)やなア。

お妙。たミび五年(ごねん)十年(じゅうねん)でも、出来(でき)た子(こ)をあんた(あなた)やさ思(おも)うて身(み)を

堅うして待つてゐます。

二人は思はず手を取り交す、

清十郎が傳馬の後からのつそり出る。

清十郎。清十郎殺さばお夏も殺せ……お夏も殺せ……

二人は離れて涙の顔を反向け合ふ

上手から以前の侍二人とお秋が出る。

侍一。や、居らん筈、こけん所にゐるわい、お妙、なして座

敷ば退るごか、殿様がやかましくおせらるゝが。

侍二。や、亭主な、お妙ば借りるぞ、さ、お妙(手を取る)

お妙。あの私は、直に……直ぐに後から。

侍三。よかく、さあ来い。

二人は無理にお妙を引立て、切戸から去る、

金五郎も茂平も茫然と見送る、

本陣の内でお妙を囁し立てる大勢の聲が聞へる、金五郎は不

快な面色。

茂平。薩摩のよんごれが、人の氣も知らんこのう。

金五郎。却つてこの方がよいかも知れん、茂平さん、私を早

ふ元船へ連れて行つてくれ、もう一刻も爰にはゐたうない

茂平。けご今の友達が。

金五郎。かまやせん、着更なんぞなければなくてそれまでの

こつちや。

清十郎。船に乗るなら住吉さんのお初穂、俺にもくれんかよ

うなア、若旦那。

金五郎。(憐むやうに見て) よしやらう、長い馴染のお前にも

もう別れや(小銭を渡してやる)

茂平。そんなら旦那さん、傳馬出さうかな。

金五郎。よし。

清十郎。何所へ行くのや、え、何所へ行くのや。

金五郎。お前の知らん遠い所や。

金五郎傳馬に乗る

清十郎。俺の知らん所やつたら、うんさうか、祝様の知つて

る所やな。

本陣の切戸から小大夫が出る、

小大夫。若旦那、何所へ行きやはります。

金五郎。私や今から土佐へ行く。

小大夫。え、何で、鳥渡待つておくれやす若旦那、私久さん

に意地がおます。あんな悪い人あらしまへん、若旦那の僞手

紙なんぞして、

金五郎。(開巻めて私の僞手紙……(氣を變へて)小大夫、私や

お前の手紙を見た。親切は嬉しいがたつた一言有難うご

いふこくより外、今ではどうするこも出来んお前も早ふ
足を洗うて身を固めるがよい、さ、茂平ごん。

小大夫。あ、待て、私や一時の浮氣まばかり思はれるのが口
惜しうおます。

茂平。危ない、さ、退いた。

小大夫。あれ若旦那。

茂平が船を出す。

金五郎。達者て暮しや。

小大夫。若旦那、若旦那。(泣く)

下手から風呂敷包みを抱へて久五郎出る。

久五郎。お、金さん。

包を投げる

金五郎が受け止める。

切戸からお妙が足袋既足て走つて出る。

危ぶく海へ落ちやうとするのを久五郎が抱き止める。

清十郎が小銭をちやらかして嬉しそうに笑ふ。

傳馬が本陣の外陣の陸に消へ去らうとする

幕

時

明治初年

處

播州室の津

登場人物

一、西屋 金五郎

一、西屋 久五郎

一、藤吉

一、利七

一、お八重

一、お琴

一、清十郎

一、政藏

一、小太夫

一、明石

漁

夫

第二幕

室津の港

平舞臺、第一幕第二場と同じ。但し本陣は人の住む氣勢もなく外堀は朽ち果て臺は落ち、剝脱した壁は蜘蛛の巣のやうになつてゐる、波止場には四五艘の漁船が繋がり、船具や漁具は其所此所に散亂し、波止場の石壁には鱧網が乾してある、下手の明神山下に建連なつてゐた妓樓や宿屋は全くなくなり、稍大きな板葺の倉庫が只一棟建つてゐる、下手側面の家は漁具小家になり、その傍に細い櫻が一木わびしげに花をつけてゐる、第一幕から二十五年の後、明治初年の春の夕べ夕陽が灣内を茜色に染めてゐる。

漁夫が三人鱧網の繕ひをしてゐる。

漁夫の一。さあ、これで俺の方は手放れちや。(延びをして資をのみ初める) この頃名物の鱧もてんご寄りがわるなつたなア。

漁夫の二。うん、鱧も寄らんが人も寄らんわい、世の中が變るご西國一の大波よこないなるもんかな。

漁夫の一。何せ、大名が縣令さんになつて、江戸へ參勤交替もせんよつてなア。

漁夫の三。もう江戸やあらへん、東京や。

漁夫の一。さうやくくつい云ひつけてゐるので口へ出るのぢや。

上手の濃傳ひに女郎の小太夫、明石が出る。(第一幕とは別

人、船頭對手の安女郎、平素着、伊達巻の儘二人は所在なさうに船具の上に腰をかけ網の繕ひを見て居る。

小大夫。おつさん、けふ網引いたの。

漁夫の一。お、今朝引いたよ、姐やん達がまだ夜半の夢で寢てゐる時分や。

小太夫。たんご獲れた。

漁夫の一。獲れたせ、大きなこんな鯛が(仕方をして見せる)明石。嘘ひなはん、そんな、大きな鯛がこんな湊へはいつて來るかいな。

漁夫の二。お前澤にかけて、たまはね、客か、るやらう、同じこつちや、は……。

漁夫の一。花屋の明石さんが、そつちやの姐さん何たらいふ名やつたな。

明石。あんた知らんの、湊屋の小太夫さんやないか。

漁夫の一。さうく、小太夫さんやつたな、昔西屋に小太夫さんいふえ、大夫がゐてな、そや明石いふ大夫さんものた其時分は角屋に西屋、これが一番の大茶屋で、大夫さんいふたら皆大名道具や。

明石。そんな昔のこいふたかてあかへん。

小大夫。西屋いふたら網元の家やないかいな。

漁夫の一。それが昔は大茶屋やつたんや、もう二十年にもなるかな、今の久五郎さんがぼんごお茶屋やめて網元しやは

つたのがよかつたんや。この頃はまた本家の澤田屋と組合
うて醬油と素麺の間屋を始めはつたし、ゑらいもんやが、
それに引替へてすつこお茶屋してゐた角屋の方を見い、あ
の通り潰れてしまふた。

小大夫。(漁夫の二)おつさん、小大夫さんて、ごんな女子
やつた。

漁夫の一。さア。

漁夫の三。お前はご別嬪やなかつたご、は……………。

漁夫は繕ひを終つた體で立上り綱を片づけ始める。

揚幕から藤吉が急ぎ足に出る。

見事らしい筒袖の仕事を、髪も亂れてゐる、相當な
家の子さは見えぬ風體)

藤吉。おい、家島の奴等がまた漁場を荒し始め居つたので、

今夜綱がかりていはしてやるのやご、船は明神山の裏へ廻
してあるよつて、竹法螺合圖に皆集まつてや、え、か。

漁夫の二。よしや、今夜こそ家島の奴等叩きのめしてやる、

藤吉さん、あんたも一緒に行きいな。

藤吉。親爺のいひつけやよつて觸れては居るが、誰が喧嘩な
んぞに行くもんかい。

漁夫の三。弱い男やな、え、若い衆の癖に。

藤吉。漁場くらゐの争ひよりな、日本には大きな争ひが出来
てゐるのや、お前達は知らへんやろけれご。(懐から小形の

新聞紙を取り出し漁具に腰かけて讀初める)

小大夫。藤吉さん、それ何だす。

藤吉。東京で出来てゐる新聞紙ごいふもんや。

明石。新聞紙で何だすの。

藤吉。世の中のいろ／＼なごが書いてあるのや、これは先
先月の新聞紙やが、大阪から来た材木屋の番頭さんに頼ん
で分けて貰うたんや、征韓論が、東京でないごあかんやア。

漁夫の一。藤吉さん、征韓論たらいふのは何のこつちや。

藤吉。朝鮮がな、日本の軍艦に大砲を撃ちかけたのや、それ
で朝鮮を征伐せい、いや今したらいかんごいふ議論がお上
のゑらい人達の中に出てゐるのや。

漁夫の二。そんな生意氣なごばつかりいふてゐるよつて吐ら
れ倒すのや。

藤吉。吐られやうご吐られまいご俺の勝手や、ほつこいてく
れ。

漁夫の一。なア、立派な家の若旦那に生れながら、氣の毒な
もんぢや。

藤吉は聞かぬが、素知らぬ體をして新聞を讀續ける。

漁夫等は綱を提けて去らうとする。

藤吉。(新聞から眼を放さずに)おいえ、な、のらかまして行か
ん奴があるご、やかましやの親爺にお眼玉貰ふぞ。

漁夫の二。さういふあんたこそお眼玉貰はんやうにしなはれ

漁夫は下手の小屋へ去る。

女二人は嘯く。

小太夫。藤吉さん……………藤吉さん。

藤吉。何や。

小太夫。あんた昨夜明神下歩いてなはつたな、二人連れて。

藤吉。え……………そんなこと知らんぜ。

明石。秘してもあかんし、お八重さん二人だしたがな。

藤吉。そんな、そんなこと、うっかりいふてくれな、世間狭いこんな土地で。

小太夫。その世間狭い土地、よう手兎合つて歩きなはつたな。

明石。お樂しみ。

藤吉の脊を叩く運葉に笑ひながら下手へ逃去る。

『何ぞ奢んなはれや、そやないご皆に云ふし。は……………』

蔭からこんな聲が聞える。

網を片つけ終つた漁夫が小屋から出る。

漁夫の二。藤吉さん、何や奪取られてなはつたな。

藤吉は對手にならずに又新聞を讀む。

上手奥から久五郎が手代の政藏と共に出る。

久五郎。(漁夫等に) おい、今夜のここと聞いたやらうな。

漁夫の一。へえ、今若旦那から聞きました。

久五郎。見張の合圖聞外さんやうにして、しつかり頼むぜ、

家島の奴め、おこなしう出てゐるさきりがなきさいな。

漁夫の一。よろしうおます、御免やす。

三人は下手へ去る。

久五郎。政藏、お前小屋へ行ってよう荷を調べて来ておくれ。

政藏。へえ、宜しうおます。

政藏は下手へ去る。

久五郎。藤吉、貴様はまたこんな所て遊んでるたんやな。

藤吉。鳥渡新聞紙を見てるたのだす、東京では征韓論て今にも騒動が起りさうな鹽梅だす。

久五郎。そんな事實様等の知つたことやない。

藤吉。でも萬一五年前のやうな御變革でも起るこするこ。

久五郎。生意氣いふな、貴様などは家て働いてゐたらそれで

い、のや。

藤吉。(不平さうに) 今時御政治をよそごにしてはうつかり

商賣も出来しまへんやろ、志のある人間は皆東京へく

こ出て行きます、この室なんぞは餘り寂れ過ぎてゐます新

聞紙で見るご横濱にはさんく異人船が出来て……………

久五郎。え、またそんな効能ならべ立て、東京へやつてく

れやらう、我家の商賣さへよふせん分際て洒落臭いことぬ

かすな。

藤吉。何て東京へ行つてはいかんのだす。

久五郎。家の商賣に人手の足らんのが分らんのか。

藤吉。それで私はいつまでも丁稚同様に追使はれんなら

んのだすか。

久五郎。知れたこつちや、

藤吉。お父さん。(噴出した體)

久五郎。(藤吉を見て恐れるやうに顔を反向ける)眼つきがそ

つくりや、其眼見るこ。……

藤吉。私の眼が誰に似てるのだす。

久五郎。え、

藤吉。親の子なら、さうせお父さんかお母さんに似てますのやらう。

久五郎。何でもわ、一緒に店へ戻れ。

行きかける時、上手からお琴が出る。

お琴。伯父さん。

久五郎。お、お琴か、お父さんと一緒に。

お琴。わ、

久五郎。龍野から歩いて来たのか。

お琴。お父さん勿体ない言ふて駕へ乗せてくれはらしまへんの室坂越して、辛度おました。

久五郎。お父さんは私所にゐるのか。

お琴。はア、私屹度濱やる思うて……あの明神さんへお詣り

せうこ思つて、藤さん一緒に行てやない。

藤吉。私は店へ戻るのや、あんた勝手に行きなはれ。

久五郎。そない愛想のないこいふ奴あるかい、お琴はお前

こ従兄妹同志や然も本家の子やないかい、一緒につき合つてや。

お琴。(嬉しそうに)藤さん、一緒に来ておくなはれや、なア。

久五郎。まあ、ゆつくり行つこいで。

久五郎は上手へ去る。

お琴。私なア、家がこつち仕舞つて龍野へ引越してから、一度も

来やしまへんやろ、そやよつて、明神さんの山戀しいて

く藤さん、あんた何て返辭してくれてやないの、そや……

……そや、私こ貧乏してあんた所の店の方に行てるよつて、

て、そんな見下けてはりますのやらう。

藤吉。そんな事知らんがな。

下手からお八重が出る。三人異様に眼て見合す。

親爺の云ひつけやよつて詮議がないさ、行くならさつらゝ

行きなはれな。明神さんへお詣りするくらゐ直行つて直歸

れる。

お八重に爰て待てと眼て知らせ、さつさこ下手へ去る

お琴。あ、待つこくははれいな、藤さん、藤さん。

跡を追つて下手へ去る、お八重はぢつこ見送るこの時上手の

濱の道から利七(煮賣屋の主人の姿)が鱗なぶら提げて出て、

この體を見る。

利七。お八重さん。

八重。菊屋の小父さん。(詠へるやうな顔つき)

利七。なアに案じるこあらへん、あんな本家のやんちや娘

が何やいな。

八重。でも西屋の小父さんはお琴さんを藤さんにこそ思つてはあらしいにおます。

利七。何の〜藤吉さんが承知するもんかいな、あんたいふ可愛い人があるやないかいな、は、は、は、さうや、私所へ来て戻つて来やはるまで待合はしいな。

八重。小父さん所いそがしおますのやろ。

利七。今俄に四五人お客が来てな、肴足らんよつてこれ借りに行て来たんや。

八重。そやつたら、都合て後によせて貰らひまつさ。

利七。さうか、遠慮せいでえませ。

利七は上手へ去る。

お八重は船具に腰をかける。

日が沈んで行く暮の鐘。

淨瑠璃「(舟唄)潮がひるなら屋島室へ、戀にやいこはぬ、

かちはだし、戀も夢のぞみも夢かうたかたのあはれ浮世は荒波の、寄せてはかへる浦島が、うらみを今ぞふる里へ、たゞり着きたる金五郎、我身も人も海山も、

變り果てたる有様に驚きまじふばかりなり。

金五郎管笠を被り揚幕から出る。

愁ひに堪ぬ體で佇立む。

上手の濱の路から老たる船頭が出て金五郎を見て何の感じ

もない體で下手へ去る。

金五郎は黄入れを取出し燧石で火をつくる。

何所からか清十郎の唄の聲が聞える。

清十郎。むかひ通るは清十郎ぢやないか笠がよふ似た管笠が

……。

淨「心に響く昔の聲。

金五郎。お、清十郎……(笠を脱いで思はず立上り、お八重と

聲見合せる金五郎の顔は疵だらけて昔の佛はないは、

誰やら清十郎の唄うたふてゐますな。

お八重。ありや自分で自分の本名も知らんこの濱の名物男で、

お夏清十郎の唄ばかりうたふてゐるので、皆が清十郎く

こ呼んでゐるのでおます。

金五郎。嗚もう歳が行つてゐるでござりませうな。

お八重。え、何所にゐるのやらう、清十郎……清十郎。

淨「呼べさ答へも鳴く鳴、それこそするして魚籠のうち

お八重は密に置き捨てた大きな魚籠のうちを覗く

また、こんな所に寝て、吐られるやないか、早よ出ておいで。

清十郎は魚籠の口へ這出す。頭は禿ゆ、穢れた脛色の長い髪が肩にもつれ鼻下と頸に白い鬘が延びてゐる。

清十郎。魚籠の中から人間見て見、皆魚に見えるわ、……

は明神さんのお八重さんか、何ぞおくれ、この頃誰もくれせんよ。

お八重。何ぞあけたいが、相憎けふは持つてへんし。

淨『それを見るより金五郎包みの飯盒取出し。』

金五郎。爰に喰残しの辨當がある、清十郎、さ、これ喰べ。

淨『ご渡せばお八重は怪訝顔、金五郎は辨當ご渡すに』

清十郎は何の會釋もなく、唯嬉しげに喰べ始める。

お八重。乞食に入物ご渡してよろしおますの。

金五郎。何の世の中には乞食よりずんご穢い人間が美しさう

な顔して住んでゐます、それに比べるごこの清十郎なごは

なんほ淨いか知れん。神さまに近いごは大方こんな男のご

ごやらう、なア娘さん、は、………

淨『お八重は猶もいぶかしく。』

お八重。あんたは何所からおいてなはつたのです。

金五郎。私は四國九州あつちごちを渡つてな、此度は肥前

の五島ご云ふて日本の西爾のはつれの島から出て來ました

お八重。まあ、そんな遠い所から。

金五郎。時に娘さん、この土地に西屋さいふ家がありますか

な。

お八重。わ、おます、網元さんだすやらう。

金五郎。網元……。

お八重。お醤油や素麵を船て出す商賣もしてはります。

金五郎。そして、以前の商賣のお茶屋は……

お八重。それは昔のごころおますやらう、いつ頃やめはりましたのか、私等知りまへん。

金五郎。ふう先祖代々の稼業ごいふた茶屋もやめて。

淨『孝も不孝も時世の流れ』

恐ろしいものやなア、いやその西屋の家内は今何人ゐられますな。

淨『噂話に問ひかくれば、此方は何の氣もつかず。』

お八重。むかふさんはお父さんご息子さんご二人ぎりて、あ

ごは皆奉公人ておます。

金五郎。はて、それでは私の尋ねてゐる家ごは違ふのか、西

屋には老人夫婦ごお妙ごいふ嫁、それに息子か娘か、子供

が一人あつたかと思ふが。……

お八重。え、え、その息子さんごいふのがあの藤吉さんの

ごころおますやらう、子供さんいふてももう二十四になら

はります。

金五郎。もう二十四に、あの男の子で。

淨『さてはそれご心の年練り名は藤吉、うん、祖父さ

んの藤左衛門殿の字を取つて。』

お八重。祖父さん知つてはりますの。

金五郎。昔西屋へ泊つたごころかあつてな、その藤左衛門さん

……。

お八重。お祖父さんもお祖母さんも前からるやはりません。

金五郎。二人とも、そしてお妙………さんは。

お八重。藤吉さんが三つの時お産の病ひで死なはつたかやさうて、私等がまだ牛れん先のこころでおます。

淨。聞くこころに、轟く胸。さては残らず死絶へて残るは悴、父は誰。

金五郎。主人いふのは何といふ人、いへ名は何といふ。

淨。聲はつませてすり寄れば、お八重はふつと氣味悪くお八重。あんたは何てそんな精しいこころを。

淨。あやしめられて紛らす笑顔。

金五郎。旅から旅をするものには、少しの馴染も身寄縁者か何ぞいやうに思はれて、つい氣を入れて尋ねましたのや、

氣味の悪い親爺やと思はんこおいておくれやす、は……。

清十郎。は……皆なふなつた、何も彼も皆なふなつた。

辨當を金五郎に戻し石燈籠の傍に寝轉ぶ
金五郎はそれを波止へ洗ひに行く
月が登らうとして舞臺が稍明るくなる

淨。月の出汐も戀の暗、藤吉は濱傳ひ。

藤吉は下手の漁具小屋の後から出る

金五郎には氣もつかずお八重の傍へ寄る

藤吉。お八重さん。

お八重。藤吉さん、あんた今まで山に。

藤吉。何の今まで山になんぞゐるものか、あれ家まで送つて

親爺の前漸う胡魔化して出て来たので遅かつたのや。

お八重。そして昨夜のあの話は。

藤吉。あかん、所詮親爺は承知してくれん、それで私も決心した。

お八重。あ、鳥渡……

藤吉。わ、清十郎やないか。

お八重。い、わ。よその人が、

淨。見やる此方に父爺は、これが我子か藤吉か、抱きよせたさ、引寄せたさ、ちつこころへて。

金五郎。二人の傍へより、娘さん、このお人が今話の酒屋の息子さんかな。

お八重。わ、藤吉さん、昔あんたの家へ泊つたこころのあるお方だすこ。

藤吉。ふう

淨。ほのめく月に顔と顔、見ても見せても眞實の親さも知らず、子とも呼ばれず。

金五郎。よい息子さんぢやなア、失禮ながらあんたの今の父

御のお名は何と云はれますな。

藤吉。今のこは……私の親は一人よりない、あんたは何て

んなこころを聞きなはる。

金五郎。いや、私はつい先代のこころを思ふてみましたので、

は……そして父御は。

藤吉。久五郎云ひます。

『淨』膠なき一言、我れ我を疑ふ金五郎。

金五郎。……久五郎、云はれますのか、あんたの父御のお名が……

藤吉。わ。

『淨』あつこばかりに眼もくらみ息さへつぎ得ぬ心のおごろき、おし鎮めおしこらへ。

金五郎。左様か、今この娘さんのお話ではお家はますく御

繁昌さうな、あんたも嘘お仕合せなお暮してであらう、先代

とは別にお馴染の私陰ながらお喜び申します。

藤吉。誰様か知らんが有難う、人間唯生きて行けるだけが仕

合せなら、まあ私も仕合せ者のうちです。

『淨』冷たき言葉何こやら、ひかる、心取なほし。

金五郎。お蔭でゆつくり憩ませて貰らひました、それ、そろ

そろ出かけうか、お二人とも、左様なら。

『淨』古管笠を隠れ笠、濱へミ見せて本陣の破れ築地を隠

れ籠、忍び聞くこもこなたは知らず。

金五郎は會釋して濱の路へ去り、本陣の内へ忍ぶ。

藤吉。なアお八重さん、私や親爺が不承知でも構はん、思切

つて東京へ飛出してしまはふと思ふのや。

お八重。ではいよ〜。

藤吉。私はこんな田舎で朽ちたふはないあんたは約束通り屹

こ一緒に行くてくれるやらうな。

お八重。行きますくらゐ、死ぬのも生きるのも一緒いふ約束

やおまへんか、家のお父さんかて、今時の若い者が田舎に

すつ込んでゐるやうてはあかんいつも〜いふてはりま

す、一時は不幸ても、志を立てる爲めに二人が東京へ行

つたミ分つたら屹こゆるしてくれはりますやらう。

藤吉。あんた所のお父さんは明神さんの社家だけあつて、十

分學問してはるよつて、今の時世がよう分るのや、お八重

さん、あんたさへその氣なら、今夜家島の漁場幸ひの喧嘩

て家が大方留守になるに極つてゐる、本家の伯父やお琴の

居るのが邪魔やけれミ、さうなミして二百兩ても三百兩て

も取れらだけ家の金持出して。

お八重。そんなこして宜しいの。

藤吉。一時は悪うても、なアに立派に出世さへすりや、お八

重さん。

『互ひにひそ〜さ、やき合ふ、心の竹法螺見張のしら

せ、水を渡つて鳴響けは(竹法螺が鳴る)』

お、合圖の竹法螺が鳴つてゐる、お八重さん、さ、早う、

今の間に家へ戻つて身支度して。

お八重。そして二人の出逢ふ所は……。

藤吉。菊屋の利七の家、今夜のうちに飾磨へ走つて、あれか

ら船で兵庫へ渡ればもうこつちのものや。

淨「折から駆け来るのまたの漁師、手に手ににゑもの、のしる聲々さわく。澤波むら千鳥まぎれてお八重は

山の方、藤吉は濱の町行く手にばつたり久五郎。大勢の漁師出で小家から兎罟を取出すものなどある

お八重は下手へ去り藤吉は上手へ去らうとする時、向ふから身拵らへをし、脇差をさした久五郎が出て行き逢ふ

久五郎。お、藤吉か、さ、お前も一緒に沖へ来い、今夜こそ家島の奴一艘なり二艘なり是非とも引捕へて漁場荒し生證據にする。

淨「勢するぎき親の言葉、藤吉驚き。

藤吉。お父さん、あんだ氣でも狂はしませんか、漁場の喧嘩に主人が乗立して怪我あやまらがあつたらごないのです、阻采らしい私は一緒になんぞ行かれませぬ。

淨「云はせも果さず、はつたし願倒し。

久五郎。わ、臆病者め、家のものが弱い音吐うやうなごころはごうなる、皆早よ行てくれ、證據人引捕まへたら、祝するぞ、褒美出すぞ、さ、藤吉。

藤吉。い、わ、やめこくれやす、ごうあつても行かしまへん皆何てごめんのや。

漁師一。旦那はん、安心して待つて、おくなはれ、屹度家島の奴捕まへて戻つて來ます、なあおい。

漁師二。そや、旦那に怪我あつたらごもならん。

口々に止める

久五郎。お前達がそない案じるなら行くこゝだけは見合す、その代り皆しつかりやつてくれ、酒樽の鏡ぬいて勢よう引揚げて來るのを待つてゐ、わ、か、頼むぞ。

漁師二。大丈夫だす。

淨「勵ます言葉に漁師等は、勢こんで走り行く寢しうつ、さめても夢の清十郎のつそりこ趕上り。

漁師等は下手へ走り去る

その騒ぎに眠つてゐた清十郎がさめる

清十郎。や、大勢で綱引きやな、俺も引いて魚貫つて來ふ、むかう通るは清十郎ぢやないか。……

下手へ去る

久五郎。あ、いふてやつたら皆一牛懸命働きおるやらう。

藤吉。皆は可憐さうに命かけの仕事だす……。

『心のうちの一思案。』

お父さん、もう一遍たづねます。私はごうあつても東京へはやつて貰へまへんのか。

久五郎。白痴め、何遍いふても同じごつちや、そんな世迷言いふてる手間で、早よ家へ行て祝酒の支度せわ、何はんやりしてゐさらすのぢや。

淨「突のめされてむごさ、つれなき。

藤吉。お父さん、行て來ます。

淨「親子の縁の故ばなれ、矢よりも早く走り去る、ぬつ
こ後に旅姿。」

藤「は決心の體で上手へ走り去る
本陣の塀の崩から金五郎が出る

金五郎。久さん。

久五郎。誰や。

金五郎。私ぢや。

淨「ちつこ見交す月のもこ。

久五郎。お、お前は……。

金五郎。覺けて居てか。

久五郎。金さんか。

淨「よみじの人に逢ひ見る心地まだ生きてゐたのか。

淨「驚きまごふを靜かに見やり。

金五郎。この顔の何所に昔の佛が残つてゐたやら、それでもよふ金五郎と思出してこればつたな、久さん、私や二十五年の長い月日を、世の中の荒浪にもまれく、災難、苦勞、不仕合せ、あらん限りを仕盡して、この通り變り果てた姿になつて戻つて來ました、したが我家はもこより故郷の町も人も、かうまで變り果て、居やうこは夢にも知らなんだ、なア久さん、私やもう何にも云はずに今から直ぐに又この故郷を出て行く。西屋金五郎といふ男がこの世に生きてゐるこいふこも室の人には一切知らさず、残る生命

を遠い他國で果すこにしやうと思ふ、それに就いてたつた一つあなたに頼みがある、聞いて下さらんか。

久五郎。品によつたら聽かん事もないが、一體ごんなこつちやな。

金五郎。外でもないが金を三百兩ほご私に出して……悪んで下さらんか、それも今夜目の前に迫つた入用なので、なア

久さん、頼みます、さうぞさうぞ三百兩だけ。

淨「下手に繩れば久五郎、忽ちさけしむ心の眼色。

久五郎。二十五年振りに逢うて何や思ふたら金の無心か、それであんたの了見も大方知れた、金さん、私やそれより先

にお前の口から一言禮いふて貰ふべきやと思つてゐる。

金五郎。私に禮を云へ……。

久五郎。西屋こいふ家名がけふまで室に續いてゐるのはみんな私の力や、金さん、お前が家出した翌年の春に父親が死

ぬ、あこは女子ばかりの上に段々世の中はむつかしうなる土佐を尋ねても、他國へ渡つたさばかりであんたの居所は

知れず、母者のたつての頼みて私や西屋へ這入つたが、その翌年にはまた母者が死ぬ、三年目にはお妙が……

淨「云ひ淀むほご聞く身は胸も裂かる、思ひ。

金五郎。お妙が産後で死んだ事も聞いて居る。久さん。

久五郎。何や。

金五郎。いや、それはさ西屋へ盡してくれるお前が、たつた

一人わすれがたみの藤吉を、なぜ子らしう人らしう育て、は呉れんのか、こればつかりは人から聞いたのやない、たつた今お前の仕打ちを見て知つたのぢや。

久五郎。ふう。お前は何んにも知らん子に悪い智恵つけろこいふのやな。

金五郎。そんな事する位いなら……

久五郎。いや、分つた、去んで貰はう、子のしつけは親の了見にある。こつちや、可愛からうこ憎まうこ俺次第、第一お前は藤吉を我が子の何のこ云へた義理の男てはないやないか、何や阿呆らしい(立上る)

金五郎。待つて呉れ、何にも云はんこ云ひながら、云ひ出したのは私が悪かつた、さうぞ了見して、今頼んだ三百兩だけ。

久五郎。いや、キツパリこお断りぢや、(行きかける)

金五郎。久さん、それでは餘り(遮る)

久五郎。うるさい、何するのぢや。

突放されたはづみに石壁の上に倒れ、船腰ぎの石杭で顔に傷つ。

長の年月家々廻つて、そんだけの金さへよう貯めんこは何こいふ意氣地なしや、恥知るならこつこ、此の土地出て行つて貰はう。

金五郎。待つて。

『よろめき／＼取絶り

西屋金五郎は一生不運に暮しても心で羞かしい行ひした覺へはない、久五郎、二十五年以前この波止場てようも／＼親切／＼かきに俺を欺し、家も女房も盗みさらしたな。

久五郎。何吐かす、こ氣狂ひめ。

金五郎。まだその上たつた一人の悴を……人てなし、畜生め。

久五郎。何おのれ。

双方激しく争ふ。

久五郎は脇差を抜いて斬りつける。

挑み合ふ内に及物は金五郎の手に渡り、久五郎は刺されて仆れる金五郎は驚き極まつた體で茫然と立ちすくむ

淨『人目を避ける溜傳ひ、來かゝる藤吉見て悔ひ。

上手奥の濱の路から藤吉が出る。

藤吉。お父さん、お父さん、お、お父さん殺したはおのれやな。

淨『有合ふ粗朶をさそくのゑもの、打つてかゝるを引付し。

藤吉は棒を拾うて打つてかゝる

金五郎。如何にも私が殺した、お前に邪堅な久五郎は私が殺した。

藤吉。わゝ、おのれ、親の敵取らんこ置くものか。

淨「また打ちかゝるをかい落り、利腕しつかみ引寄せて金五郎。あの酷い親でもそれほご大切に思ふのか。」

藤吉「親思はん子が何處にある、おのれを引捕まへて羅卒に引渡すのぢやア。」

金五郎「藤吉。」

藤吉「なに。」

金五郎「人殺しの下手人、引立てるなご殺すなご、お前的心任せにしてくれ。」

淨「血刀投げ捨てドツカミ坐し、今はかうよご觀念の、閉す眼にあふる、涙、藤吉はいさみ立ち。」

金五郎「石壁の上に坐し覺悟の體。」

藤吉「よし、彈正臺で立派に敵取つて貰う。」

淨「親子の縁も細細に、がんじがらめぞ無憾なる。」

ト傳馬の綱で金五郎を縛る。

お父さん、あんたの敵はこの通り藤吉が捕まへましたぞ。

さ、立て、來させ。

淨「力任せに藤吉が、引けば引かる、親心、これが名残り」

りを月影に、チツミ見据わつ見成りつ。

金五郎「親を思はん子はないご云ひなはつたな。」

藤吉「餘計な事ぬかさんご、さつさつ歩け、行きさらせ。」

突飛はす。

死骸に頭かうとする。

金五郎「(チツミ久五郎を見て不運な者には一生不運が附纏ふ私も。……お前も。……泣く)」

下手から利七もお八重が出て驚く。

お八重「藤さん。」

利七「若旦那。」

藤吉「ゑらい事が出来た、お父さんを此奴が……。」

利七「わ……何所の何いふ奴。」

淨「さし覗く顔、見返す顔。」

チツミ顔を見交すうち利七は昔の記憶が蘇つた體。

お……。

金五郎「いや……私や旅の者や、たごへ責めさいなまれても」

此の期になつて誰が名を名乗る、唯人殺しの下手人て潔よ」

うお仕置を受けるまで、さ、藤吉、何所へなご引いてくれ」

淨「はや引揚ぐるあさり船、よその涙も白帆に追風、唄」

も樽聲もほがらかに、三浦岬にさんみうつ波は、可愛勇の」

度胸定め。

下手から清十郎が出て行違ふ。ニコくとして見送る甲を銀」

五郎は藤吉に引かれて揚幕へ去る。

◇ 中座十月大歌舞伎
中村梅玉追善興行
上演狂言投票發表 ◇

大正朝日、毎日の兩新聞紙上に於て中座十月興行の梅玉追善による遺子中村福助、政治郎に依つて上演せらるべき中幕狂言（嘗て故梅玉が演じた淨瑠璃時代物）の懸賞投票の募集を致しました處、絶大の歡迎をうけて總數一萬九千二百六十四票に達しました。

實錄先代萩（四五五二票）

伽羅先代萩（二四三三） 神靈矢口渡（二五二二） 御所櫻（一四四七） 紙治（二二九六） 合邦（八五六）
 菊畑（六七二） 太十（四八四） 那須野（四〇三） 板額（三九八） 寺子屋（三九二） 阿十（三七二）
 安達ヶ原（三三三） 重の井（三〇二） 妹脊山（二一六） 日蓮記（二二二） 白織物語（二〇九）
 白石噺（二六四） 源平布引（二二二） 近江源氏（一四〇） 山姥（二〇四） 三勝半七（九六）
 蘭平物狂（九二） 春日局（九一） 鏡山（八二） 二十四孝（八一） 吃又（七五） 以下省略。

大多數を以て『實錄先代萩』が推薦狂言として上場されることに決定を見ました。規定によつて當選者は嚴籤の上二百名に限り中座一等入場券を進呈致しました。

多數の應募者諸氏に深く感謝を致します。

大正十五年九月二十五日

松竹合名社宣傳部



CATU 空輯編

◇歌舞伎研究
雑誌の
「中座」
が飛出
して、
好劇家
の話題
になつ

たさいつても、否定されては困ります。事實前號は増刷賣切後の申込は絶版のためお断りしたことは申譯のないしたひです。わけて地方のお方に對しては今更ながら滿腔の謝意を表します。

◇こんごは中座十月梅玉追善興行に因んで「梅玉追善號」さしました諸名家の原稿が一列されたところ素晴らしいものです。

◇表紙を情趣の溢れる一枚繪としたところ。見るからに本朝歌舞伎研究にふさはしい異彩です。巻を追うて愈々歌舞伎の秘庫を啓いてゆくつもりですから、益々御愛讀を願ひ

ます。(成山生)

◇今度の表紙につかつた原畫を南木萍水さんのところに貸して貰ひに行きました。氏の芝居に關する文獻や版畫の蒐集は驚異にちかひもので、別して芝居繪の版畫は私を強く昂奮させました。

◇大きな行李の中に無數にしまはれた版畫の中から、豊國の筆になる「政岡」の繪を撰り出しました。その色彩にひそむ昔のなつかしい匂ひに、私は恍惚として失ふほごでした。次號にも氏を傾きたいご厚かましく今から、へへておます。併せて厚く、禮申上げて置きます。

◇古典な歌舞伎の世界を活かすに應はしいカットを描くにまだ不慣なもので、甘く行きませんが、書いた、號を逐うて好いものを書きたいと思つてあります。(大城生)

◇今度は創刊號に比して諸先生の御執筆を煩はしましたので、御寄稿も數多く豫定の頁

數を超過する位でした。各方面に涉つて諸家から頂戴しました「故梅玉遺聚」の御回答も併せて愛讀して下さいた事ご存じます。その内容も豊富に立派な雑誌になつたのを悦んで居ります。末筆ながら御寄稿を下すつた諸先生に厚くお禮申上げておきます。これも故梅玉丈の遺された高德によるものと思つて居ります。

◇冠頭に書かれた「お挨拶に代へて」の高砂屋さんの一文は故人の舞臺生活を知るに好材料だと思ひます。口繪や挿繪になつて雑誌を飾つて居ります故梅玉丈の在りし日の數ある面影は、稽古にも餘日のないお多忙な高砂屋さんを煩はせました。こゝに餘白ながら併せて深く感謝いたしますが「鳥江鎮也氏の「たをやめのみなご」の一文は「室津の歌」をお観劇なさる上に好參考のものご確信いたします。脚本と共に併せて御愛讀を希望します。(姥谷生)

大正十五年十月一日發行

雜誌「中座」第二編

歌舞伎研究
梅玉追善號

附脚本

「室津の歌」

□誌代は前金御拂込にてお願
申上ます
□郵券代用は一割増にて御註
文被下度願上ます

一定價金三十錢

大正十五年九月卅日印刷
大十五年十月一日發行

大阪南區久左衛門町八
(松竹合名社内)

不編輯者 姥谷久一
許發行所 成山桂三
復發行所 大阪東區和泉町一
製印刷所 合社ミカド印刷所

大阪市南區久左衛門町八
發行所 松竹合名社
電話南 一四二〇番
六六八五番

便利な芝居の前賣切符

電話にて

の御申込は必ず前賣切符發賣所専用
電話をお呼び出しの上御用命下さい
ますれば御場席決定の上遠近多少に
拘はらず早速配達いたします

御觀劇は「フレキシブル」ガイドを御利用下さい。

前賣切符發賣所 専用電話

南六三六一番	道頓堀	浪花	座
南一二七九番	同	中	座
南六九五六番	同	角	座
南六九七八番	同	辨	座
南六八九七番	同	天	座
本局八九七番	御座	文樂	座

(各座にては午前十時より開演中發賣致します)

高麗橋通心齋橋筋南入 電話本局 三三〇九番・三九九五番
各座の切符が取揃つておりますから今すぐ言つて調ひます

中薙

十月の芝居

岡本綺堂氏作
一番目 貞任 宗任 三幕

河竹默阿彌翁作

中薙 影をのこす型
さへ浅岡ながも
とき父梅玉の七
回忌に當りいづ
わも様の御投票
にもござき
實錄先代萩 御殿の場

二番目 大森痴雪氏新作
室津の歌 二幕

「雜誌中座」所載

大喜利 吉野山 竹本連中
長唄連中

中村梅王
追善興行